2012/3/11

震災を知らない子供たちへ

はじめに

2011/3/11 14:46 に発生した東日本大震災により、全てが無くなり、その直後から全てが始まった。これまで、誰も経験したことがない、最大震度 7、マグニチュード 9.0 の巨大地震が、東北地方から東関東に至る広範囲を襲い、甚大な被害を被った。地震の揺れによる被害は、建物の崩壊だけに留まらない。その後に東北地方を始め、太平洋沿岸各地を襲った津波は、町や職場や故郷、学校を飲み込み、家族を、知人を、親戚を、そして、最愛の人を、また、ペットを、家畜を、家を家財を、車を、船を飲み込み、直前まで営まれていた生活や人生の全ての思い出を一瞬の内に飲み込んだ。そして、個人の尊厳やアイデンティティーをも、持ち去ってしまった。今般、東日本大震災の被害に遭われた皆様に心よりお見舞いを申し上げますとともに、犠牲となられた方々のご冥福をお祈り致します。また、一刻も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

未曾有の大災害は、震災、津波だけではない、福島原子力発電所の放射能汚染事故、更に汚染による周辺の生活の糧である畜農水産物を汚染し、風評被害をもたらした。また、日本の製造業を下支えする「現場」も壊滅的な被害を被った。これらの一連の災害は、被災者に否応なしに襲いかかった。夢であって欲しい、悪夢のようなあの一瞬。何故、私たちだけが？。絶望感と怒りが込み上げてくるが、矛先をどこに向けたらよいのだろう。こうして、生き残ったことは、果たして、良いことなのだろうか？こんなに辛い思いをするのだったら、いっそ、死んだ方が良かったのかも知れないとも思った。生き残ってしまった自分、死ぬこともできず、明日から、どうすればいいのだろう？果たして、震災発生前のような平穏な生活に戻ることはできるのだろうか？言葉では言いようのない不安と葛藤と怒りの中、当面は、不自由な避難所での共同生活を続けなければならない。また、断続的な余震が続く、我慢しなければいけない。生き残った命を繋ぐために。

あの時以来、FUKUSHIMA は、世界的に有名になった。多くの報道関係者が詰めかけ、多くのメディアを通じて、毎日のように被災地の映像が TV に流れ、状況を刻々と報道してきた。しかしながら、全ての報道は、報道者からの視点であり、震災後の状況を語るに過ぎず、「その後」を「結果」として伝えているに過ぎない。避難所で被災されている方々の脳裏に深く刻まれた、あの時の出来事は、決して報道されることはないだろう。そして、復興が進み何時の間にかニュースでも取り上げられなくなるだろう。これはある意味良い事なのだろう。しかしながら、「あの時」のことを忘れず後世に伝える必要があるのではないか。我々は、このような被災者の方々の心のケアを目的としたボランティアに取り組んでおり、被災された方々の心の安定をはかり、ストレスを少しでも和らげ、明日への希望を描いていただくことが主たる目的である。また、リスニングのボランティアを通じて、言葉少なく語られる「あの時」の実体験を耳にすると、被災者の心の奥から、悲痛な叫びが聞こえてくる。被災者の方々は、自分の体験を語ることで、自らの気持ちを落ち着けようという心の動きを感じることができた。身内でもない、親戚でもない、ご近所でもない。ボランティアという微妙な距離を保ち、後腐れのない関係であるからこそ言えなかった話ができ、愚痴をこぼすこともできるのかもしれない。そして、ぽつりぽつりと話される体験談をなんとか、後世に伝えたい。と訴えられているようにも感じた。目前に広がっている変わり果てた瓦礫の山、「あの時」までそこで営まれていた生活がどのような物であったか、また、忘れることができない「あの時」の実体験や、後世に伝えなければならないことがあるように思えてきた。そして、何時しか、この事実を何かの形で残さなければならないといいう使命感に変わっていた。

震災を経験した我々にできることは、今後、生まれてくる「震災を知らない子供たち」に、2011/3/11 に起きた歴史的な事件を正確に伝えることだろう。そして、50 年後、100 年後にも、この事件が人々の記憶の中で風化して忘れ去られてしまわないようにしなければならない。勿論、被災された方々も、後世への語り部として、それぞれが、それぞれの言葉で伝え残すことはできるであろう。しかしながら、世代を超えた伝言ゲームの過程で、正確さが薄れて行くのではないだろうか。事実を正確に、ありのままを赤裸々に残すためには、画像や、音声メディアなど、ニュースや報道のような第三人称での記録でなく、第一人称、あるいは第二人称の記録として残したい。そのためには、活字が良いだろう。敢えて活字というメディアにこだわり、読者の想像力を活用して記憶に焼きつける。活字ならではの特性を最大限に活用することを意識して、後世に残る記録を残しておかなければならない。それが、震災を経験した世代の務めであろう。より多くの人が、ここに綴られた文字を追い、その状景を頭に思い描いて見て欲しい。多少の言い回しや表現の違いはあるが、基本的には、語彙や表現をそのまま、表現することで、「あの時」何が起きたのか。そして、その前後で何が変わったのかを表現した。是非、心にとどめておいて欲しい。また、避難所、仮設住宅で暮らしている被災者の方々の生活を肌身で感じてもらいたい。そして、願わくば、日本人として、この震災をどのように捉え、自分には何ができるか？何をすべきかを自問して欲しい。この国難に対する日本国民として、一人ひとりが、コミットメントを求められているのではなかろうか？自分には関係ない、自分さえ良ければよいという考え方では、日本人としての誇りが持てないのではなかろうか。ゆっくりと考えて欲しい。

5 月の GW も明け、震災から 2 ヶ月余りの時を経て、全国から寄せられる多くの支援物質や暖かい励ましのメッセージにより、復旧から復興への足がかりが確実に築かれつつある。初期の支援活動では、救急医療を始め衣食住など、目に見える部分が先行して支援される。その後、衣食住が落ち着いた頃、見えない部分、つまり、心の問題がクローズアップされてくるだろう。復興の道程は長く、永い目で見ればボランティアは、一時的な支援に過ぎない。ボランティアが引き上げた後も、継続的に活動し続けるためにも、地域主体で展開されるべきであろうし、その原動力は、被災された方々自身であろう。被災された方々一人ひとりが、明日への希望や夢を持てるようになることであり、そこから生まれるエネルギーであると思う。どうか一日も早く前向きなマインドを取り戻していただきたい。

本書は、私自身のボランティア体験記である。いろいろな形で、ボランティア活動に参加してきたが、ここでは、参加に至るアプローチや手続きの違いで以下のよう分類して捉えている。当初、関連団体や手続きが異なり、アプローチが違うことで、別の活動をしているような錯覚もあった。しかしながら、突き詰めてみると、結局、ボランティアに携わる心は同じである事に気が付いたが、説明の都合上、本書では、それぞれを独立した章立てをして、章毎に時系列で記載している。尚、後続の頁に、これまでのボランティアの来歴とスナップ写真を記載した。本文と併せてご覧いただきたい。

第 1 章　労働系(瓦礫撤去、泥カキ、除草)
第 2 章　心のケア(リスニング)
第 3 章　生活支援ボランティア(リラクゼーション)

東日本大震災に関し、私自身が、各種のボランティアに参加し、被災地で感じ、学んだことを紹介しながら、現地での被災者の方々の体験談を紹介している。単に、事実を述べるに留まらず、そこには、報道ではなかなか伝えられてない「生の声」があり、「本音」があった。

これらをできるだけ忠実に再現する形で紹介することに務め、そこに居合わせた私自身が何を思い、何を感じたかを綴った。そこから、現地の表面的な様子だけでなく、現地で暮らす方々の心の内にある思いを感じとっていただきたい。また、復興の道程は長い。被災された方々の心のケアが如何に大切であり、継続的な支援が必要であることを感じとっていただきたい。どうか、皆さまのご協力をいただき、支援の火を絶やさず、末永いサポートをしていきたい。3/11 震災から 1 年が経過した。関係者の懸命なご努力で、復興の足音が聞こえてきた。しかしながら、復興の進捗のバラツキや格差、また、必ずしも、進んでいるとはいえないような地域や分野も残っている。3/11 を風化した過去の物、歴史上の１頁としないためにも、本書に触れた読者が、現地への思いを再認識していただき、復興の火を燃やし続けることができれば、幸いである。

2012 年 3 月 11 日
震災後、1 年を迎える日

ボランティア来歴

	日程	訪問先	作業内容
1	2011/06/18-19	宮城県　東松島市　赤井、大曲地区	泥カキ(ボランティアバス)
2	2011/07/23-24	宮城県　石巻市　中屋敷地区	瓦礫撤去(ボランティアバス)
3	2011/08/27-28	福島県　相馬市、南相馬市、郡山市	心のケア(Team Japan 300)
4	2011/09/10	福島県　相馬市、石巻市	心のケア(Team Japan 300)
5	2011/09/17-18	宮城県　東松島市　野蒜地区	除草作業(ボランティアバス)
6	2011/09/19	福島県　いわき市	生活支援(イベント手伝い)
7	2011/10/08-09	宮城県　東松島市　野蒜地区	墓地清掃(ボランティアバス)
8	2011/10/29-30	宮城県　東松島市　野蒜地区	野蒜復興祭(サポートチーム G)
9	2011/11/5	福島県　いわき市　小名浜地区	仮設住宅見学
10	2011/11/23	福島県　いわき市　小名浜地区	生活支援(ツボ押し、足湯)
11	2011/11/26-27	宮城県　東松島市　野蒜地区	除草、泥カキ(ボランティアバス)
12	2011/12/4	福島県　いわき市　小名浜地区	生活支援(ツボ押し、足湯)
13	2011/12/18	宮城県　各地	慰労ツアー(ボランティアバス)
14	2011/12/23-24	宮城県　東松島市　野蒜地区	瓦礫撤去(ボランティアバス)
15	2012/01/07	宮城県　東松島市　野蒜地区	復興支援(ボランティアバス)
16	2012/01/15	福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅	生活支援(ツボ押し、足湯)
17	2012/01/21	宮城県　東松島市　宮戸島	瓦礫撤去(ボランティアバス)
18	2012/01/29	福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅	生活支援(ツボ押し、足湯)
19	2012/02/04	福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅	生活支援(ツボ押し、足湯)
20	2012/02/18	福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅	生活支援(ツボ押し、足湯)
21	2012/02/10-12	宮城県　東松島市　野蒜地区	復興支援(ボランティアバス)
22	2012/03/04	福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅	生活支援(ツボ押し、足湯)
23	2012/03/10-11	宮城県　東松島市　野蒜地区	復興支援(ボランティアバス)

[1] 2011/6/18-19 宮城県 東松島市 赤井、大曲

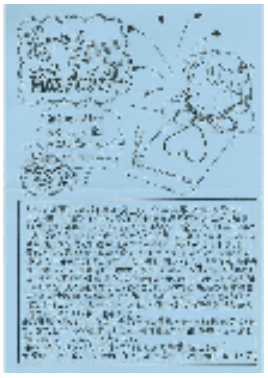
[2] 2011/7/23-24 宮城県 石巻市 中屋敷地区

[3] 2011/8/27 福島駅前(福島駅前[1.56μSV/h])、南相馬市 石神小学校(25km 圏内)

[3] 2011/8/28 福島県 郡山市 仮設住宅

[4] 2011/9/10 宮城県 石巻市 渡波(わたのは)小学校

[5] 2011/9/17 宮城県 東松島市 野蒜小学校、小学生が描いたカラフルな土嚢袋



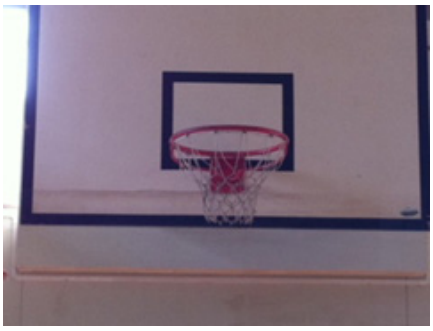
[5] 2011/9/18 宮城県 東松島市 仙石線 北大仏トンネル付近(除草前/後)

[5] 2011/9/18 宮城県 東松島市 仙石線(野蒜⇔陸前小野間)

[6] 2011/9/19 福島県 いわき市 マジックショー手伝い

[7] 2011/10/8 宮城県 東松島市 野蒜地区 共同墓地

[7] 2011/10/9 宮城県 東松島市 野蒜小学校体育館の献花台、バスケットゴール



[7] 2011/10/9 宮城県 東松島市 野蒜地区 共同墓地 御先祖様も被災

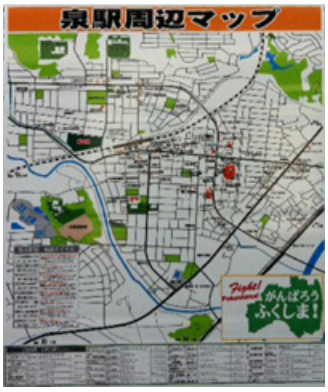
[8] 2011/10/29 宮城県 東松島市 野蒜小学校(野蒜復興祭 前日)

[8] 2011/10/30 宮城県 東松島市 野蒜小学校(野蒜復興祭 当日)

[8] 2011/10/30 宮城県 東松島市 仙石線 東名駅前 K.S さんご自宅跡

[8] 洞安寺、K.S さんのお母様と奥様の御尊影

[9] 2011/11/5 福島県 いわき市 泉玉露(いずみたまつゆ)応急仮設住宅見学



[10] 2011/11/23 福島県 いわき市 泉玉露応急仮設住宅

[11] 2011/11/26 宮城県 東松島市 野蒜駅

[11] 2011/11/26 宮城県 東松島市 野蒜駅付近

[11] 2011/11/27 宮城県 東松島市 宮戸島 月浜付近

[11] 2011/11/27 宮城県 東松島市 宮戸島 月浜応急仮設住宅

[11] 2011/11/27 宮城県 東松島市 宮戸島

[12] 2011/12/4 福島県 いわき市 泉玉露応急仮設住宅

[13] 2011/12/18 宮城県 東松島市 大曲地区

[13] 2011/12/18 宮城県 石巻市

[13] 2011/12/18 宮城県 東松島市 野蒜駅

[13] 2011/12/18 宮城県　東松島市　宮戸島

[14] 2011/12/23-24　宮城県　東松島市　野蒜地区　松ヶ島海鮮堂

[15] 2012/1/7　宮城県　東松島市　野蒜地区　松ヶ島海鮮堂

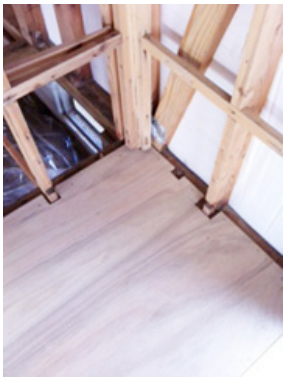
[16] 2012/1/15 福島県 いわき市 泉玉露応急仮設住宅

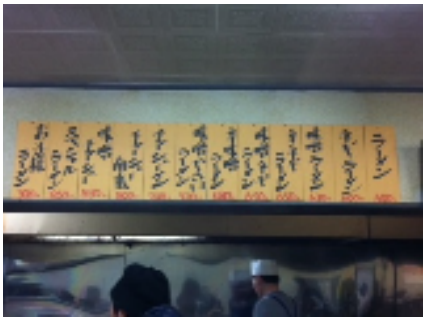
[17] 2012/1/21 宮城県 東松島市 宮戸島

[18] 2012/1/29 福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅 <画像なし>

[19] 2012/2/4 福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅

[20] 2012/2/11-12 宮城県 東松島市 野蒜地区 松ヶ島海鮮堂



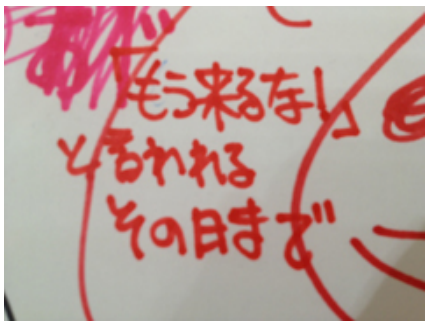


[20] 2012/2/11-12 宮城県 東松島市 野蒜地区 松ヶ島海鮮堂

[21] 2012/2/18 福島県 いわき市 泉玉露応急仮設住宅 <画像なし>

[22] 2012/3/4 福島県　いわき市　泉玉露応急仮設住宅

[23] 2012/3/10-11　宮城県　東松島市　宮戸島



[23] 2012/3/10-11 宮城県 東松島市 野蒜海岸

目次

はじめに

ボランティア来歴

第 1 章　労働系(瓦礫撤去、泥カキ、除草)

第 2 章　心のケア(リスニング)

第 3 章　生活支援ボランティア(リラクゼーション)

第 4 章　震災を知らない子供たちへ

謝辞

第 1 章　労働系(瓦礫撤去、泥カキ、除草)

「百聞は一見にしかず。」まず、現場に行こう。現場行ってみなければ始まらない。このような思いに至ったのは、4/11、ちょうど震災から、1 ヶ月が過ぎようとしていた頃だった。それまでにも、断続的な余震が何度もあり、地震予報や、津波情報には敏感になっていた。そんな中、4/11 には、少し大き目の余震があった。ニュースのテロップで、「津波に注意」と言う文字が流れ。ふと考えた、このテロップを見ている被災地の皆さんは、どんな気持なんだろう。泣きっ面に鉢とはまさにこのことだ。「逃げろ」といわれても、まだ電気が復旧していない地域では、辺りは停電で真っ暗であろう。何処へ逃げればよいのだろう。仮にこの事態が、自分に襲いかかるものだったら。。。とその時、突然のように、今回の震災、その後に起こった経緯を、「第一人称」として捉えようとしている自分に気がついた。いても立ってもいられない。何とかしなければ。どうにかしなければ、とはいえ、自分に何ができるだろう。と気持だけが先走る。先ずは、現地に出かけてみよう。どんな形でもいいから、現地に出向き、この目で現地の状況を見て感じよう。それが、全てにスタートラインではないかと思った。いろいろなボランティアへの参加形態があり得るし、これが正解であれが間違っているというものでもない。しかしながら、「現地を見て何ぼ。」と思い、先ず出向くことを決意した。

そして、宮城県のボランティアセンターなどに直接電話をかけるも、他県からの個人ボランティアは受け付けていないとのこと。また、個人が単独で出向くのはリスクが高いばかりか、足手間取りになりはしないか。現地の事情、宿、食事、足など、分からない事だらけだ。では、先ずは、何処かのボランティアツアーに潜り込もう。ちょうど、5 月の GW 前後であり、いろいろなツアーが計画されているようだ。インターネットで、ボランティアに取り組んでいる団体、協会などの情報を集め、どこかのツアーに参加して、現地に入る計画を立てた。その傍ら、いろいろな立場でのボランティアがあることを知り、兼ねてから興味があり勉強していたカウンセリング技能を活かした、「Team Japan 300」という心のケアに関するボランティアがあることを知った。ただ、現場の状況が状況だけに、「カウンセリング」ではないだろう。先ずは、お話しを聴く、聴くことで少しでもストレスを軽減してもらったり、人間関係を作ること。これが、主たる目的だろう。これは、私にとっては、自分が試される試練の場であると考えた。カウンセリングの勉強で一応、「傾聴」の勉強もしたが、実践という意味では何も経験がない。傾聴の前に、先ずは、自身の人間性が問われるだろう。素の自分をさらけ出し、受け入れていただくことができるか？私にとっては、自己への挑戦でもあった。

「Team Japan 300」は、心理カウンセラーの養成校を母体としたボランティア団体だ。関西での阪神淡路大震災での経験を活かし、避難所、仮設住宅などを訪問して、被災者の話を「聴く」いわゆる「リスニングボランティア」を行っている団体だ。早速、都内にある事務所に出向き、説明を聞きた。「継続的な支援」がキーワードであり、何か、『本物』を感じた。「継続的」という趣旨にも同意し、その場で会員登録を済ませ、現地入りのスケジュール調整を待つ。原則的に 3 人で 1 チームとし、300 チームを募る。この 300 チームというのが、「Team Japan 300」という名前の由来だ。都合チーム 1000 名規模のボランティアで、東北地方に点在する全ての避難所、仮設住宅を回る計画だ。しかしながら、なかなか現地入りの調整がつかない、いたずらに時間が経ち、このままでは、思いだけで終わってしまうのではないかという焦りから、別の手段での現地入りを模索した。ちょうど、地元の観光会社である石塚サン・トラベル株式会社（以降、石塚観光と略す）から、ボランティアバスツアーの募集があることを知り、早速、申し込んだ。

4/11 に思い立ち、いろいろな伝を辿りアプローチをするも、なかなか、「現地入り」が実現しないまま、不本意にも、5 月の GW を迎えてしまった。GW 中はいろいろな形で、全国各地

からボランティアが殺到したようだ。しかしながら、残念ながら、不慣れで、観光気分、お客さん気分のボランティアも多く詰めかけ、このために現地も混乱し、トラブルや不信感を募らせてしまうような場面があったことなどの報道を横眼にしながら、現地への思いを募らせていた。GW のお祭り騒ぎのようなドタバタも収まった、これからが、本格的なボランティアだ。兼ねてから、申し込みをしていた、石塚観光の主催の、1 泊 2 日もボランティアバスの決行が決まった。行き先は、宮城県東松島市だ。ボランティア初体験、逸る気持を抑え、先ずは、ボランティア保険に加入して、準備万端で備えよう。

震災直後から、情報が絶対的に足りないし、情報が錯綜することによる弊害もあったのだろう。情報を整理し効果的に伝えることが重要であるのは理解するも、それとは、違った次元で、現地で求められる物がある。つまり、情報だけでは、うまく回らない、回す人材も不足しているし、正確な情報を収集するプロセスも不完全なのだろう。結局、現地の要望に合致し、現地の問題が解決しているか？という観点に立てば、はなはだ疑問が多い。震災後、各種の IT サービスを活用した情報交換サイトが立ち上がり、SNS などのリアルタイムの情報がうまく活用され、多くの情報が交換されている。勿論、これらの情報収集が無駄であるとは言わないし、情報を集約して整理して配信することが重要であることを認めるが、これらの情報活用は、ほんの一場面に過ぎず、恐らく数%のレベルではないだろうか。これを現地との温度差というか、温度差を通り越して、全体的にとらえるならば、何処かで「空振り」をしている感は否めない。「IT を活用して、現地の情報をリアルタイムで交換して。。」なる唄い文句はいいが、幻想に近いとも思える。実際、避難所、仮設住宅を訪問してみると、PC も、インターネットへの接続回線もない。現場での入力なんてとてもできない。また、避難されている方々は、比較的、高齢の方が多く、不慣れな携帯電話や PC での情報交換もままならない。では、ボランティアが現地のボランティアセンターなどの拠点で操作したり、入力や情報更新を代行すればよいではないか。確かにある一面では正しい。しかしながら、ボランティアの絶対数も少ない上、支援者も入れ替わりで活動しているので、継続的な対応は困難である。また、何よりも先に、負傷者の手当て、物資の仕分け、炊き出しなどが優先するのは当然のことだろう。このため、PC 入力や情報検索はとてもできない状況であり、折角、有効なサイトが立ち上がったとしても、活用されていいない。活用されないのではなく、活用できないのである。これらの状況は、現地に行ってみないと感じとれないし分からないだろう。その意味でも現地入りの意義は大きいと感じた。

入力しないことが悪いのではない。むしろ、この種のサービスを提供する側が、現地の状況を配慮し、現地の負担が最小になるような簡便な手段を提供し、ちゃんと入力できる環境やシステムを設計しなければいけないのではなかろうか。結局、多くのボランティアが訪れるも、現地では、このような不確かな情報を元に活動してしまい、振り回されている場面も多く見聞きした。システム、サービス云々ではなく、もっと、現場に密着した活動が求められているのではなかろうか。まして、「いいね！」や「シェア」だけでは復興しないのである。「いいね！」や「シェア」で復興するのであれば、1 日に百回でも千回でも「いいね！」すれば良い。ネット上で情報を共有し、現地の状況をアピールすることで、閲覧者の意識を高めることは否定はしないが、考えていただきたいのは、「いいね！」や「シェア」が、実際、現地にどのような形で反映され、支援に繋がっているのだろうか。1 クリックすることで、被災者の方々が、どれだけ心が癒され、ハッピーになれるのだろうかと考えてしまう。マーケティングの理論では、情報発信とそれを広めるインフルエンサーは必要不可欠と説く。しかしながら実際に購買行動につながるのは、恐らく 1%にも満たないだろう。まして、ボランティア活動のような無償奉仕の場合、物理的、時間的、体力的な制約も加わり、行動につながるのは、限りなく 0%

に近いだろう。クリックするだけならだれにでもできる。ささやかなボランティアという気持ちかもしれないが、正直、復興には何の役にも立っていないだろう。その気持ちがあり、ちょっとした努力で、上記の制約をクリアすることができるのであれば、是非、現地に出向き、1 カキでも泥をカキ出してもらいたい。きっと、この様な具体的な体験を通じて、考え方が変わり、気が付くことがあるだろう。一言、言わせていただけるのであれば、申し訳ないが、「志」が違うと感じてしまう。今風に言えば「チャラい」という表現になるかも知れない。

とはいえ、この様な IT 活用を否定するわけではなく、むしろ、大いに活用すべきである。「IT とハサミは使いよう。」であり、使う立場で考えれば、必ずやベストな解決策があると信じて、事例に学びたい。うまく回っていない例として、不確かな情報の錯綜により、次のような弊害もあった。

<事例 1>

一過性の情報を元に、不足する資源が被災地に殺到する。当然、使い切れず余り、保管スペースを圧迫する。他の避難所に回すことを考えても、何処の避難所が不足しているのかも分からず、物流の手配もできない。折角支援いただいた物資を止む無く、捨てなければならない。また、当初の物資不足から、大量の古着が寄せられた。被災当時、一定量の古着は有効に活用されたが、一巡すれば足りる。結局、余る。支援を受ける側に気持ちに立てば、やはり、新しい物の方がよいので、新しい物資は活用されるが、古い物は残る。大量に余った古着を前に、これは、支援という形で美化された、「不要物の廃棄」ではないかとも思えてくる。PC の寄付に関しても、同様なことがある。梱包を開いてみると、キーボードがない、マウスがないなど結局、使い物にならない「ゴミ」が、避難所の片隅に積み上げられている。廃棄するにも人手と手間がかかるのである。また、現地のスタッフは心暖かい方も多く「折角、支援いただいた物を棄てるわけにはいかない」と。そこで、現地に入る(外様の)ボランティアが、廃棄作業を行う。支援する側のちょっとした気遣いで、このような「矛盾」や「無駄」が、無くなるのであろう。

<事例 2>

現地のボランティアセンターでは、避難所毎に、避難者の名簿を管理している。大型の施設では、1000 人を超える規模であるが、昨今、仮設住宅への移行が進み、頻繁な更新が必要だが、名簿の更新が追い付いていない。実際、数 100 名いらっしゃるというネット上の情報を基に、現地を尋ねてみると、殆ど移行された後であり、これは、「名簿上の話」ということだった。行政やマスコミなどは、このような、「名簿上の数値」で動いており、物資の供給などでも矛盾や無駄が生じるのである。また、行政から被災規模を表す指標として、「避難世帯の数」が報告されているが、実際に必要な数値は、「避難者の頭数」なのである。

勿論、ボランティアは、「全体」と「個」を見る必要があり、両者のバランスである。個だけをみると全体のバランスが崩れ、全体を見ると個に不満が出る。このバランスと調整が難しいのである。また、「公平性」や「ルール」が、時として、制約事項になる場合もある。例えば、一般住居用の家屋には、要望を挙げ、自治体が手配したボランティアが入って、片付けが進むが、同じ様に津波の被害を受けた商店などを営んでいた営業用に施設の場合、ボランティアが入れない規則があるらしい。このため、瓦礫の片付けが進まず、個人ベースで片付けるしかない。とはいえ、高齢者の方も多く、個人で片付けられるものでもなく、焦燥の声も聞こえてくる。これは、「ルール」なのか、「差別」なのか。このような地元の「生の声」を如何

に吸い上げ、対処するかが今後の課題であろう。津波のような自然災害が公平に襲ってくるはずもないし、被害の度合いが公平というのはあり得ない。「公平」というのは、サービスを受ける側から評価する「品質」であり、サービスを提供する側の物差しではない。そして、品質には、作業の出来栄えだけでなく、待ち時間や支援の継続性も含まれる。どのようなサービスでも、いわゆる、「プレ」と「アフター」も重要ということか。最近、仮設住宅などで、「自治会」を組織し、現地のコミュニケーションの円滑化を図っている話を耳にする。やっとこのような活動が回せる段階に入ってきたのだろう。

【2011/6/18】

宮城県東松島市の大曲地区に入った。ここは、おびただしい瓦礫の山や船が陸地に乗り上げた映像が TV などでも放映され、津波の被害が大きかったことでも有名な地区である。震災から既に、3 ヶ月が経過しており、瓦礫は随分撤去されている様子だが、住宅地を襲った津波は、住宅地の隅々までヘドロを運んだ。今回の活動は、赤井地区の住宅地での側溝の溜まったヘドロ除去する作業（いわゆる泥カキ作業）だ。幅約 20cm、深さ 50cm の側溝にほぼ、ぎっしりと泥が詰まっている。不慣れかつ体力不足で、怪我をしてはいけないと、出発が決まった、1 ヶ月前から、毎日 20 回、左右の四股を踏んで足腰を鍛え、鉄アレイによる上腕と腹筋の筋トレで、肉体労働に備えた。また、暑さ対策、熱中症と脱水症対策で、いろいろな冷感グッズを準備していざ出陣。

現場は、閑静な住宅地。あの時、津波で、170cm まで水に浸かった。水は引いたものの、屋内にも泥が堆積し、とても住める状態ではない。部屋の中は畳を上げ、壁紙を剥し、どの家も補修待ちの状態で、大工の手が回っていない。表通りに面し、津波を直接受けた家屋は、一階部分が柱だけになっている所もある。

作業開始前に、全員で黙祷をして、経験者より作業手順のレクチャを受ける。側溝の蓋を開け、泥を取り出し、消毒して蓋を閉める。言葉で書けば、これだけだが、側溝の蓋は重く、泥も水を含んでチョコレートムース状になっており、ズッシリと腰に響く。腰を痛めないように慎重に作業した。初日はさすがに厳しい。初夏の暑さで、軽い脱水症状で少々ばて気味だったが、「I will not complain.」がボランティアの基本的なマインドである。同行のメンバーのチームワークで支えられた。

【2011/6/19】

二日目、先ずは、ボランティアの拠点となっている、「大曲市民コミュニティセンター」に出向く。今日も昨日に引き続き、「泥カキ」作業。現場は、昨日の作業場所から数ブロック離れた大曲地区だ。側溝の蓋を持ち上げる器具がある。これは、効率がよい。（更に、指を挟む危険も少ない。こんな器具があるのなら、昨日も使えばよかった）暗黙の役割分担で、同じチームになった中国から参加している青年とペアを組んで、蓋の開け閉めを担当した。器具を使って片っ端から、蓋を開け、終わった箇所をドンドン閉めて行く。少しは慣れてきたか、手際よくこなせる。ただ油断は禁物。慣れの裏側には、事故が隠れている。適時休憩をとりながら、淡々と作業を進める。この 2 日、微力ながら精一杯活動し、予定以上の成果を出すとともに、清々しさとチームワークの偉大さを実感できた。ただ、達成感には至らない。その理由は、我々が活動した地域はほんの一部に過ぎないからだ。周りにはまだまだ、ボランティアも入れないような手付かずの瓦礫や泥の詰まった側溝が残っている。

側溝に泥が詰まっていると、雨水が流れず、下水パイプを悪臭と共に逆流する。これから、梅雨と台風のシーズンを控え、一日も早く、「下水」を確保し住民の方に安心を届けたい。今

後、このような活動が、どれだけ必要なのだろう。いつまで続くのだろう。気が遠くなる思いをも持ちつつ、現地を後にした。これは、多くのボランティア参加者が経験することだろう。そして、帰路、各々が、心に誓う。「また、出向く。」と。そして、自身もリピーターと化す。

ボランティアから帰り、日常の生活に戻る。ここでのミッションは、現地で見たこと、感じたことをより多くに人に伝え、継続的な協力と参加を呼びかけ、賛同者を募ることだろう。実際、社内外のいろいろな非公式なコミュニティで、「報告会」を行い、現地の様子を生々しく伝えてきた。中には、「偽善者ぶりやがって」と見られる向きもあるだろう。だが、伝え、広め、共感を誘わなければならない。偽善者と思う人には、思わせておけばいいではないか。

【2011/7/23】

泥カキの初体験から、約 1 ヶ月の時間が経ち、筋肉痛も和らいだ。同時に心の準備もできた。そろそろ、出向きたい。Team Japan 300 の方は、相変わらず動きがない。止む無く、前回お世話になった石塚観光のボランティアバスツアーで再度出向くことにし申し込んだ。この石塚観光は、地元の旅行会社なれど、石巻市とご縁があるらしく、逸早く、宮城入りを計画し、5 月の GW から、精力的にバスツアー企画し実施している。私のように個人としてボランティアに出向きたいと思っても、いきなり現地に入ってしまうと、現地の土地勘もないところで、右も左も分からないだろう。その点、このバスツアーに参加すれば、被災地までの足(交通手段)と宿(ホテル)を確保してもらえるので、これらの心配をせず、ボランティア活動に専念できるので非常にありがたい。同行のメンバーも同様な思いで、石塚観光のボランティアバスツアーのお世話になっている。震災以来、宮城県内へボランティアを送り込んでいる数としても、恐らくトップクラスだろう。実際、バスツアーのリピータも多く、参加者同士で多くの繋がりを作ることができた。石塚観光の社長曰く、「現地から『もう、来るな』と言われるその日まで、ツアーを継続する」この力強い言葉に、並々ならぬ志を感じ、敬意を示すと共に、このツアーに参加する喜びを感じている。

今回は、前回(6 月)出かけた東松島市に隣接する、石巻市。前回同様の泥カキ系の力仕事だ。例によって先ずは、ボランティアセンターへ。この地域では、ラブホテルがボランティアセンターになっている。場所柄、観光バスで来ることは想定外なのだろう。狭い道を何度も切り返して駐車する。さすが、プロの運転手だ。1 階の駐車場は、炊き出しと簡易浴槽になっている。考えてみれば、ラブホテルの構造は、避難所には打ってつけの構造だ。ボランティア用に飲料が無料で配られており、遠慮なくいただき、水分を確保。現場までは、バスで移動だ。今回の泥カキは、側溝ではなく、石巻港に隣接する地区にある集合住宅(アパート)の 1F 部分。1F の天井近くまで海水と泥を被っているので、1F 部分は壊滅的かつ、家財が泥まみれで瓦礫化している。これを屋外に撤去する作業だ。周りをみると、車がひっくり返しになって屋根に乗っていたり、柱や壁がなく家の形をしていないほど崩壊した家屋や、窓にピアノが突き刺さっていたり、柱一本で 2 階を支えている家とか、想像を絶する光景が広がる。一体ここで、何が起こったのかと思ってしまう。ただ、このように僅かに残っている建造物は比較的被害が少ない物なのだろう。殆どの家は、完全に瓦礫と化し、既に、撤去されており、基礎のコンクリートの枠だけが残っていたり、完全に「更地」になっている。Google Map の航空写真で見てみると、ちょうど、Sim City というゲームで町が破壊されたような状態だ。これが、自然の力だ。人類は、大自然の猛威の前になす術もなかったのだ。

今回の瓦礫撤去の作業は、屋外の作業ではないので直射日光は避けられるが、屋内は風通しがなく暑さと臭気との戦いだ。海水と泥に浸かったマットレスは、ちょうど、水を吸った高野豆腐を大きくしたようなう物で、ズッシリと重い。畳を剥すと、床が抜けそうに腐っている。

床の上にも、50cm 程のヘドロが堆積しており、スコップで、ひとカキ、ひとカキ土嚢に詰めて運び出す。泥を撤去したフローリングの上は、ゴム底ではツルツルに滑る。転ばぬよう細心の注意をしながら、黙々とバケツリレー方式で、瓦礫を屋外に運び出す。体中が泥まみれになり、1 軒分を約 10 人で取り掛かり、半日で片付ける。ただ、この時期に参加するボランティアは、殆どが経験者である。恐らく、私と同じ気持でリピータとして参加されている兵だ。このため、作業の勝手も熟知しており、恐ろしく手際がよい。また、初対面であるにも関わらず、阿吽の呼吸でそれぞれの役割分担が決まり、お互いに声を掛け合って、スムースかつスピーディに作業が進む。即席ではあるが、理想的なチームが出来上がっている。作業中、瓦礫に紛れている写真などの「思い出の品」を瓦礫と一緒に捨ててしまわないよう、遺留品として別途保管しておく、そこには、入学式、七五三など、家族の幸せな笑顔が写っている。この津波は、どれだけの幸せを持ち去り、どれだけの不幸と苦痛、そして挫折感とストレスを置いていったのだろう。

昼食の休憩後、作業に取り掛かった、13:34、宮城県沖で震度 5 強の地震が発生した。一旦、作業を中断して、屋外に出て携帯電話で地震情報を収集する。ここは、石巻港から、500m くらいだろう。もし、ここで、津波が襲ってきたら、高台までダッシュしなければならないだろう。一瞬、Panic 状態になる。5 分後、幸い、津波注意報は発令されず、作業再開。それにしても、緊張の一瞬だった。改めて、3/11 の、津波が来るまでのわずかな時間を疑似体験したことになる。結局、この短い時間には何もできなかった。もし、本当に、津波が襲ってきたら、あっという間に身の丈を覆うような津波に巻き込まれ、自分自身も瓦礫の一部になってしまうのだろう。家が、破壊され、家族がバラバラになり。。。その恐怖を思い、瓦礫の中の遺留品を見ながら、一瞬、作業の手を止める。ここで住んでいた人はどんな様子だったのだろうか？亡くなってしまわれたのだろうか、それとも、どこかで生きていらっしゃるのだろうかと考えてしまう。ただ、感傷に浸っている暇はない。ボランティアの志を一つにし、最大限のパフォーマンスを出す。久しぶりに「いい汗」をかいた。

【2011/7/24】

二日目は、昨日のアパートに程近い、中屋敷にある未着手の空き地にある瓦礫の撤去だ。元は、畑だったのだろう、そこに、津波が瓦礫とヘドロを運んできて、置いていった。自販機、自動車などが、無造作に転がっている。自衛隊も手をつけていない状態。つまり、何が出てくるか分からない。仮に遺体などが出てきた場合、その場で作業中止もあり得る。何故、重機を使わないのだろう。現場に 1 歩踏み入った瞬間その理由がわかった。そこには、約 1m 位の厚さのヘドロが堆積しており、ブヨブヨの状態で足場が悪い。これでは、重機は使えないだろう。まさに、人手による人海戦術が頼りだ。他県から観光バスで駆けつけた団体と合流して、一気に取り掛かる。男手 10 人弱で、自動車の移動を試みた。「せーのっ、。。。。。」、「せーのっ、。。。。。」。丈夫な角材や、パイプを「梃」に使って、文字通り、英知と総力を結集して試みたが、タイヤが泥に埋まって動かない。自動販売機に至っては、びくともしない。やはり、人手では限界がある。大物は諦め小物をどかした後、堆積したヘドロを剥す。剥すといっても、約 200 坪の土地に、1mの厚さで堆積しているヘドロの量は、ダンプカー何台分に相当するだろうか。いずれにしても、想像を絶する量である。ここでも、自然の猛威を感じずにはいられない。

作業現場(畑)に隣接する 1m 位小高いとことにお宅があり、お庭をボランティアの休憩場所として使わせていただき、水道やトイレなども使わせていただけるらしい。片付けが進む

のは良いが、毎週のように、ボランティアが出入りし、気を使われるだろう。休憩時間、玄関先で、「その時」の様子を伺うことができた。

◆石巻市 80 代女性
「先ず、最初の波は、南側からあの林(南面を指差し)を乗り越えて来た。」
「バキバキという物すごい音がして、林の中を(津波が)通過しているんだなと思った。」
「(瓦礫は)林でせき止められたのだろう。」
「(水は)ここの低いところ(足元を指差し)に溜まって、家にはこなかった。」
「暫くすると、東の方でゴーッツという凄い音がした。」
「玄関を開け東を見たら、あの(東側を指差し)隙間から、来たので思わず、家に入った。」
「最後は、この道に沿って、一気にいろいろな物が流れてきた。」
「家の中にも、水が入り、この辺(玄関を開け、玄関ポーチの 2m 位の高さを示し)まで来た」
「1 階は、滅茶苦茶になったけど、泥をカキだし、畳を入れ、壁紙を替え。。。。」
「やっと整理がついて住めるようになった。」
そこへ、ボランティアが瓦礫の中から、泥まみれの赤ちゃんの「ガラガラ」を見つけて
「これは、お宅の物ですか？」
ボランティアにとっては、素朴な質問なのだろう。
「家には子供はおらんで、どこかのお宅のが流れて来たんだろ。」
一瞬、お婆ちゃんの顔に陰りが見えたような気がした。
もしかしたら。。。考え過ぎだろうか？庭先には、小さなバケツとスコップのおもちゃがあったが、それ以上は聞けなかった。

一般のボランティア参加者を責めるわけにもいかないだろう。ただ、善かれと思ってやったことが、どれだけの影響を及ぼすだろうか？相手にはどのように受け止められる(可能性がある)だろうか。ちょっと考える余裕があれば、この様な危険は避けられると思う。この場合、敢えて「言葉」にする必要は無いだろう。「遺留品」として纏めておいて、本人が選別し仕訳するかたちであろう。「遺留品」は本人にとって「懐かしい品」であると同時に、「思い出したくない物」である可能性もある。これは、ボランティアが決めることではなく、本人が決める話である。「遺留品」=「懐かしい品」と短絡的に解釈することは危険であり、推察しても答えはない。ボランティアとしては、感情を移入せず、淡々と作業を進めるだけである。

偶然とはいえ、貴重なお話しを聞くことができた。それまで、津波は、一気に来たものだと思っていた。ところが、このお話しによると、津波は何度も、違う方向からやってきて、その度に瓦礫とヘドロを置いていった。膨大な瓦礫とヘドロ、とても、一人で片付けられない。ということで、ボランティアをお願いしたとのことだが、ボランティアとはいえ、見ず知らずの人間が、庭先に入ってうろつくわけだ。「お気使いなく。」とお声掛けはするものの、実際には、話しをしたり、化粧をしたり、洗濯物や見えるところを片付けたり、いろいろな面で気を使われているに違いない。相手の立場で物を考え、気持を察知した立ち振る舞いをしたいものだ。リッツカールトンホテルのラグジュアリー品質のホスピタリティは必要ないかも知れないが、ちょっとした気遣いをするかしないかでは大きな違いがあるだろう。

今回は、1 軒単位あるいは、この区画というように範囲が限定された作業でもあり、成果が見えやすいこともあり、前回の側溝の泥カキよりは達成感があった。しかしながら、今後の復興の見通し感はまるでない。本当に、このような作業がいつまで続くのだろう。復興には何年掛かるのだろうか？

【2011/9/17】

9 月に入り、被災から半年が経とうとしている。被災された方々も避難所から仮設住宅への入居がはじまっており、既に、閉所になっている避難所もある。また、瓦礫の撤去も進み、5 月連休の頃に比べるとかなり片付いてきた。しかし、まだ、手つかずの地域があったり、やっと、ボランティアが入ることができるようになった地域などが点在する。

今回も、6 月に出向い時に続き、東松島に入った。宮城県内でもまだまだ、瓦礫や泥が残っている地区があるのだろう。この辺りの海岸線は美しい。震災がなければ、今頃、風光明媚な景色を楽しめたことだろう。一日も早く復興させ、いつの日か、復興後の被災地に「観光」の目的で訪れる日を楽しみにしながら。松島は、日本三景にも数えられ、禅語を引用すれば、まさに、『雪月花』の『月』だそうだ。今回訪れたのは、仙台と石巻を結ぶ仙石線の沿線の野蒜(のびる)地区だ。仙石線は、松島など優美な海岸線を這うように走る。つまり、津波を直接受け、甚大な被害を受けているところが多い。野蒜地区も。殆どの家屋は、1 階部分まで水に浸かり、避難所ですら、1 階部分は使えなかった。、半年が過ぎた今でも、未だ、水が引いていない地区があり、ポンプで海水を汲み出していた。

今回も石塚観光の主催するボランティアバスツアーを利用して参加した。ボランティアバスツアーでの現地入りは、都合、3 回目だが、この時期、参加者の殆どがリピータとういう兵揃い。顔見知りも多く、途中、高速道路の SA などで休憩に際も、石塚観光のバスを見つけて、「こんにちは～」って感じだ。今回の活動場所は、東松島市の野蒜地区、東名駅(とうな)付近。まずは、ボランティアセンターとなっている、東松島市立野蒜小学校に入る。ここでも、いくつかの悲劇があった。ほんの数秒、ほんの数 m の差で逃げ遅れ、命を落とされたらしい。犠牲になった方々を供養するため、体育館の一角に献花台があり、壁の時計は、あの時(14 時 46 分)を指して止まっている。このボランティアセンターを訪れる殆どのボランティアは、活動を開始する前に、ここに立ち寄り、亡くなられた方々のご冥福を祈り、線香を焚いて手を合わせる。校庭には、砂利が敷かれ、仮設集会所の建設が急ピッチで進められている。以前にボランティアバスツアーの仲間が訪れた際、校舎の傍らに花壇を作り、種を蒔いたひまわりとコスモスが大きく育っている。現場へ出発前に、たっぷりと水をやった。大きな花を咲かせたい。仙石線は沿線の住民の生活の動脈であるが、震災以来、沿線は壊滅的な被害を受け、東名駅周辺は、レールがめくれ取り外されている。この周辺は、海に近く、直接津波を受け殆どの世帯が避難している。そんな中、翌週(9/23)東名駅前の広場で炊き出しが予定されている。こイベントは、食料が提供されるばかりでなく、震災でバラバラになって避難されている「ご近所さん」が、初めて一同に会するイベントであり、皆さんがその日を楽しみにされてる。今回は、その会場となる広場の除草作業だ。その意味性を考えれば単なる除草とは違う。

身の丈程の草をかき分けて、草むらに入り、暫く両手で草を抜いていた。茎の直径が、1cm 位に育った大物もある。両手でグッと握って体重を掛けて、「エイツ。」一人では抜けない物は、応援を頼んで挑戦。両手の握力が低下しているのが分かる。手が滑って、後ろにひっくり返りそうになる。危ない。少し休憩しよう。今回作業は、「除草作業」ということで、以前の「泥カキ」よりは、簡単と思って少し「タカ」をくくっていたが。通常の除草とは規模が違う。直射日光の元での作業で、少々汗をかき過ぎたか、シャツに吸い込んだ汗が乾いて白くなっている。脱水気味で少し気分が悪くなった。これが、「熱中症」かも知れない。一緒に作業をしている仲間には申し訳ないが、無理は禁物、少し「詰め所」で休むことにした。詰め所に入った瞬間、涼しい。詰め所では、エアコンが効いており、風が当るところへ案内され、パイプ椅子に座って休んだ。頭の血がす一っと引いて行くと共に、顔の温度が下がっていくのが

分かる。更に、冷たいポカリスェットのペットボトルをいただき、生気を取り戻す。2 本のペットボトルで首筋と脇を当て身体を冷やすと、鋭気が湧いてくる。熱中症の応急対処法を覚えていてよかった。10 分程休んで、作業に復帰した。まもなく、午前中の作業を終え、広場に広々とした空間が現れ、作業開始前と比べると、見違えるようになった。ここで、地域の皆さんがバーベキューに集う姿が目に浮かんだ。現場には、トイレなどがない。トイレ休憩などを含め、一旦、バスでボランティアセンター(野蒜小学校)に戻り、いつもの「絆」弁当をいただく。

予定より早く、作業が終わった。午後は、地域の「側溝」の泥カキ作業だ。午前の作業をしている途中、地域の住民の方が我々の活動を見られており、「手伝ってくれないかな～？」ということで、応援の要請があったらしい。除草も一段落しているので、午後は、急遽、側溝の掃除をやることになったらしい。臨機応変、現場にニーズに合わせて、即、対応できるのも、このツアーの強みであり、ルールに縛られた半官の団体にはできない立ち振る舞いだ。また、石塚観光のボランティアバスツアーで現地入りしているボランティは、何度となく、側溝の泥カキ作業を経験しており、被災地でなくても、側溝をみると、ついつい、泥がつまっていないかと側溝の中を覗きこんで確認したくなる。ある意味ベテランであり、得意の「側溝」である。早速、有志を募り、速攻で、側溝をやっつけることにした。石塚観光では、「思いやりの心育成プロジェクト」によるイラスト土嚢を持ち込んでいる。地元茨城の小中学校に土嚢を配り、イラストを書いてもらった、カラフルな物だ。使うのが勿体ないような気になる。無味乾燥な泥の入った土嚢袋は、ゴミにしか見えないが、土嚢がカラフルだと、カラフルだとボランティアもやる気が出るし、土嚢回収者もちょっと、嬉しくなるだろう。文字やイラストを描く際、子供たちは真剣そのもの、無駄口を言わずにてを進めるらしい。道徳教育の一環にもなるようだ。

作業終了後、側溝作業の依頼主である老人は、積み上がった土嚢袋を見て、ほっとしたような表情だ。「ありがとう。」と感謝の言葉の後、誰に語るでもまく、当時の様子を回想する言葉がポツリポツリと出てくる。

◆東松島市 70 歳男性(東名駅付近)
「水が来た時、外にいたが、誰かの、『水が来たぞー』という声が聞こえた。」
「家に戻ることもできず、急遽、東名駅のホームにある、待合室に逃げ込んだ。」
「待合室は、数人が腰掛けることができる備え付けの木のベンチを壁で囲い、屋根をつけた程度だ。」
「物凄い音を立てながら、両脇を家や車が流されていく。想像を絶する光景だった。」
「もし、小屋(待合室)を直撃したら一溜まりもないだろうと思いながら、『死』」を覚悟した。」
「運を天に任せ、じっとしているしかなかった。」
「どれだけの時間が過ぎたのだろう。」
「暫すると、静かになった。」
「水が逆に流れ引いていく、小屋から出たら周りはすっかり変わっていた。」
「『生きている。』と思った。」
「次の瞬間、家は？、家族は？と思い、一目散に家に帰った。」
「家族は、2 階に上がり無事だった。」
「庭先には、色々なものが流れ着いていた。」
「これから、どうなるのだろうか？」
「ご近所は、どうなったのだろうか？また、(津波が)来るかもしれない。」

「着の身着のままで、裏山のお寺まで歩いた。」
「どこをどうやって歩いたかは思い出せない。」
「お寺の境内には、雪が積もっていて、寒かった。」
「ただ、山の上なので、少し安全だと思った。」
「長く、寒い夜、眠ることもできず、家族でさすり合って暖を取りながら過ごした。」
「夜が明け、消防団から、避難するようにと話があった。」
「家に戻って、毛布と着替えなど、持てるだけを持って、野蒜小学校に避難した。」
「小学校は、1 階にも水が入ったので、2 階で避難することになった。」
「誰がどうなっているのか、さっぱりわからない。」
「食パンが配られたが、一人あたり、1/4 枚。」
「何も喋らず、もくもくと食べた。」

このような体験談は、100 人いれば、100 通りの悲劇とドラマがあるだろう。ただ、これを、聞き出そうとしてはいけない。我々ボランティアは、被災された方々が、心を開き、安心してお話しをしていただくことができる、「場」を作ることが使命であるからだ。このためには、どんな作業も辞さない。そして、単に、「作業」を提供するだけでなく、相手の気持ちを汲み、信頼関係の構築を第一の目的とし、寄り添い、支えるボランティアを心がけたい。現地の状況や現地の「思い」を知り、最適な作業を最適な量、質で提供しなければならない。ボタンを掛け違えることなく、求められる作業を求められる時に提供する。このためには、現地に密着した活動が不可欠である。その意味で、野蒜地区を中心に活動している、「サポートチーム G」の存在は大きい。現地とのマッピングの良し悪しは、「量」、「質」に影響する。これらのバランスが崩れた時、きっと、ボランティアは、単なる「迷惑」であり、「お節介」になるのだろう。

【2011/9/18】
二日目の朝、野蒜小学校(ボランティアセンター)には、敬老の日の 3 連休を利用して集まったボランティアを載せた 4 台のバスが校庭に終結した。壮観な眺めだ。今日の作業は、石塚観光が企画している、「幸せの黄色い菜の花大作戦」に参画する。「幸せの黄色い菜の花大作戦」とは、津波で壊滅的な被害を受けた、仙石線(仙台⇔石巻間[約 40km])の逸早い復旧をめざし、沿線を除草し、菜の花の種を植えるプロジェクトである。今回は、その一環として、野蒜⇔東名間にある北大仏のトンネル付近から、東名駅方面の 200m 程度の線路沿いを除草した。4 台のバスの内、2 台分(100 名弱)の人員を投入してのローラー作戦だ。この区間では、架線が垂れ、レールが浮き、レールも腰丈ほどの雑草で覆われている。4 台の刈払機で一気に刈り取り、人海戦術で刈ろ取った草を集める。ものの数時間でレールが現れた。しかし、電車が走るまでには、まだまだややることがいっぱいあるが、着実に復興に向かっている。人海戦術の凄さと同時に、復興への長い道のりを感じた。休憩時間、線路脇で被害に遭われた S さんから、当時の様子を伺うことができた。

◆東松島市 70 歳男性(仙石線線路脇にお住まいの S さん)
「揺れの後、1 時間くらいたった頃か、近所で『水が来た!』という声が聞こえた。」
「『津波』っていわれても、ピンとこない。」
「最初は、ゆっくりと、ゴミが流れている程度だった。」
「暫くすると、みるみる水かさが増え、だんだん大きなものが流れてきた。」
「舟が線路を越えて、線路の向こうのお宅の垣根まで流れ着いたり、車も流れてきた。」

「この辺りは、1 階の窓サッシの上辺りまで水が来て、2 階や、向こうの山寺に逃げた。」
「お寺で夜を明かし、次の日、野蒜小学校に移った。」
「小学校の 2 階で避難生活をしながら、時々、家に戻って片付けをした。」
「電気もなく、日の出とともに起き、日没後は就寝する健康的な生活だった。」
「最初の頃は、大人 32 人に 8 つ切りの食パンが 1 袋配られ、それも、4 つに切って分けた。」
「子供たちは、1 本づつロールケーキをもらった。」
「それで、2,3 日過ごしたたけれど、結構、食べなくても大丈夫だと思った。」
「外壁はちゃんとしているが、内部はめちゃくちゃになり、住める状態ではない。」
「大木が突っ込んだお宅もあった。」
「線路のこちら(海)側では、26 名の方がなくなった。」
「最後に発見された人は、7 月(4 ヶ月後)自宅の床下から見つかった。]
「床を剥して、泥カキをした時に見つかり、目を覆いたくなる光景だった。」
「このあたりでは、20 世帯くらいが、2 階で住めるようになり避難所から戻ってきている。」
「水も電気も使えるようになり、なんとか住めるようになった。」
「ただ。1 階はまだまだ片付かない。」
「その後、直ぐ逃げれるように、バッグに水と着替えを入れてある。」
「ゆれに敏感になった。」「この震災で、ご近所とのお付き合いが増えた。」
「実は、3/10 が誕生日で 70 歳になったが、70 年間で体験したこと以上を、この半年に体験したと思う。」

除草したら、線路を挟んで、向こうとこちら側が見通せるようになった。線路には囲いも踏切もない。すると、線路の向こうから、子供たちが、元気な声とともに、サッカーボールを持って遊びに来た。ボランティアメンバーも、しばし、子供に帰って、ボールを蹴り、楽しいひと時を過ごした。除草作業がもたらした、小さな出来事だった。来年の春には沿線で黄色い菜の花が咲き乱れ、やがて、この仙石線も復興し、以前のように人々が行きかい、穏やかな生活を取り戻す。そんな、日々が来ることを夢見て。

【2011/10/8】
またまた、石塚観光のボランティアバスツアーに参加して、東松島市の野蒜地区に入った。前回(9/17-18)同様、「幸せの黄色い菜の花大作戦」と称する活動の一環として、仙石線沿線の除草作業と思いきや、今回は、墓地の清掃作業らしい。先ずは、ボランティアセンターのある野蒜小学校を目指してバスを進める。三陸自動車道の鳴瀬奥松島 IC から、石巻街道(R45)経由で野蒜地区に入る、途中、仙石線を縫うように道路を走り、ふと見ると、震災当日に立ち往生した電車(仙石線[野蒜⇔陸前小野間])が、そのままの状態で線路上に放置してあり、時間が止まっている。仙石線は、震災で津波の被害をまともに受けており、架線もなく寸断されて、レールを撤去してしまった区間もあり、復旧の見込みが立っていない。地元市民の生活動線を一日も早く確保することが、復興へと繋がるのだろう。
着替えなど作業の準備をして、体育館の献花台で線香をあげ、体育館の 2 階の廻廊についている、バスケットゴールなどが懐かしいなと思いながら眺めていると、ゴールのボードに残された横のラインに気が付く、ここまで、津波が到達したんだ。この体育館は、避難所に指定されていた。震災直後、避難指示が出され、付近の住民の方々が、三々五々集まってきて、ホッとしたところで津波が襲ってきた。一瞬のうちにこの体育館が水深 3m の濁流の

プールになった。水を飲んでおぼれた人、波で壁に叩きつけられた人、流れてきた瓦礫にぶつかった人、ショックで気絶した人、冷たい海水に浸かり体温を奪われて死に至った人、皆、安全だと思い避難した避難所であるにもかかわらず、避難所で津波に遭い亡くなってしまった。数秒、数 m が生と死を分けた。その後、体育館は、遺体の安置所でもあったらしい。一方、体育館や校舎の脇に、我々の仲間が花壇を作り、そこに植えたヒマワリとコスモスが大きく育っている。ここでも、生と死の隣接を感じた。また、校庭に建設中の建物は、役所の事務棟などになるらしい、来るたびに段々出来上がっていくのが分かる。敷地の一角に郵便局ができていた。

午前の作業開始。バスで墓地まで移動した。現場は、住宅地の一角にある結構広い敷地だ。ここに、近所の瓦礫が押し寄せ、墓石が無造作に転がっている状態。土台と墓石もバラバラでどの土台とどの墓石がペアなのかもわからない。墓石の間の瓦礫の撤去と除草を行った。刈払機は扱ったことがあるので、今回も刈払機を使うことにした。雑草の根は長いが、海から流れてきた砂に根付いているため、比較的簡単に、根こそぎ抜くことができるが、根が、瓦礫や墓石の下にも入り組んでおり、瓦礫をどかし、墓石を起こしながらの作業となる。

午前の作業が終わり、恒例の「絆」弁当。きょうは、特製「絆牛丼」とプッチンプリン。これまで、「絆」弁当は、3 パターン(ハンバーグ、唐揚げ、煮物)であると噂されていたが、このマンネリ化を打ち破るべく、新メニューに挑戦したのか？実は、とある団体客のボランティアバスツアーを実施した際、今回の「絆牛丼」を提供した際、反響がよく、人気だったとか。このため、一般のボランティアバスツアーでも取り入れることにしたらしい。弁当のレパートリーの拡充は、我々のようなリピーターにはありがたい。休憩時間に、我々の作業をご覧になっていた近所にお住まいの方とお話するチャンスがあった。

◆東松島市 70 歳男性(当時、野蒜地区にお住まい)
「ここは、新興住宅で若い人が多く、、みんな、仙台などに移り住んでいる。
「年寄りには、その踏ん切りができず、こうやって時々見に来るんだ。」
「これだけやられたんでは、建て替えなあかんが、この土地に建てる気がしない。」
「わしは、この土地ですみたいが、家族は全員反対だ。」
「また、(津波が)来るかも知れん。もうちーと山の方ならええかも知れんが。」
「。。。。」
「15 年くらい前に、仙台に来た時、松島観光を薦められました。」
「松島まで足をのばして、遊覧船に乗ったことがあります。」
「海からしか見たことはありませんが、このあたりは(陸からみても)綺麗だったんでしょうね。」
「是非、元通りに戻したいですよね～」「綺麗に戻して、また来てみたいです。」
「そんな風に言ってもらうと嬉しいけど、もう、あの景色はない。」
「そうそう、この前、瓦礫の中に写真があってな、」
「誰が撮った写真か分からんけど、綺麗に洗って接写したんだ」(デジカメで画像を見ながら)
「この辺は、一体が、松並木で奇麗な景色だった。」
「松島にゃぁ、島が点々とあって、そりゃぁ絶景だ」
「この写真のように、うっすらと靄がかかった景色は、最高だ。」
「極楽浄土のようですね。」
「今じゃ、松並木もあんなにまばらになってしまって。。。。」
「みんな流された。」

「。。。」
「水は、揺れの後、どのくらいできたんですか？」
「40 分くらいかな～。」
「ただ、この辺は、日頃から訓練していたし、みんな山に逃げて助かった。」
「お年寄りの中には、逃げない人もいた。こんなことで、亡くなるのは残念だ。」
「最初は中学校の方(鳴瀬第二中学校を指さし)から、10m を越えるような波が来た。」
「(10m というと、)ビルの 3F くらい(の高さ)ですよね。」
「そーだ。そんなの被ったら、ひとたまりもない。家が残っている方が不思議だ。」
「その後、今度は、(反対側を指さし)あの山の向こうから回り込んできた。」
「両側から来たから、殆どの家がやられた。」
「だから、家の場所とか、山の影になったとかで、壊れ方が違う。」
「なるほど、そうだったのですか。」
(墓地を見渡して)
「みなさんでやってもらうと、早く片付くし、助かりますは。」
「自分ひとりでやっていると、気が遠くなる。」
「『もうどうでもよくなって』しまい、投げ出したくなる。」
「皆さんに手伝ってもらっていると、思うと、そうもいかず、また、頑張ろうと思う。」
「本当にありがたい。」
「慣れない作業(刈払機)だろうから、怪我せんように、気いつけてな。」
「はい、ありがとうございます。」

ほんの短い間の立ち話だったが、このような形で現地の方々に役に立ち、感謝されていることを感じることができると、単純な話だが、我々も元気が出てくるし、元気を分けてもらったような気がする。また、貴重な体験談を聞き、当時の様子をリアルに想像することができた。実際、10m の波が襲ってきたことを想像すると、背筋が寒くなる。遭遇したら我々自身が、間違いなく瓦礫の一部になっていただろう。本当に、ご無事でなりより。

【2011/10/9】
ボランティアバスツアーの定宿である名取市にある「ルートイン名取」に泊まり、翌朝 5:00 に起床。本日も晴天。絶好のボランティア日和だ。「天高く、馬肥ゆる秋」という言葉がある。この言葉の出展は、中国の「漢書」にある「秋高馬肥」であり、漢民族の諺である。本来の意味は、「秋になると馬が元気になり、匈奴(モンゴル民族)が襲ってくる」という警告を表す言葉だ。このため、秦の始皇帝が万里の長城を築いたらしい。現代のモンゴル民族は何だろう。東北地方では、まだまだ余震が続いている。津波が襲ってこなければ、よしとしよう。また、成語林(講談社)には、「秋は空が高く澄みわたり、馬もよく草を食べて肥える意から」、爽やかな秋の好時節をたたえるときに用いられるする言葉とある。縁起でもないので、今回は、こちらの解釈としよう。ボランティアセンターである野蒜小学校に出向くと、日帰り組のバスも合流しており、都合 3 台のバスが砂利が敷かれた校庭に終結し、爽快な眺めだ。総勢、120 余名。殆どがリーピーターであり、顔見知りである。9/17-18 のボラバスで見かけた人は勿論、個人で出向いた、9/19 のいわきのボランティア[第 3 章]で知り合った人にもお会いした。日帰り組は、野蒜駅周辺の除草作業を行い。我々は、昨日に引き続き、墓地の清掃作業をすることとなった。

昨日の刈払機による「前処理」が終わっているので、本日は、刈られた草を手作業で集めたり、墓石を起し草を抜く。墓石を移動すると、お骨が出てきた。骨壷なんて、影も形もない。ご先祖様もこのような形で、被災しているのだ。このお骨は、今回の震災の被害者の物ではないにしろ、手を合わせて、冥福を祈った。

お昼は、メンチカツカレー、これも新メニューだ。午前中は、淡々と草取りなどの手作業を続けたためか、指先に力が入らなず、握力がなくなっている。箸が持てないので、カレーはスプーンで食べることができてよかった。午後ごの作業に先立ち、怪我をしないよう、身体のストレッチと、グゥ、パァ、グゥ、パァで、指先に気合を入れる。日が西日に変わり、うっすらと汗ばんだ肌に心地よい風が流れる。夏の日差しに比べれば、随分過ごしやすくなった。しばし、秋を感じる。作業が一段落したところで、共同墓地の管理人さんからご挨拶があった。

◆東松島市 70 歳男性(野蒜共同墓地の管理人さん)
「。。。。」
「口下手で、うまくしゃべれませんが。。。。本当にありがたいと思います。」
「この辺の人は、みな仙台の方に越してしまい、このお墓もどうなることやら。」
「ただ、このままでは、ご先祖様に申し訳ない。」
「とはいえ、ご覧のように、人手もなく、みなさんに片づけてもらって、こんなに綺麗になり、」
「本当にありがとうございました。」
「ろくなご挨拶もできず。。。。」

朴訥な言葉の中に、本当に感謝しているという気持ちが伝わり、ボランティア一同が、「やってよかった。」と実感する一場面言だった。ボランティアは見返りを期待するわけではないが、感謝されると素直に嬉しい。この墓地には、近隣の 172 世帯分の墓石があったとのこと、そのほとんどが倒壊し、参道も腰丈ほどに雑草で覆われ、参道であったことも分からない状態だった。墓石の復旧は、専門の業者に任せるとして、瓦礫と雑草で覆われた参道を復活させ。倒れかけた樹木を切り倒し、すっきり見渡せるようになり、かなり片付いた。今回も「思いやりの心育成プロジェクト」によるイラスト土嚢が(綺麗に)積み上がった。

ボランティアセンター(野蒜小学校)に戻り、引き上げ前にもう一仕事。花壇への水やりと、休憩などで利用した教室やトイレの清掃だ。教室では、「土足厳禁」の張り紙はあるものの、床は砂でざらざらだった。ほうきで掃いてから、雑巾がけをした。雑巾がけでは、皆、童心に帰り、四つん這いになり教室内を縦横無尽に走りまわった。小学生時代の「掃除の時間」の記憶が蘇り、懐かしさを楽しみながらの活動だった。素足で歩ける程綺麗になり、ついでにワックスまで掛けたくなった。

午後も同様に、墓地の清掃を仕上げた。昨日、荒れ放題だった墓地もいまでは、見渡せるようになり、随分片付いた。我々の活動は、全体から見れば、ほんのわずかかも知れない、しかし、昨日と今日、都合、10 時間分の作業を 41 人でこなしたので、都合、410 時間分の作業になる。仮にこれを一人でやったとすると、1 日 10 時間働いたとしても、41 日(約一ヶ月半)掛かることになる。このような、小さな作業を積み上げて、少しづつ、復興が進められていくのだろう。来る度に、道中バスの車窓から眺める景色も少しづつではあるが、変化が見られ、着実に復興に向けて進んでいることが実感できる。

【2011/11/26】

前回(10/30)[第 3 章]から、1 ケ月弱の時間が経ち、もう、11 月下旬、随分寒くなった。宮城県をはじめ、東北地方はこれから、冬支度が始まる。今後、本格的な冬を向かえ、どのようなボランティアが望まれ、どのような活動内容になるのだろう。一部の報道では、仮設住宅の防寒対策の遅れが報じられているものの、追加の工事は進んでいるのだろうか？それでなくても、被災後初めての厳しい冬を迎える。雪が積もれば、雪かきなどの力作業も必要だろう。いずれにしても、心や身体が少しでも暖かくなるような環境をお届けしたい。夏場のボランティアでは、熱中症対策などいわゆる、「熱さ対策」が必要であったが、冬場は、防寒ウエアは勿論、携帯カイロや、ドリンクの保温剤などの「寒さ対策」が必要であろう。今回も野蒜に入ることになった。既に、見慣れたルートを野蒜小学校に向かう。10/29-30 に出向いた時にお世話になった、サポートチーム G や、K.S さんには、今回はバスで野蒜入りすることを伝えてあるので、またお会いすることができるだろう。また、野蒜小学校に置き忘れた、マイスコップを引取らなければならない。

今回は、小学生の参加している。この年齢で、大人に混じって、ボランティア活動に参加することは、貴重な体験であるに違いない。そして、一生の思い出になることだろう。ちょうど、私自身が、幼い頃、ボーイスカウトで、奉仕活動に参加した時のように。そして、大人になっても、ボランティア精神、利他の心を忘れないで欲しい。これも、「震災を知らない子どもたち」に教え、伝えなければならないことの一つなのだろう。

出発当日、いつものように、午前 3:00 出発。途中、ボランティア仲間と合流して、4:00 過ぎに常磐道の那珂 IC を降りて、集合場所である、那珂市役所駐車場に到着。夜空を見上げると、ピンッとした澄み切った空気に満天の星が輝き、プラネタリュウムのようだ。気温 1℃、現地(宮城)はもっと寒いのだろう。常磐道のいわき JCT より、磐越道へ。磐越道阿武隈 SA を通過する頃、まだ暗い。東北道への JCT の手前で白々と夜が開けてくる。夏場に比べ、夜明けが遅くなった。辺りが明るくなるに連れ、遠く、わずかに白く雪化粧した、安達太良山系が見える。雲ひとつない快晴、日が昇るに連れ、暖かくなってきた。暫くうとうとして、目が覚める頃、仙台の三陸道に入る、いつもより空いている。いつもの鳴瀬奥松島 IC ではなく、手前の松島海岸 IC で降りて、R47 を下り、松島海岸を経由して野蒜小学校へ。朝日に波がキラキラ輝き、美しい海岸線だ。早朝であり、観光客は殆ど居ないが、松島の島々を巡る遊覧船も運航しているようだ。そろそろ野蒜に到着する。間もなく到着する旨を野蒜小学校で待つ、K.S さんにメールしよう。

小学校に到着したら、校庭で K.S さんのお出迎えを受けた。1 ヶ月ぶりの再会だ。バスのメンバーにも K.S さんを紹介し、着替えなど活動の準備をしながら、今日のスケジュールの中でお話できそうな時間を調整した。11:00 に、東松島市の市議会の副議長を勤められる S さんを小学校にお呼びしてあるので、紹介しお話がしたいとのこと。ボランティア作業を抜けて、お話しさせていただくこととした。詳細は、第 4 章で触れるが、今後の復興を考えると、現在のボランティアや、企業の CSR など、一次的、一過性の活動では、復興は成就しない。復興を目的とした新たな枠組みや、組織、運用の必要性を感じ、これらを、地元駆動型でうごかしていかなければならない。とのこと。この部分は、私自身も漠然と考えていた事であり、今後、議論を重ねて、少しづつ実現していきたいと思った。

今回の作業は、野蒜駅の線路沿線での「菜の花大作戦」だ。先ずは、野蒜駅へ。駅前の広場の、倒れた道路標識が、まるで震災のモニュメントのように放置してある。この辺りの避難所は、野蒜小学校と鳴瀬第二中学校。どちらも甚大な被害に見舞われた津波は、避難所に、避難したはずの人々を飲み込んだ。作業開始。これまで、スコップに替わり、鎌や園

芸用のショベルに持ち替えての作業だ。まず、線路脇を除草し土を耕し、花壇にする。そこに、菜の花を種を蒔く作業だ。単純な活動だが、付近の住民にとって仙石線は、いわば生活動線であり、ライフラインに相当する。来年の春、黄色い花で覆われる仙石線の沿線の景色は、一日も早く石線の復興を待ちわびる沿線の被災者に希望と勇気を与えることだろう。このような意味性を考えると、復興支援の一環であることが分かる。実は、仙石線の復興には、以下の 2 つの派閥がある。野蒜地区の多くの住民の方々は、逸早い復旧と懐かしい風景が戻る①を望まれているようだが、JR や建設業者の利権が絡む②の支持も大きい。ボランティアには「投票権」はないが、ユーザの視点と現場のニーズを汲み取って判断してもらいたいものだ。

方式	メリット	ディメリット
①現行の線路の位置で復旧する	スピーディ	防災不安
②山側に 500m ずらした位置に新規に建設する	防災対策	コスト高

活動終了。バスは、定宿の「ルートイン名取」へ。移動中のバスの車中で携帯が入り、K.S さんも、仙台での用済後、名取に立ち寄りができるとのこと。短い時間であったがホテルのロビーでお話しすることが出来た。僅かな時間でもコミュニケーションを取ろうと、バスツアーのスケジュールに会わせ、調整をいただけたことに恐縮。夜の復興活動も忘れずに。バスの給油を兼ね、参加メンバーを募り、予約した最寄りの飲み屋まで、観光バスでの送迎。バスも飲み足りなかったんだな。運転手さんありがとう。

【2011/11/27】

4:30 起床。今日は、宮戸島での力作業だ。気合を入れて、朝風呂を浴びて、昨夜のアルコール分を流し落とす。宮戸島は、野蒜の南方に位置し、奥松島の旅館が点在する島。島といっても、野蒜に隣接しており、橋で繋がっている。ただ、この橋が、津波で崩落し、孤立してしまった。このため、震災直後から、情報も入らず、救助や物資の支援が遅れていたところだ。バスは、橋を渡って、宮戸島へ。美しい海岸線をバスで巡っていくと、月浜応急仮設住宅が目に飛び込んでくる。海岸沿いにあった、旅館や民宿などを営む方々や、海苔や牡蠣の養殖を営む方々が避難生活を強いられている。その仮設住宅を望む空き地が、今日の作業現場であり活動拠点だ。周りには、手付かずの瓦礫も多く、島内の唯一の舗装道路の両脇の側溝は、びっしりと泥で詰まっている。やり甲斐ある作業だ。ボラバスツアーのメンバーは、ほぼ全員が、リピータであり兵揃い。側溝を見ると、目の色が変る。皆、慣れており、手際が良い。詳細な指示がなくても、確実に作業を進めることができる。

午前中の作業を終了し、奥松島の絶景を眺めながらのお弁当は最高だ。目の前に広がる海は、あくまでも碧く、静かな海。この海が 3/11 に豹変した。海岸線の堤防も、テトラポットも、津波の前には何の役にも立たなかったのだろう。ふと、防波堤に上る階段をみると、30cm 程浮き上がっていることが分かり、テトラポットに残された瓦礫が津波のすさまじさを物語る。休憩時間にトイレをお借りするために、仮設住宅の談話室(集会所)に出向いた。そこでは、ボランティアによるマッサージが行われていた。先日来、(11/23)は、いわきに仮設住宅にお邪魔して、「足湯とツボ押し」をさせていただいた関係で、いわゆる、同業者なのだろうか(?)、少し気になる。マッサージのボランティアさんの話では、

「ここの仮設住宅でも、中の作り(間取り)は、さまざまで、作りも違う。」
「防寒対策の工事も今進めている最中だ。」
「隙間には、ガムテープを貼り、毎朝、結露した窓枠をタオルで拭うのが日課となっている。」
「衣食住、すべてが満足できるものではないのは理解できるも、被害者意識は拭えず、不満も多い。」

とのこと。そのような不満の中の一つが、生活用水の排水だ。仮設住宅の生活排水用は側溝に排水されるが、側溝の随所に泥が詰まっている。このため、排水が逆流したり滞留し、仮設住宅での生活に支障をきたしている。地区から要望もあり、気持よく生活してもらうため、午後の作業は、この側溝の清掃を行うこととなった。

午後、14:30、予定していた作業を完遂！綺麗に蓋がしまった側溝の風景ほど、すばらしいものはない。久しぶりの「泥かき」作業で、明日は、筋肉痛だろう。道具の片付けをしていると、サポートチーム G の道具の中に、目印のテープなどは剥がされてはいるものの、見覚えのあるスコップがあった。「あった。」野蒜小学校に置き忘れたマイスコップを見つけ、引き取ることができた。暫く離れていて、寂しい思いをし、また、会えてうれしい。これも、小さな「再開」であった。出発間際、K.S さんにも見送りに駆けつけていただいた。これまた、恐縮である。

【2011/12/18】

今回のバスツアーは、厳密に言うと、ボランティアツアーではない。石塚観光さんが企画された「慰労ツアー」である。石塚観光では、5 月の連休以来、毎週のように週末を利用したボランティアバスツアーを企画され、宮城県に出向いている。その殆どに参加されている方が、この度、ご家庭の事情で遠方に転居されるらしい。このため、今後は、ボランティアバスツアーに参加することが難しくなってしまう。そこで、彼女の慰労を兼ね、ボランティアバスツアーで出向いた各地を梯子しようという企画で、石塚観光の綿引社長が発案された、心憎い企画だ。このようなツアーにお誘いをいただけたのも光栄であり、嬉しいことでだ。20 回、30 回と参加している兵が集まる。「チーム石塚」とでもいうのだろうか？どんなサプライズが待っているのだろう。今回は、スコップを持たずに参加することになった。

石塚観光は、茨城県水戸を拠点とする地方の観光会社だった。3/11 以来、自粛モードで観光業界が成り立つか否かの状態で、元々、石巻市にご縁があった社長の発案の元、5 月の GW から「ボランティアバスツアー」が始まった。「我々にはバスがあるじゃないか。このバスを使おう」というのが、ボランティバスツアーを始めたきっかけらしい。費用云々、いろいろなご意見もあったのだろうが、以来、延べ数千人規模のボランティアを宮城県に送り込み。地元は勿論、今や、全国的に有名になった。社長をはじめ、添乗員や運転手さんまで、現地ではスコップを持って作業をされている姿を見るたび、社長や社員のみなさんの心意気を感じ、それに、賛同する参加メンバーのコミュニティもどんどん広がっていく。実際、いわきでの活動も、ボランティアバスツアーで知り合ったメンバーをお誘いして、お手伝いいただいていることで成り立っている面もあり、仮に、石塚観光さんのボランティアバスツアーがなかったら、私のボランティア活動は、薄っぺらなものであっただろう。体験談もこのような形にはなっていないだろうし、リピートすることなく、一過性のボランティアで終わっていたかも知れない。今現在、このようなボランティア活動ができているのも、石塚観光や一緒に参加したメンバーの支えがあってのことであり。これも、一種の「絆」なのだろう。先日(12/11)、これまでのボランティアバスでの活動の報告や、経緯についてシンポジウムが開かれ、ボランティアバス

をアピールする機会があった。私は参加できなかったものの、このバスに乗車しているメンバーの多くが参加し盛会に終わったとのこと。恐らく、皆が、私と同じ思いでこのボランティアバスツアーに参加し、リピーターと化していることだろう。今後の活動内容や、訪問先などの課題も多いが、ボランティアバス、石塚観光に感謝していることに違いはない。

ツアーは、いつものように、早朝に集合場所に集まるところから始まる。見慣れたメンバーが、45 名集まり、現地に向かう。このメンバーなら、どんな作業だってこなせる感じだ。ただ、今回は、活動はない。これまでの活動拠点を巡る旅だ。それぞれの思いや、心境の変化をもう一度トレースする感じで、記憶に焼きつける。そして、このメンバーが集まったことに、感激し、石塚観光さん、綿引社長にも感謝である。

いつものように、常磐道、磐越を経由し東北道へ、郡山付近、曇り空のなか、ゆっくりと夜が空けるが寒い。窓の外は、マイナス4℃、みぞれが雪に。
仙台南部道路、東部道路を走る。もう、何回この景色を見たのだろう。この間、市内に点在する瓦礫の山が一時は、高くなり、やがて低くなる。これは、復興が進んでいる証拠なのだろうか。三陸道を経由して東松島へ。東松島市は快晴だが、海風が強く寒い。

先ずは、多くのメンバーのボランティアの原点になっている、大曲地区。記憶に焼きついている、「ガンバロー大曲」の船はそのままになっているが、遠くの船やブイは撤去され、石巻港の工場の煙突からは煙が見える。一部は創業を開始しているのだろうか。当時、多くのボランティアが出入りしていた市民コミュニティセンターは、既に閉鎖され、残された管理人の人から当時もお話を伺うことが出来た。

「このホールが避難所になっており、ここに、皆さんいらっしゃる時に波が来た。」
「水は、1F の天井くらいまできて、壁に跡が付いているあたり(2m くらい)まで引いた。」
「みんなで舞台の上に上った。」
「水かさが増えてきたので、舞台の上に机を二段重ねにしてその上に上った。」
「車椅子に方とかもいらっしゃったが、みんなで、持ち上げた。」
「お陰様でここでは、お一人も亡くなっていない。」
「夜は寒かった、みんなで寄り添って暖を取りあった。」
「明け方に消防隊に助けられ、小学校に移った。」

大曲、赤井地区から、石巻市街地に至る一帯は、5 月から 8 月にかけ、チーム石塚が、断続的にローラ作戦を展開し泥カキと瓦礫撤去を行った。当時は、住んでいらっしゃる方々は殆どなかったが、現在は、駐車場には新しい車があり、少しづつではあるが生活を取り戻されているように思う。石巻の高台にある日和見公園から、石巻港を望む。眼下の石巻市立病院では、震災当時から、多くのドラマがあった。港周辺には、多くの水産加工業者や市場が軒を連ね、競りの声が響く活気溢れる港だったのだろう。左手の瓦礫が見える辺りは、9/10 にお邪魔した渡波(わたのは)小学校[第 2 章]がある地区、その奥には、牡鹿半島を望む。石巻から、再び東松島へ。途中、「ホット横丁石巻」に立ち寄り、軽く、「おやつ」。地域産だけでなく、大手たこ焼き屋などが出店しており、ちゃんと屋根があり、暖房やトイレも完備している、全天候型の屋台だ。地元客だけでなく、バスツアー客も訪れ、活気溢れた観光スポットを形成している。東松島もこのような形で「復興」に繋げられないだろうか？そんなことを考えていたら、バスは、当時、ボランティアセンターになっていた、ラブホテル「マリナ」に到着した。今では、ボランティアセンターは閉鎖、ひっそりとしている。近所に笹かまぼこの「白謙かまぼこ」に立ち寄り、即売場でお土産を購入。

仙石線の線路を見ながら、お馴染みの野蒜へ。ここも見慣れた風景だ。ただ、途中で立ち往生した列車は既に撤去されていた。墓地の清掃、東名駅の草刈り、野蒜駅の菜の花、宮戸島の瓦礫撤去と側溝の泥カキ。数々の思い出が蘇る。バスは、宮戸島へ。月島地区の仮設住宅も急ピッチで防寒対策工事が進められている。展望台からの眺めは、取っておきの絶景。綿引社長は、最近、体調を崩され、このツアーに参加する前まで、入院されていたらしい。石塚観光あってのボラバスであり、社長あってのボラバスである。そのためにも、一日も早く回復され、来年以降も、ボランティアバスツアーの運行を続けていただきたい。「現地から、『もう、来るな』と言われるその日まで。」我々も、ボランティアバスが運行される限り、現地へ足を運ぶことだろう。

【2011/12/23】

ボランティアバスの一部のメンバーとは、Facebook などの SNS を通じて情報交換している。その中での話題が、野蒜地区にある「松ヶ島海鮮堂」というお店。今回は、このお店の清掃作業だろうか。このお店は、今年の 1 月(震災前)に開店し、地元、奥松島(宮戸地区)の名産品である焼き牡蠣や、海苔を販売するお店で、開店 2 ヵ月という時に津波に襲われ、一瞬の内に、全壊したとのこと。商業施設ということで、市町村からの支援が受けられず、泥カキ、瓦礫の撤去が遅れた。現地のニーズを吸い上げ、今回の作業となった。水道は使えるものの、電気が使えない。そんな環境の中、お店の開店に向け復興のお手伝い。「チーム石塚」のパワー全開で、今年のラストボラバスを飾ろう。

今年は、12/23 が金曜日で、12/25 まで 3 連休。まさに X’mas 休暇だ。週間天気予報によれば、今年一番の冷え込みになるらしい。東北地方(仙台東部)は、最適気温マイナス 1℃、曇り時々雪、凍えるような寒さだろう。ホワイトクリスマスというとロマンチックだが、野外で作業することを考えると、厳しい活動になるだろう。野蒜地区の市街地は、瓦礫の整理も一段落し更地になっている。クリスマスのイルミネーションは、真っ暗な野蒜の夜を明るく照らす、1 つの光となるだろう。復興の第一歩だ。

出発当日、3:00 に近くのコンビニの駐車場でいつものボランティア仲間と待ち合わせ、ボランティアバスの集合場所(常磐道 那珂 IC 那珂市役所駐車場)まで同行する。集合場所には、いつものメンバーが集まっている。さすがに今回は、冬対策を完璧に施した重装備。
4:00、気温マイナス 1℃。凛とした空気に星空が冴えわたり、気持も身体も引き締まる。いわき JCT より、磐越道へ、既に、周りは薄らと白い。結露しているバスの窓を見ながら、東北各地の仮設住宅でも凍えるような朝を迎えているのだろうと、心配になる。郡山付近で、
白々と夜が明け、遠くの山は白いが、路面には雪はない。8:45 少し早めに、野蒜小学校についた、既にボランティアの詰所は移転しており、閑散としている。学校でトイレをお貸りし、いざ、現地入り。石塚観光からのボランティアバス 3 台(約 120 名)が、「海鮮堂」に集結した。
・瓦礫の清掃
・壁剥しと、釘ぬき
・牡蠣養殖のお手伝い
などの作業を分担して行う。

活動に先立ち、活動の趣旨について説明があった。「海鮮堂」のサポートは、「サポートチーム G」より、分離独立した「奥松島復興再生プロジェクト」として発足し、活動をしていくとのことだ。地域密着型の復興再生であれば、これまで、K.S さんとお話しているような活動と重なってくるし、東松島市とのチャネルも必要だろう。早速、プロジェクトのスタッフとしての参加を表明し、今後は、「奥松島復興再生プロジェクト」として、より突っ込んだ活動をしていこ

う。先ずは、「海鮮堂」の営業再会に漕ぎ付けることが当面の目標だろう。その後は、海鮮堂の商品を通販で販売するなどの可能性もある。それも、個別の店舗ではなく、ネット上に「道の駅」のような、仮想モールを作り、参加店舗を募る。個別に通販サイトを立ち上げるより効率も良く、「復興」をキーワードにプロモーションすることもできるので、また、SNS を連携させ、口コミによる集客も期待できる。とはいえ、店舗として復旧させるためには、目の前の瓦礫を整理や撤去だけではなく、外装、内装を清掃し、一刻も早く営業再開を目指さなければならない。

　将来的には、このプロジェクトを NPO 化するなり、少しでも地域の失われた雇用を創出に繋がればとの期待もある。奥松島に限らず、東北各県は、海産物、農産物の宝庫。地域の特産品をベースにまちづくり、と復興を支援する一つのモデル事業として捉えていきたい。地域の特産品を纏めて出店することで、リアルな観光スポットを作ると共に、SNS でのネット上での拡散を狙う「クリック＆モルタル」の戦略である。このような構想も、最初から、NPO や「事業」ではないだろう。いわゆる、走りながら考えることになるだろう。このためのスタートを切りたい。当面は、手弁当での活動になるだろう。そして、キャッシャが流れるようになったら、NPO 化や事業化の計画を練ろう。

　周辺の瓦礫を集めているところへ、事前に連絡を入れていた、K.S さんが到着。K.S さんからは、これまでにも、東松島市の市報である「ひがしまつしま」を定期的に送っていただいており、復興に向けた現地の活気が伝わってくる。今回は、

・「H16 新潟三条市防災まちづくり資料」：東松島市長との対談
・「東松島市議会便り」、
・「議員(20 人)の一般質問」

などの情報がいただいた。今回は、自宅近くのお墓での作業をお願いしているとのこと。男手 2 名ということなので、仲間を誘って出向くことにした。宮戸島の大浜から海岸の砂を運び墓石の周りに蒔く。土嚢を 20 枚ほどお借りし、軽トラックで大浜へ。奥松島には、落ち着いた感じの旅館が数軒あり、隠れ家的なプライベートビーチだった。砂を積んでお墓に運ぶ。この辺りは、海抜 0m 地帯。ちょうど、大潮の時間帯で、堤防の上を走ると、堤防ギリギリまで海面がきている。反対側は、海面より低いことが分かる。津波、台風などの水がまだ引いておらず、ポンプでかき出している。お墓も水に浸かり、手付かずの状態で流れた砂を補充した。先ず、20 袋分運んだが、まだ足りない。一旦、海鮮堂に戻って、もう一度で直そう。帰路、牡蠣の加工現場を見学させていただいた。ここは、野蒜から駅で 2 区間離れた陸前大塚地区。10/29 にお邪魔した K.S さんの菩提寺の近くだ。ここで、牡蠣養殖組合の人にお話しを聞くことができた。

◆東松島市 70 代男性
「こうなってしまったから、ひとりひとりじゃなにもできない。」
「皆が集まって頑張るしかない。わしら、牡蠣しかできんのだから。」
「漁場も津波でやられたけど、逆に海をさらわれて奇麗になった。」
「牡蠣にとっては、最高の環境なんだが、棚がながされて、当時の 10%しかできない。」
「棚の材料(竹材)を仕入れて、来年は 50%、再来年は 100%を目指したい。」
「元のようなやり方ではなく、みんなで一緒にやるやり方になるだろう。」
「特区で、大手が入ってくるかも知れんが、我々自身で地場を守らにゃいかん。」
「そのためにも組合が必要だ。」
「そもそも、大手には、ノウハウがないだろ。」

「金をかければできる話ではない。」
「金、雇用、地元のバランスを考えたい。」
「ピンチは、チャンス。頭を使う時だ。」

力強いお話しを聴くことができた。メールアドレスを交換して、情報交換させていただくこととした。その中で、どんな、お手伝いができるのだろうか？まさに頭を使うフェーズである。海鮮堂に帰ったら、焚き火で焼き芋を焼いていたので一ついただいた。午後は、もう一度、砂運び。

海鮮堂に戻ると、作業はほぼ、終了している。焚き火では、牡蠣を焼いており、焼き牡蠣をご馳走になった。少し、時間が余ったので、海鮮堂のお向かいにあるお宅の整理を手伝った。たまたま、奥様が自宅に立ち寄られた際、バス 3 台分ボランティアを見て、作業の依頼があった。小一時間くらいの作業であったが、庭先が奇麗になり感謝された。奥様のお話によると、

◆東松島市 70 代女性
「当時、避難所(野蒜小学校)には、乳飲み子を抱えて避難された方もいらっしゃった。」
「ちょうど、お産で里帰りしていた時に津波にあってしまって。。。。」
「生後数週間のお子さんを亡くされた方もいらっしゃった。」
「お孫さんが生まれ、亡くなる。天国から地獄でしょうね。。。。」
「今日は、こんなにたくさんの方がいらっしゃって、びっくりしました。」
「きょうは、本当に助かりました。ありがとうございました。」

今夜は、事実上、チーム石塚の忘年会。ホテルのある名取市の居酒屋に繰り出し、おおいに語り、飲み、経済復興にも寄与した。

【2011/12/24】
昨夜の頭と体をすっきりさせるため、朝風呂を浴びる。今年、最後のボランティア、気合を入れて頑張ろう。今日の作業も、昨日の続き、「海鮮堂」の清掃だ。昨日も、チーム石塚の人海戦術でみるみる片付いて行く様子を見ながら、店長も感激されている。地域には、このように、ボランティアが入っていないために片付いていないところが点在する。このようなニーズを拾って行きたい。このためには、現地と直にコミュニケーションできる人間関係を構築していくことだろう。「サポートチーム G」も、「奥松島復興再生プロジェクト」も、「海鮮堂」も、すべて関係構築の一環である。これらを「成功モデル」として残し、伝え、拡散させたい。同じようなニーズは必ずある。これらをネットワークで繋げていきたい。まさに、生態系でありメッシュである。

今日の目標は、屋内の高圧洗浄と、ホワイトクリスマスだ。年の瀬も迫った、X'mas イブ。海鮮堂をイルミネーションで飾る。帰路の時間の関係で、「点灯式」までは同席できないが、真っ暗な野蒜の夜に、輝く光の輪を浮かびあがらせるだろう。2012/3/11 の営業開始に向け、確実な 1 歩を踏み出すことだろう。

屋内の高圧洗浄は、高圧洗浄機で行う。高圧洗浄機が 2 台、1 台はエンジン物。もう 1 台のケルヒャー製の殿堂高圧洗浄機は、AC100V の電源駆動だ。X'mas イルミネーションのためにも AC 電源が必要だ。そこで、ガソリン発電機(makita G140IS)登場。ただ、始動しない。2、3 日前から動かなくなったらしい。では、直すか！

どうも、プラグが被っているらしい。とりあえず、クランキングで燃焼室に空気を循環させて乾燥させる。試行錯誤が続くが、マフラーから生ガスを吐き、始動しない。プラグは何処だ？ばらすか。なかなかプラグが見つからない。プラグを探して分解が進む。「類は友を呼ぶ」。ボランティア参加者の中で、自称、バイク好き、車好き、メカ好きが集まった。4 人で、交替でクランキングするも掛からない。英知を結集して、かれこれ、2 時間格闘していが掛からない。

暫くお昼休憩。作業再開。プラグを見つけた。バラさなければ。ケースを外し、丸裸になったエンジン。先ず、プラグを外そう。 あれ、プラグレンチがない。ソケットレンチを巧みに組み合わせ、「食った」。プラグは、予想通りびしょ濡れ、ギャップを調整しスパークを確認。更に、ガスバーナーでプラグを焼く。ピストンを上死点に合わせ、シリンダーヘッドと排気系、下死点まで下げ、シリンダー全体をあぶる。よし！プラグを戻すが、掛からない。さて。4 人のおじさんが固まった。

ギャラリーが集まる、X'mas のイルミネーションが届けられる。プレッシャーが高まるが、掛からない。。。。プラグか？プラグを取り替えようか？スタッフが近所のホームセンターに走る。同じ型番のプラグはないが、熱価が違うが同じようなサイズのものを調達。プラグギャップを調節して。スパークを確認して、組み付け。ブルルルルルル。行けそうだ。ブスブス、ポンポン、吹いた！。沸き起こる声援の中、空しく、数秒後、カッツンと止まった。駄目か。でも、一瞬でも吹いたということは、燃料系、電気系が働いていることが確認できた。ただ、アイドリングが出来ない。何故だ！スロットル全開でもスローでも同じ、数秒回って止まってしまう。メインジェットが詰まっているのか？残されたのは、キャブ。外そう。フロートチャンバーを外し、メインジェットを取り出す。詰まっている。丁寧にクリーニングして組み付け。期待に胸膨らむ、いざ、クランク。駄目だ。回転が上がれば。。。。

タイムリミット(バスの出発時間)である 15:00 が迫る。既に、クランキングワイヤーが毛羽立っており、いつ切れても、おかしくない状態だ。これが、切れたら。もっと、大変な事になる。諦めよう。これで、今夜のイルミネーションが絶望的。皆さんの期待に応えられず残念。今日の活動は、何だったのだろうか？空しさ × 悔しさ × 申し訳なさ = 最悪。後味が悪いまま、「海鮮堂」を後にした。数え切れない程クランキングした右腕は間違いなく筋肉痛だろう。

【2012/01/07】

年が明け、最初のボランティアは、年末の活動(12/23-24)に引き続き、「海鮮堂」を営業再開に向けて、東名駅付近にある海鮮堂の倉庫の清掃作業。事前に作りつけの冷蔵庫の解体や、外壁の板金などの「業務命令」があり。電動工具などを持参することとした。いつものように、東北道の菅生 SA で休憩。路面が薄っすらの白く、滑りそう。気を付けて歩こう。

いつものルートで野蒜右手に見て、点くように運河通りを進む。途中、信号待ち。あれ、信号が点くようになったんだ。と信号待ちで感激するとは思わなかった。年末に来た時には、気が付かなかった。「信号点灯」という些細な事だが、確実に復興に向けて動いている。小学校前を通過して、東名駅近くの作業現場に到着。9 月に草刈りをした現場の脇だ。水道は使えるが、電気が来ていないので、ガソリン発電機を回す必要がある。

本日のメニューは、

①倉庫の中身を一旦、外に運び出し、内部を高圧洗浄(ケルヒャー)

②備え付けの業務用冷蔵庫の分解清掃

③外壁の修理

作業着手前に、役割分担。冷蔵庫の解体作業は、事前に情報がはいっていたので、パイプレンチやショックドライバーなどの工具を持参した。要するに事実上、役割分担は決まっている。一般の参加者が、①の搬出&清掃作業をするなか、②冷蔵庫の分解に取り組んだ。

パネルの連結部分を外す「特殊工具」が必要だ。業者を呼んだが、結局、専用工具は無く、大型マイナスドライバーで代用することになった。ただ、津波の被害で、冷蔵庫が全体的に歪んでおり、パネルの接合部が外れず、冷蔵庫の解体を断念。作業依頼者にその旨を継げ、了解をいただいた。さて、③の外壁だ。外壁は、組み立て式の「物置」のような構造だが、一部が、ねじれ剥がれている。(左写真)これを順番に押し込んで一応、はまった状態になった。(右写真)

他にも開口部分は、曲がったサッシを外し、塩ビの波板で目隠し、外からスクリューを打ち込むが、かからない。急遽、内部の壁面に「添え木」を組み、外壁と波板を打ち付けた。メンバーに本職の大工さんがおり、彼の指揮の下、腕に覚えのあるメンバーが集まって作業した。プロ顔負けの仕上がりだ。依頼主も、ここまでできるとは思わなかったと感激されていた。作業が一段落、焚き火で豚汁を作り、いただいた。

【2012/1/21】

寒い！前日は、都内や横浜でも雪が降った。現地はどれだけ寒いだろうか？心して出かけよう。雨(霙)は止んだものの、高速(谷和原 IC⇒那珂 IC)は凍結している可能性があり、夏タイヤでは危険だ。少し早めに出発して、下道(R6)でを走ろう。バスの乗車場所である、那珂市役所駐車場に到着。凛とした空気を通り越し、耳が痛い。恐らく氷点下だろう。いわき JCT から、磐越に入る辺りで、薄っすらと白い。更に、山間部である中通りは、完全に白い。天気予報では、曇り後雪、日照は期待できず、かなり厳しい環境だ。いつものルートで、野蒜から宮戸島の月浜に到着。細かなアラレが降っている風は無いが、外にいると、身体が冷える。早く作業を始めたい。

きょうの作業は、「竹林伐採」。宮戸島はいたるところに竹林がある。依頼主の「民宿 かみのいえ」の裏手にある竹林からスタート。ふと、立て札をみると、伐採は、「違法行為」らしい。でも、これじゃ、伐採するしかない。お昼の御弁当が来る前に、石塚観光特製の「すみれ汁」を作る。薪割り、用意した「ナタ」が活躍。竹林の中で 1 本、1 本ノコギリで切り出す度に枝に積もった雪や雫のシャワーを浴びる。切った竹で絨毯ができ、ツルツル滑るし、切り株も残っているので足場が悪い。伐採した竹は、手渡し作業で、300m程山道を下った広場に。この広場には、約 20 件の民宿があり、松島の奥座敷として、隠れ家的な観光地だった。跡形も無いところから、やっと、重機が入り、復興の槌音が聞こえていた。民宿街の入口、案内標識の脇には、仮設住宅。防寒対策工事が終わったはいえ、厳しい冬だろう。作業が終了し、撤収前の僅かな時間であったが、海を見ようと、海岸の方に歩いて行った。夏に来た時は、紺碧の美しい海であったが、今回はマイナス 1℃、アラレが降る天候。その影響か、海は、灰色の魔物のようにうねって、岩肌に白い牙を剥いている。ちょうど、仮設住宅から 80 歳くらいのおばあちゃんが出ていらっしゃった。歩きながら、お声がけした。

◆東松島市 80 代女性
「こんにちは～」
「雪に中、大変ですね。御苦労さま。」
「いえいえ。。。」
「寒いですね～？」

「いや、今日は風がないので過ごしやす方だ。」
「もっと、寒いんですか？」
「でも、海っぺらは、山の方よりはあったけーよ。」
「今日の海は荒れてますね。大潮なんですか？」
「いや、まだ、大潮じゃねぇ。大潮のときは、もう少し上にくる。」
「こうやって、毎日、海を見てきたからよーわかる。」
「毎日ですか？」
「そーだ。わしらにとっちゃ海がないと生きて行けん。」
「はよー、宿をやりたいけど、お客さんがこんではね～。。。」
「でも、少しづつですが、復興してますよね？重機もは入ったようですし。」
「元に戻るには、どんだけかかるか。。。。」
「仮設では死にたくないし、生きてる内に見てみたい。。。。」
「一緒に頑張りましょう。また来ますから。」
「ありがとうね。」

海岸へのゲートの脇に立て看板があり。「私たちの未来の町は花いっぱい」と書かれている。このメッセージが、『幸せの黄色い菜の花大作戦』をはじめとする各種の花壇の整備や植樹活動の原点とのこと。

【2012/2/11】
　いつものように、ボラバスで東北道を走り、宮城県東松島市に向かう。途中、二本松付近、0.72μSV/h。まだまだ、線量が高い数値を示す。今回も、東松島の野蒜地区に入る。2 班に別れ、殆どのメンバーは、宮戸島での作業。残りの数人は、大工の棟梁が率いる、大工チームは、海鮮堂での作業だ。光栄にも大工チームに選ばれた。(工具一式も持ってこればよかった)
　海鮮堂さんは、昨年の 12/23-24 以来、数回、御邪魔している。今回は、根太の上に床を張る作業だ。先ず、地面にビーニールシートを敷いた。これまで、20mm 合板の床だったので、根太の間隔が広い。(3 尺=91cm)今回は、少し薄いコンパネ(12.5mm)を敷く予定なので、(1.5 尺=45.5cm)間隔に、もう 1 本つづ根太を渡して補強した。床を張る際、芯-芯で張るため、柱の部分を加工する必要がある。これが、結構難しい。特にコーナーは、多少の「遊び」を作っておき、斜めに滑り込ませる。ノコギリとノミでの造作は、ちっとした「匠」の世界。15:00、本日の作業終了。10 畳+10 畳+8 畳間の一番奥の 10 畳の内、8 畳分敷いた。
　名取市内のホテルに戻り、街へ繰り出す。ホテルまでの帰路、やはり、ラーメン。バス往路、かねてから木になっていたで「遺体」という本を読了。釜石での震災直後から遺体安置所で作業された方の記録本だ。脳裏に情景が思い描かれ、冷たい空気や臭いまでもが伝わってくるようだ。

【2012/2/12】
　5:00 起床。朝日が眩しい。ホテルを出発する時は、晴れていたが、利府 JCT 辺りでは雪。低温と雪の中の過酷な作業を覚悟したが、現地に近づくにつれ、薄日がさして来た。奥松島鳴海 IC のゲート脇にあるトイレに立ち寄った際、メンバーの一人が、小さな「雪ダルマ」を作り、恋してしまった。昨夜からの雪が薄っすらと積もり、寒々とした野蒜地区。真っ白に凍っている運河を渡り、海鮮堂さんに到着。昨日に引き続き、屋内チームは、「匠の技」で、27 畳

分(1 箇所空き)を完了。5cm の釘を打ち込むこと、100 本余。わずかではあるが、被災地に響く槌音は、復興への足音として響いたことだろう。屋外チームは、コンテナ(倉庫)脇に雨風を防ぐ、作業場を作る。風が強いので先ずは、屋根(波板)は取り付けず、骨組みだけとした。震災前は、商店街だったらしいが、今は、何もない。改めて、津波の凄まじさを感じる。

【2012/3/10】

前回の訪問から、1 ヶ月ぶりの野蒜小学校。雪。今回は、宮戸島月浜での作業。3/18 に予定されている、「復興祭」の準備。仮設テントを張ったものの、その後の雨や雪解け水が大量に流れ込んでしまうため、テント内がぐしょぐしょになる。テント周りの水はけをよくするために水路と側溝を作る。元々、側溝があったとの事だが、津波は運んできた泥とヘドロで泥が体積している。地元の人に聞きながら、泥の中から元の側溝を探りながら掘り当てる。泥は、海水を吸ってブヨブヨなムース上。深く掘ると、ヘドロ部分に達し、懐かしいヘドロに臭いだ。夏頃に作業した、側溝の「泥カキ」を思い出す。足を踏み外し柔らかい部分に足を踏み入れてしまうと、くるぶしや膝の辺りまで沈む。足場の悪い中落ちないように、注意しながらの作業だ。

休憩時間に、ふと、山陰をみると、小さな社があった。ここは、少し、高台になっており、津波避難所になっている。まわりをみると、建物は跡かたもなく基礎だけが残っている。K.S さんから聞いた、東松島市の復興計画によれば、野蒜地区の水を被ったところは、いわゆる運河より海側に当る。運河沿いに新たに、防潮堤を建築するとのことだ。つまり、防潮堤より海側は、もはや、宅地や商業用地としては見られていない。要するに住む地域でなくなってしまう。このため、増改築は許されるが新築は許可が降りない。ここ宮戸島は、運河の海側に位置している。つまり、このあたりに民宿の建築は制限され、復興の見通しが立てられない。このような規制がかかっていることが、復興が進まない理由でもあるが、自治体より、この辺りの事情や、説明会が随時行われ、住民には、防潮堤の「外」で住み続けるか、移転するか？の選択が迫られる。

この避難所も、水を被ったことだろう。震災発生後、ちょうど 1 年が経過した。今夜は、各地で追悼行事が行われるだろう。あまり感情的になり過ぎてもいけないし、多少、自粛ムード。体調も思わしくなかったので、ホテル近くのイオンショッピングモールで、粛々と食事。もう何度も、名取にきて、このホテルに泊っているが、ホテルの目の前にあるイオンに来るのは初めてだ。食後、モール内を散歩していると、皆さん、小奇麗に着飾り、家族で外食やショッピングを楽しんでいる。とても、津波に襲われた町とは思えない。そんな中、震災関連の展示があった。数々の写真が掲示され、ホールの中心には子どもたちが粘土で作った、震災前と未来の名取市のジオラマがあった。実在の地名の上に、ユーモラスな粘土細工が並ぶ。震災前のジオラマは勿論、未来の名取のジオラマもあり、子どもたちの「夢」が形になっている。ついつい見入ってしまった。展示の脇に寄せ書きがあり、ところ狭しと、メッセージが埋まっている、僅かなスペースを見つけ、我々、「チーム石塚」のキーワード「もう来るなと言われるその日まで」のメッセージを残した。復興支援には、終わりがない。現地から「もう大丈夫:」という声が聞こえ、皆さんに笑顔が戻り、現地の方々が自身の足で歩み始めるまで、我々は足を運び、支えながらそっと背中を押すような支援を続けて行きたい。

【2012/3/11】

あれから、1 年の年月が流れた。その道のりは、長かったのか短かったのか？一人ひとりの心に、いろいろな思いが錯綜するなか、震災後、1 年のその瞬間を被災地で迎え、被災地に寄り添うようにしよう。

昨日の雪も上がり、曇り空。今日は、東松島野蒜海岸での清掃作業だ。いつも通り、粛々と活動しよう。いつものルートをと通って海岸に到着する頃、薄日がさしてきた。今日は、この海岸にバス 5 台が終結しており、バス 5 台分のメンバー(約 200 人)が、砂浜に散らばり、瓦礫やゴミを拾う。発泡スチロールの断片が多く散乱している。これは、水産業で魚や海産物を入れる容器だろう。石巻の漁港の市場から流されて辿りついたのだろうか？漁船の積荷の一部だったのだろうか。波に揉まれたのだろう、ボールのように角がなく丸い。また、多分、砂浜では火を点すのだろう、キャンプファイヤーのような「やぐら」が組まれており、やがて、「山伏」による祈祷が始まった。

上空をヘリが飛び交う。今日は「引き潮」なので、消防団などにより、海岸での捜索が行われているらしい。あれから 1 年間、水に浸かっていた遺体はどうなっているのだろうか？などと考えていると、砂浜に埋まった白骨が発見されたらしい、警察による事情聴取が行われている。午後の作業は、14:00 に終了、片付けや着替えを終え、14:46 を迎える。野蒜小学校のアナウンスが風に乗って微かに聞こえてくる。黙祷が開始した。この時間、全ての日本人が、黙祷を捧げていることだろう。いろいろな思いがよぎり、ボランティアで出会った人々や現地の方々の顔が次々に思い出された。こうして、目を閉じていると、波の音だけが聞こえ、しばし、「地球」を感じる。1 分間の黙祷を終え、静かに目を開く。目の前には、蒼い海がひろがり、海風に吹かれ、白い波が立っている。思い思いに、この「時」を共有した。一年前、この美しい海が襲ってきた。そして、全てを奪って行った。砂浜に供えられた献花は、遺族の方々によるものだろう。

第 2 章　心のケア(リスニング)

「ピッピッピッピッ、ピッピッピッピッ.....」
携帯電話が鳴った。
「Team Japan 300 の事務局ですが、今週末、大丈夫ですか？」
「福島の相馬に行ってもらいたいのですが。。。」
「はいっ！」
ついに、Team Japan 300 から出動の要請があった。思わず、「はいっ！」とは言ってみたものの、誰と、何処へ行って、何をする。何も決まっていない。事務局からのメールを待ち、メールに書かれた同行者の連絡先に連絡を入れる。Team Japan 300 では、自己完結であることが求められ、全て自分で調整することが原則。メンバーから改めて、連絡があるらしい。活動場所は、福島の相馬市、南相馬市、郡山市でのリスニングボランティアだ。本来、ボランティアは現地での活動内容を選べる立場ではないが、兼ねてより興味があり、希望していたボランティア活動ができるわけだ。とはいえ、これまで 2 回の泥カキ作業[6/18-19、7/23-24]も、決して無駄ではなく、むしろ、ボランティアを始めるに当っての必要なプロセスであったとも考えられる。つまり、瓦礫を見ずして、心のケアなんてできるものではない。泥カキ体験から、被災者の苦しみ、ストレス、絶望感などをリアルに感じることができるのではなかろうか？仮に、泥カキなしでリスニングに入ってしまうと、薄っぺらなものになってしまう気がする。その意味で、泥カキボランティアへの参加は有意義なものであり、実際、いろいろな事を感じ、貴重な体験をすることができた。この肌で感じた体験をリスニングボランティアの現場で活かさなければならないだろう。福島県入りは初めてだ。これまでに出向いた宮城県に比べて、放射線量が高いところがある。「お守り」のつもりで、線量計を調達して持参することにした。通販で慌てて購入したので、誤ってロシア語版を購入してしまったが、何とか出発までに間に合った。使い方を覚えるため、ロシア語のマニュアルと闘い、なんとか、計測方法をマスターした。

「心のケア」いうと、少々大げさに考えてしまうこともあるが、反面、気軽に心のケアと言ってしまうこともある。「心のケア」を完全に実施することは不可能に近い。とはいえ、避けては通れない課題であり、指をくわえて見ているわけにはいかない。「できないから諦める」ではなく、「できる形で支援する」という立場で支援をしたい。また、「心のケア」という言葉自体、ひとり歩きしてしまい、いろいろな誤解を招きやすい言葉でもある。そこで、我々が実際にできることは、何だろうと考え、敢えて「心のケア」、「カウンセリング」、「傾聴」とは表現せず、「リスニング」と表現しよう。つまり、「心のケア」、「カウンセリング」、「傾聴」という言葉は、過剰な期待をされることもあるが、反面、胡散臭く、場合によっては、軽蔑の対象となることもある。これは、このようなサービスの品質を保証することが出来ない性質のものであること、更に、品質とは、サービスを受ける側の価値観で大きく左右するものであることに起因する。つまり、評価の「ものさし」がないのである。とはいえ、我々ができるのは、せいぜい、「親身になって聴くこと」だけであり、評価を受けることが目的ではない。ただ、「カウンセリング」や「傾聴」を否定するわけではなく、むしろその知識や手法、技術を習得した上で、極自然な形で活用しながら、「リスニング」をするのである。 一般に、カウンセリングの世界では、「傾聴」という言葉があり、「相槌」、「うなづき」や「オウム返し」など表面的、形式的な手法として教えられている。しかしながら、実際には、これらの手法に留まらず、カウンセラーが相談者との人間関係を構築した上で、相談者に「共感」し、「寄り添う」ことにより、心理的な面での関わり会いを深めていくプロセスでもある。その結果、相談者に、本音や本心、心の叫びなどの葛藤を吐き出してもらい、気づきを促すための一連のプロセスと考えられ、カウンセリン

グでの基本的な姿勢であり、態度である。このような過程では、どのような手法を提供するかという「カウンセリング技術」よりも、その根底にある、自身の人間性や人と也が問われる。という気持で臨むべきであるし、この気持がなければ、信頼関係は築けない。

ところで、今回のようなリスニングボランティアは、一般のカウンセリングと決定的に違う部分がある。それは、カウンセリングの場合、一部の例外を除き、多くの場合、来談者の意思によりカウンセリングに出向いてくることが前提となっている。ところが、リスニングボランティアの場合、多くは、相談者の意思とは無関係に話あいが始まっていることが多い。これは、スポーツの試合などの、「ホーム」と「アウェー」の違いとも言える。つまり、気持と緊張感が違う。リスニングの場合、本人に「相談」という意識がないところでの、話し合いであるので、言ってみれば一種の雑談である。また、ボランティアが勝手に押し掛けてというケースが多いので、対象者の心の準備ができていない状態から、始まってしまうことになる。また、相談者と 1 対 1 での面談になるとは限らない。いわゆる、ピアカウンセリングのような形態で、オープンスペースで複数人が同じ土俵で話しをするパターンだ。また、複数人で話すということでは、エンカウンターグループにも通じるが、そもそも、自己啓発や、教育目的ではない。もっと、フランクな、「井戸端会議」のような情報交換の場と考えた方がよいだろう。参加者同士が、知り合いであったり、面識がなかったりで、自ずと、話す内容にも制限が加わってくる。その場合、1 対 1 になってもいけないし、司会進行役になっても不自然である。臨機応変いろいろな役割を瞬時に切り替えて対処する必要もある。特に、肩もみ、マッサージなどを施している場合、どうしても、1 対 1 の会話になりがちではあるが、黙って、参加者同士の会話や、参加者同士の会話を聞いている立場もあり得る。このような場合、他の参加者の話を聞いていることを邪魔してはいけない。その人は、今、どの会話を聴いているのか。目線の動きなどを敏感に察知しながらの対処となる。つまり、いつもより敏感に「空気を読む」必要もあり、アンテナを張っておく必要がある。

また、この震災の報道などを通じて、心的外傷後ストレス障害(PTSD)という言葉を耳にする機会が増えた。PTSD とは、Post Traumatic Stress Disorder の略語で、心的外傷後ストレス障害とは、戦争やレイプ、虐待、自然災害など突然、襲ってきた事故や災害などが、自我に強烈に作用し、それが傷跡を残す。その後、悪夢、フラッシュバック、頭痛、吐き気などさまざまな身体症状が見られる。極度なショックとストレスを受けたことに起因するも、自覚症状も少なく、後に、不眠症、依存性、鬱状態などの心的障害に至る。このような症状に至るか否かは、個人的要因が多いとされているが、避難所や仮設住宅にいらっしゃる方々は、少なくとも、PTSD の原因となり得る体験をされており、このような知識を持って対処する必要もあろう。そして、これらの対処としては、少しでも、ストレス状態から隔離し、前向きに考えることで、症状が緩和されるだろう。とはいえ、生身の人間であり、薬を処方すれば治るものでもない。ストレスを溜めないためにも、よりよい人間関係の中で、対話や告白を通じ、心の蟠りが薄れてくる。また、思いっきり泣くことも、心の安定への入口でもある。ところが、被災者の、方々が置かれた環境を考えると、避難所は、雨風をしのぎ、暖を取り、食事をするだけであり、生きるための最低限の環境に過ぎない。増して、個人のプライバシーが、全く保たれていない状況で、泣くに泣けない状況であろう。常に緊張を強いられているわけである。このような環境面を改善し、話を聴くこと、思いっきり泣いてもらうこと、そういった形でお役に立てれば嬉しいと思う。

一般に、災害時の心的外傷として、次のような症状が考えられる。
⑴全てを無くしてしまった虚無感と絶望感
仕事、家財など物品や、家族、親類、親友などの人間関係を失なってしまった虚無感と絶望から、何をやっても手が付かず、投げやりな気分になり、現実逃避したくなる。慢性的な鬱状態に陥りやすい。
⑵フラッシュバック、依存症
ショックな出来事を忘れようと思っても、音、臭いなどの刺激で、思い出してしまう。そういう自分が嫌になったり、思い出す可能性がある事物を意識的に避けるようになる。アルコール、ギャンブルなど一時的に、忘れることができる物に傾注し、依存症に陥ることもある。
⑶助けられなかった罪悪感
大自然の営みを前に、どうすることもできず、最愛の人と別れることになってしまった。あの時、他の方法を取っていたら、別の判断をしていたら、助かったかも知れない。また、自分が身代わりになれれば、など後悔の念と罪悪感を払拭出来ない。

このような心的障害は、状況に応じて複合的な症状が現れ、これらに対する対処は、一概に決めることができないが、基本的には、相談者の話を「良く聴くこと」に尽きる。「聴く」というのは、単にボンヤリと「聞く」のではなく、話者の一語一語に集中して言葉を拾い理解し、その言葉の奥にある気持ちを察し、「よき理解者」として共感する。自分の意見や価値観、私情を挟まず、素直に肯定的にひたすら聴くことである。勿論、その前提には、良好な人間関係を構築しておくことが不可欠である。自分の話を親身になって聴いてくれる相手がいるだけでも、どれだけ、心が安定するだろうか。そこで、日頃から言いたくても言えなかったこと、愚痴、なげき、悲しみを話すことで、内に秘めた重荷を吐き出し、打ち明けることで、心の荷物を降ろすことができる。もっとも、被災者の、話を聴いたからといって、元通りの生活に戻ったり、根本的な課題が解決ができるわけではない。しかしながら、聴くことは、目に見えない支援であり、地道ではあるが、継続的に心をケアすることが、復興への原動力になると信じる。そして、今後も、継続的な活動が必要であろう。1 回限りでなく、「また、来てくれた」と感じていただくことが、真の支えであり、このようなボランティアマインドを伝え広めていきたい。勿論、心的にストレスがあるような環境では、いきなり、センシティブな話題にはならないだろう、心の距離を縮めるためには、何気ない日常的な会話や、雑談が有効なのである。今回に場合を考えると、東電や政府に関する話題であれば、「よくやってくれてるね」というご意見が帰ってくるはずもなく、不満や、怒り、愚痴が飛び出すことは間違いない。不満や、怒り、愚痴を吐き出してもらうには、有効な話題だろう。ただ、一方では、家族の話題などに言及するには、危険である。また、一般に高齢者の会話では、お孫さんの自慢話が多い。かといって、「お孫さんは？」とは聴けないだろう。仮に、家族を亡くしてしまった場合も考えられるからである。このような場合、家族の話を聴くことなく、話されるのを待つことになる。もっとも、最終的には、「実はね～」で始まる、秘めた話をが話せるような信頼関係を構築することが目的ではあるが、最初から触れる話題ではない。更に、注意しなければならないのは、「自殺願望」と「希死念慮」である。「自殺願望」は明確な理由があって自殺したい場合で、「希死念慮」は幻聴などの精神障害によるもので、理由が不明確なものを言うが、「震災で」という理由であれば、「自殺願望」である。言葉の定義はさておき、自殺願望では、一般に、未来の事柄を語れなくなる。つまり、「来週は何をやっているかわからない」など、予定が立てられない状態になる。更に状態が進むと、「今度の大潮の時、お父さんのところ行く。」というように、具体的な自殺の計画を思い描くようになる。会話の中で、このように自殺をほの

めかすような言動が含まれていないかを注意する必要がある。また、ドラマの予告編を語ったり、スポーツの勝敗の予測をしたり、次回までの宿題を与え、未来の約束をすることも、自殺防止になることがある。自殺願望など複雑なケースは、精神科医などの専門家にリファー（連絡）して、チーム医療で対処することも必要になるが、そのトリガーを見つけるのは身近な人の仕事であり、責任である。

ただ、「〇〇療法」、「信頼関係」、「傾聴」とか「PTSD」など、難しいことを言うと、なじみながなく、なかなか手が出せないし、尻込みしてしまう。しかし、なまじ知識があるより、人間性を前面に出して対応することが、相手には誠意とか、真摯さという形で伝わり、結果的には良いことがある。逆に、白衣を纏い、知識や理論を語り、自分のペースで喋るのは、カウンセラー失格であり、危険ですらある。とはいえ、知識が必要ないわけではなく、知識はあった方がよい。知識を持ちながら、知識で武装することなく、それを全面に出さず、自身の「人間性」をあらわす形で対処すれば、必ず相手に伝わるという信念で臨みたい。相手にプレッシャーを与えず、いなくなってから、存在の大きさを感じさせるようなカウンセラーが理想的である。究極のカウンセラーは、「車 寅次郎」(通称：フーテンの寅)とも言われる。ただ、実際には、本質ではないが、「〇〇先生」という「ブランド」や「肩書き」や具体的な投薬や診療行為を期待される場合もあり、リファー先を準備しておく必要もある。

本来、人間は、集団の中で生活しコミュニケーションするように作られており、コミュニケーションすることが自然である。このため、誰しも、聞いてくれる人がいると話易いし、話していることが心地よくなるのである。また、話すことは、自分の存在を意識させ、アピールするための手段であり、例え、無口な人であっても、持ち合わせている基本的欲求である。この欲求を満たすことで、失いかけたアイデンティティを取り戻すことができるのである。ただ、このような状態になるためには、繰り返しになるが、話相手との信頼関係を構築することは必須である。つまり、このような些細な会話を切り口に、信頼関係を構築し、話す相手にとって、「この人は信頼できる」と安心して話ができる「場」であることを感じてもらう。これがない限り、本音トークや、悩みを打ち明けるなどできる筈がない。「傾聴」において、信頼関係の構築は最重要なプロセスであり必須の条件であり、このために、多くを語らず、質問せず、相手の心に寄り添って、ひたすら聴くことに徹するのである。

このような背景から、我々が展開している、被災地でのリスニングボランティアでは、唐突に「お話ししましょう」とお誘いするのではなく、肩もみ、マッサージ、ツボ押し、ヨーガなどボディタッチで心理的な距離感を縮めるアプローチを採る。これらは、避難生活という高ストレスの中で求められるリラクゼーションであり、ストレスが溜まった身体を物理的、精神的に解す効果がある。また、孤独感からの人恋しさもあり、コミュニケーション枯渇から、「心理的な触れあい」を求めていらっしゃる方も多いように思えた。

【2011/8/27[午前]】

事務局から連絡があり、メンバーが決まった。大阪から 2 名の女性がいらっしゃるようだ。その後、メールと電話でメンバー相互に連絡を取り合いスケジュールが決まった。先ず、8/27 は、福島県立医科大学及び関連医療チームが主催している「ちょっとここで一休みの会」に参加する。9:30 からの開始ミーティングに間に合うよう、JR 福島駅に 7:00 集合とした。ここで、3 名が合流して相馬市の保健センターに向かう。この会は、毎週土曜に相馬市市役所の保健センターで開催しており、震災を機に、投薬の継続が難しくなった、地域の精神疾患の方々や、ストレス、PTSD などの諸症状や、DV(Domestic Violence:家庭内暴力)などにより、心的な障害を持つ方々を家族ぐるみで支援する心のケヤを行っている。会を開催して

以来、参加者の口コミにより広まりリピータも多い。当日は、子供、家族、を含め 19 名の参加。過去最高人数とのことだった。子供のコーナーでは、未就学の幼児や、小学生低学年の児童に対し、お絵かきやビーズなどで遊ぶ。この地域は、原発から、約 40km に位置しており、場所により放射線量が高い区域もあり、子供を野外では遊ばせられない。実際、放射線量計を携帯して現地に入ると、思わぬところで、高い線量を示すこともあり、放射線量は原発からの直線距離に必ずしも比例するものでないことがわかる。同時に、政府が示した 20km 圏内の「警戒地域」の説得性に疑問が残る。更に、測定値に×24×365 を計算して、年間に許容できる被爆量を計算してみる。我々のようにボランティアの活動で数日間訪れるのであれば、レントゲン検査を数回受検した程度だが、ここで 24 時間、365 日生活を営む方々は常に放射線に曝された状態での生活を強いられており、「人体には影響のないレベル」であるはずがない。特に幼児、子供については、大人の比ではない。この結果は、数十年後に明らかになる。これは、ある意味、「人体実験」ではないだろうか。

　このような地域に住む子供たちが、この会を週に 1 回の遊びの場として楽しみにしている。医大の先生やインターンを中心に、地域の精神科を持つ病院の看護師の有志が集まって支援を続けている。Team Japan 300 としても、この会に定期的に参加してお手伝いをしている。

◆相馬市 60 代女性
「あん時？私ら逃げようと思ったら、新潟に嫁いだ娘から連絡あってな、新潟に逃げたんよ。」
「TV も新聞も信用できへんし、ネットを見ても、いっぱいあってよわからんようになってな。」
「最後は自分の勘よ。」
「放射能は、目にみえせんし、臭わんし、だから怖いのよ。」
「まず、息子ら夫婦と孫を先にやって、私しゃ少し家んなか纏めて、新潟へ逃げたんよ。」
「娘んとこっていっても、そりゃぁ、肩身が狭いがな。」
「2 週間くらいで、戻ってきて。。。」
「壊れた家を直したり、かたずけたりで。」
「でもな、放射能で大工もきてくれんで、自分でやるしかねえっぺ。」
「私しゃまだ動けるでええけど、動けん人はどないししょるんだろ。」

◆相馬市 80 代女性
「あー気持ちええな～。」
「肩なんて揉んでもらったことないし、運転で肩がはって。。」
「運転されるんですか？御元気ですね。」
「いやいや、あそこの電動車いす。あれも廊下を曲がったり結構難しいんだわさ。」
「それは、気使いますね。」
「このくらいの強さでいいですか」
「もっと、ぎゅーってやってもええよ」
「あーエー気持や～。極楽、極楽」

【2011/8/27[午後]】
　午後、相馬より南に 20km 弱で、原発からは 30km 圏内にある、南相馬市立石神小学校を訪問した。20km 圏内の「警戒区域」は目と鼻の先だ。ところが、放射線量を測定してみる

と、0.5μSV/h 程度でそれほど高くない。事故当時、原発の爆発などによる放射能から文字通り逃げるように避難所に避難した方々で体育館は、満員だったらしい。世帯毎に 1 区画 8 畳～10 畳ほどのスペースに、膝丈くらいのダンボールでつくられた塀で囲み、人目に曝された環境で細々と暮らしていた。その後、仮設住宅への移動に伴い、ダンボールの塀が一区画づつ片付けられ、いまでは半分ほど、床が見えるようになった。薄暗く広い体育館の片隅に大型の TV があり、パイプ椅子が並ぶ。避難所の憩いの場だ。TV から流れるバラエティ番組の明るい笑い声が、人影が少ない体育館に響いていた。日中は、殆どの人が買い出しやら、仮設住宅への移転の準備などで、ここにはいない。このため人影はまばらだが、体育館の片隅で残っている高齢者の方々にお声がけをして集まってもらい、ヨーガで身体を解してもらうことにした。

◆南相馬市 70 代男性
「お父さんの(体)柔らかいですね。」
避難所でヨーガと肩もみの催しに、遅ればせながら、マイマット持参でいらっしゃった。
「農家やっていると腰にきてね。」
「一時、立てなかったんだ。そーだ、もう、20 年も前だ。」
「畑ができんようになってはいかんと思ーて、毎日ストレッチっていうの、筋を伸ばして、」
「それも、日頃の反対のことするとええみたいだ。」
「縮めたら伸ばす。曲げたらのばすってことだ。」
「毎日やっとったら、腰が動くようになり、いまじゃ、。。。」
と、床に座って、両足を時計の針のようにまっすく開いて前屈し、額が床についた。
まるで、現役の体操選手のようだ。
「お父さん凄いですねぇ。」。。。
「俺は、小学校っ時、あれ、天皇の玉音ちゅーのをラヂオで聞いた。」
「戦争には言ってないけど、竹やりとかで遊んだな～。」
「浜通りにや海岸線に沿って、松並木がずーっとあってな、」
「それに登ちょるとグラマン(米軍)に狙い撃ちされるって、よー怒られたもんよ。」
「そのグラマンが畑に無事着した時があってな、」
「みんなで、竹やり持っていって、よってたかって袋叩きにしてやった。」
「向こうの兵隊さんはとんだ災難だはな。」
「竹やりでもやく役に立つんだなこれが、はっはっは。」
「昔は、細かい村でな、町んなって、今じゃ、市役所まである立派な市だ。」
「でもやっとることはなーんもかわらん。畑耕して野菜育てて、、、」
「原発さえなけりゃ、こうはならんかった。」「悔しいっちゅうか。。」

【2011/8/28[午前]】
　二日目は、郡山にあるコンベンションホール「ビッグパレットふくしま」(福島県産業交流館)を訪問した。広々とした新しい施設で、郡山のランドマーク的な存在だった。ここが、震災以来、市内でも最大級の避難所になっている。震災直後から、放射能被害が甚大であった、富岡町と川内村(20km 圏内の警戒区域)の方々がバスで集団避難されている。去る、4/22 東電の清水社長らが、謝罪で訪れた避難所だ。多い時には、2,500 人以上が避難されていたが、その後、急ピッチに進められる仮設住宅の建設と同時に、仮設住宅への入居が進み、8/31 で閉鎖の予定。このため、人影もまばらだが、駐車している自衛隊の車両や、ズラッと

並ぶ仮設トイレや仮設風呂などが、当時の様子を物語っている。公開されている収容人数などの事前の情報では、まだ、100 名弱の方々が避難所にいらっしゃるとのことだったが、これは、名簿上での登録者の数であり、実際には、殆どの疎らな状態であった。実際、これらの情報を基に多くの人が動くため、はたからみれば、情報は正確であってほしいと言いたいだろうが、実際に、現場のスタッフは、ギリギリの状態で稼働しており、まさか、毎日、点呼することもできず、このような数値を正確に把握することは、難しいだろう。数値化、見える化は重要であるが、情報化の難しさを痛感するとともに、改めて「現場(被災地、避難所など)に出向いてなんぼ」という「現場主義」の大切さを感じた。

ホール内には、パーティションの「枠」だけが残る。この「枠」は、直径 10cm 位の厚紙製のパイプで、トイレットペーパーの芯を大きくしたようなものだ。ちょうどジャングルジムのように組み立てられ高さが 2m 位だろうか。きっと、世帯毎に布などで間仕切りできるようになっていたのだろう。当時はこの広いホールが間仕切りされた枠でいっぱいだったとのことだが、今は数世帯が残り、仮設住宅への引越しの準備で忙しく動かれている。ホールの片隅をお借りして「肩もみマッサージ」をはじめることとした。引越しの邪魔をするわけにはいかないので、時々がホールを通路代わりに利用される方々に、「お身体を解しましょう」、「肩もみします」などとお誘いし、最初は 2、3 名だったが、数名で肩もみを始めると、通路を利用する方々から「何をやっているんだろう？」とばかり立ち止まり、「私も肩を揉んで欲しい。」、「仲間に入って雑談したい。」と言わんばかり目つきで興味深く眺められている。お誘いすると、ほぼ確実に参加していただけた。短い時間だったが、都合、8 名方々とお話ができたので、その一部を紹介することにしよう。最初は、重々しい雰囲気だが、肩もみ、マッサージにより、体も、気持ちもほぐれて来る。話し相手に飢えている感じで、話出すと止まらない。表面的には楽しんでいただいたが、心の傷はもっとも深いところにあるのだろう。

◆富岡町 70 代男性
「津波で流された方が良かったんや。」
福島県双葉郡富岡町、ここは、福島第一原子力発電所から、20km 圏内の警戒区域。
震災があった直後、避難命令が出され、着の身着のままでバスに乗って集団避難された方々だ。その後、郡山の避難所での生活を強いられた。震災から、5 ヶ月、僅か 2 時間の一時帰宅はあったものの、何も整理がついていない。
「瓦が落ち、畳もぼろぼろだろ、冷蔵庫も大変な状態だろう。」
「家畜、畑、庭木、、ほったらかしだ、震災さえなければ、原発さえなければ、。。。」
「今頃、優美な枝ぶりを見ながらビールを飲んで天国であったに違いない。」
「それを思うと悔しくて。。。。。」
「悔しいでしょうね。奇麗なお庭だったんでしょうね。」
「草がこの辺(胸の辺りで手のひらを下に向けて)まで、生えちゃって、もうだめだな、(庭木には)虫もたかっていたが、2 時間じゃ何もできないので諦めた。」
「嘆いても仕方がない、何度ほっぺたを叩いても、現実は現実、全てを失った。」
「残ったのはこの身体だけ。幸い、家族は無事だったが、もう、あの家には帰れない。」
「畑もできない。見通しが立たないまま、仮設住宅に移ったが、あんな、箱に押し込められて。。。」
「俺たちのどこが悪いんだ。悪いことなんかしていない。」
「若い頃から、ずーっと真っ正直に畑を耕し、品種改良に頭をひねり。。。」
「でも、何もかもなくなった。人生までなくしてしまったような気がする。」

「弁護士の話聞いてきたけど、東京の弁護士はだめだな、全然、俺らことわかってない。」
「やっぱ、地元の弁護士じゃねーとな～。」
「東電も政治家も、何―も知らずに、毎晩酒のんで、芸者上げとるんやろ。」
「腹が立つけどどうしようもない。」

◆富岡町 80 代男性
「俺は、小さいとき、東京に丁稚奉公に出ていたんだ。」
「あの頃、茶碗にちょこーんと盛ったのご飯とお実御付けと小皿のおかず。」
「おかずといってもなんだ、めざし一匹くらいだったな～」
微かに、目を潤ませながら、一点を見つめ、終戦当時を回想する。
「3 月にここへきてから、あっち行けこっち行けと、結局五回目(の引越し)だ。」
「どーせ 富岡にゃ帰れねーだろうから、『仮設』じゃねえっぺよ。」
「ずーっと住めるようにして欲しいけどよ、そう言ったら、故郷を捨てるってことだろうよ。」
「やっぱり。。。」
「帰りたいよそりゃ、先祖からもらった土地で自分が生まれ育った土地だもの。。。。」
ついつい、口に出るのは、川内に伝わる民謡

♪川内良いとこ、よってけ、よってけ♪

「こうなる前に、この歌を長老から教わってな、レコーディングしたんよ。」
「孫子の時代に残そうと思ってな。」
「出来上がったんで、長老さんとこ持ってこうと思うとった矢先。。。。」
「こんなことになってしまって。」
「もう長老さんにも会えんだろうな～。」
なかなかの歌声で、気持ちよさそう唄われ、気がつくと、マッサージの手が、手拍子になっていた。時間が許せばフルコーラスをお聞きしたかった。歌っていただきたかった。

◆川内村 60 代女性
「避難所へ来て太っちまったよ。」
「毎日、あの弁当やろ。」
「大盛りご飯と、油っこい、そうそう、ハンバーグみたいなやつだろ。」
「ここ(避難所)じゃぁ、動かねーし、ぶくぶく太ってあたり前だ。」
「あんまり多いんで、(ご飯の)半分を旦那にやって、食べないようにしていたんよ。」
「それに、あのハンバーグも飽きてくるな～。」
「若い者はいいかも知れんが、年寄りは、蕎麦とかうどんとか食いたいやろ～。」
「で、外(のお店へ)行ってんのよ。」
「最近は弁当の量も減ってきたがな。」
「第一、体動かさんもんで、足腰が痛くなる。」
「こういうとこでもんでもらえると助かるわー。」
「足湯も先週でやめちゃったし、血圧計も昨日片付けとった。」
「部屋でじとーとしとっても、つまらんで、こうやって、うろうろして気晴らしでもせんと。」
話相手も求めるように、サークルに加わって、休むことなく、話されていた。
一見、話題が豊富で、元気なお婆ちゃんに見える。でも話の内容をよーく聞いてみると、

「爺さまは、5 月に首つっちゃってな。」
「死ねる人はいいのよ。」
「そーいやー、隣の爺っちゃんも、ここ(避難所)来てから亡くなったし、寂しくなるわ。」
「親戚、家族だっていっても、こうなりゃバラバラだね。」
「若いもんは、よそいきゃええけど、わしら年寄りは、なかなか離れられん。」
「先祖からもらった土地だし。」

◆川内村 80 代男性
「お父さんお元気ですね～。体の柔らかいし。」
「農家は体動かすでな～、年とると肉が硬くなって動かんようになる。」
「こうやって、ほぐざないかんな～。」
「。。。。」
「今日は、東電の仮払金の話で、弁護士が来たんで、話し聞きに来たんやけど、」
「その後、血圧でも測ろうと思っちょったけど、あーゆーの聞いちょると、血圧があがる。」
「そんで、ここで、落ち着いてから測ろうと思って。」
「あー、そーですが、ゆっくり休んでってください。」
「このまえ、清水(東電の社長)が来た時な、みんなよー言わんで、言ってやった。」
「『どう責任取るんだって』、『頭下げられても元には戻らん！』」
「だいたい、来たのが、4 月なってからだろ～。」
「どう思もっちょるんだか。。。」
「東京でちーんと座っとらずに、避難所の硬い床で寝てみろ、仮設の箱ん中入ってみろ。」
「わしらのこと、全然分かっとらんな～。」
「選挙なんてどーでもええんや。」
「『はよー原発持ってってくれや』、『地元に帰してくれや。』って、言うても何にもならん。」
「そういう話題は、また、血圧上がりますよ～」
「こりゃ、10 年かかる。わしらは、その頃にゃおらんようになっとるで、孫が心配だな～。」
「 みんな、東京さ出て行って、帰ってこんようになる。」
「墓も守れんし、先祖に申し訳ない。」

◆富岡町 80 代女性
「最近、左の膝が痛うなって。。。」
「そうですね、床は固いし、慣れない土地ですものね。」
「それでも、やっと、畳の上で寝られるようになったんや、」
「そうですが、仮設に移られたのですね。」
「そうや、狭いけど、ここ(避難所)よりはええ。」
「今日は、暇だし、みんなどうしてるかなーって散歩してるだけや。」
「そしたら、肩もんでくれるって言うもんで。」
「どうぞどうぞ、ゆっくりしていってください。」
「放射能っつうのは、目に見えんで困ったのー。」
「そうですね、痛くも痒くもないし、臭いませんし。」
「そーや、それでいて、入っていかんとか、避難しろって言われても、実感沸かんは。」
「地震で、よう揺れたけど、幸い瓦が落ちたくらいで、十分住めるのに出て行けいわれて、よー分からんうちに、ここ(避難所)におったわ。」

「そんで、あっちだこっちだと、いろいろあって、やっと仮設に移って一段落やけど。。。。」
「仮設から、買い物いくにも車もないやろ。」
「そんで、八百屋とかが売りにくるのは助かるんやけど、高いんやこれが、」
「人の弱みぃつけこんで、弱い者いじめやあれは。」
「車がある人に頼んで、1 週間分買出しや。」
「当分、元のようにはいかへんけど、食っていければいいかと思って。」
「それにしても、東電は何―んもしてくれん。」
「わるいのは、あいつらだって分こうとるのにな～。」
「てめえの親がこういう立場だったらどうするんやろ？」
「なんで、私らがこんなんならんとあかんの？って思うけど、だれに言っていいかわからんだろうし。」
「こうやって聞いてくれるだけでもすーっとするは。」
「あんたらも大変やろ。何処からきなすった？」
「私は東京です。他の二人は大阪からです。」
「実は、私も、東海村の JCO 事件を経験しており、放射能の怖さは身に染みています。」
「それに今回もそうですが、情報が分からない、届かない、だから不安になる。」
「悪いことは隠されてしまうのでしょうね。」
「そーか、そりゃー大変でしたね。」
「でも、ここ(福島)とは、規模が違いますし。。。」
「政治家ってなんやろね。」
「わしらが払った税金で食ってるくせに、なんであんな対応しかできんのやろ？」
「さっきも、弁護士の話きいてきたんやけど、はよー終わらせたいっつーか、私らのこと真面目に考えてくれてんのか、よーわからんよーになってきたな。」
「こっちが、『もう、ええ』って言うの待ってるようだし。」
「政治家も東電のやつらも、ここへ来て、生活してみぃ。」
「1 週間でええは、なんなら 3 日でもええ。」
「ここ(避難所)の飯食って、寝泊りしてから、ものを言えって言いたいは。」
「先日の一時帰宅の時に、何を持って帰ろうかと思ってな。」
「そんで、お父さん(のお位牌)だけ持ってきたんよ。」
「これで、ひとりじゃないって思ったけど、よー考えてみると、やっぱりー人なんや。」
「時々、親戚とか、ボランティアさんが声をかけてくださるけど、みんなー時的で、しばらくしたら、帰ってしまう。」
「結局、一人だなーって思うことも。」
「家は大家族でね～、みんなでやってきたのに、どうなってしまったんだろう。」
「このあと、どうなるんやろ。」

◆富岡町 60 代男性
「肩もんでくれるの？」
「ええ、どのあたりですか？」
「お父さんは何処からいらっしゃったんですか？」
「富岡だ。」
「じゃあ、こちらのお父さんとご近所ですか？」
「ご近所って言ったって、富岡も広いから。」

「そーですか。」
「高いところもあれば、低いところもある。」
「放射能線量ですか？」
「そうだ、風向きちゅーか、地形だな、低いとに溜まっとるようだし。」
「目にみえりゃ、来た来た！って逃げれるけど、目に見えんから、本当に来たかわからん。」
「逃げろって言うから来たけど、近所でも残った人もいた。」
「残っても、来ても、どうするんやろこれから。」
「見通し立たないですからね～」
「だれも、こうする！ってはっきりしたことよう言わんのやろ。」
「頭のええ人は、なに考えてるかわからん。わしらがどうなってるか知らんのやろ。」
「見なきゃ分からんだろう。」
「そうですね、みんな、見に来い！ってことですよね。」
「ところで、仮設住宅はいかがですか？」
「どうもこうも、あそこにいるしかあんめぇ。」
「8 畳っていっても、畳が 8 枚あるだけで、(両手を広げて)1 枚がこんな小さいんだぁ。」
「実際は、6 畳くらいだっぺ。4 畳半っていったって、ありゃー納戸とかわりゃしない。」
「箪笥おいたら、寝るとこなくなっちまうな。」
「それに、向こう(の仮設住宅)は、8 畳が 2 間、こっちは、6 畳と、8 畳。」
「まぁ、比べてもしゃーねーけどな。」
「畳の上で寝られるだけでもましって考えるしかあんめぃ。」

【2011/8/28[午後]】
　午後は、ボランティアセンターである「ビッグパレットふくしま」内で活動している、「おたがいさまセンター富岡」のスタッフの案内で、郡山市内に点在する仮設住宅の内、1 箇所を訪問した。市内の随所で、仮設住宅の建設が急ピッチで、進められており、「建設中」の看板が目立つ。訪問したのは、郡山駅から程近い、住宅地の一画で、ここには、約 200 世帯分の仮設住宅が並ぶ。2LDK 程度だろうか、平屋のアパートのような感じで安普請であることに否めない。敷地内にある、「集会所」でヨーガにより、身体を解していただく趣向だ。前座でボランティアによる「マジックショー」があり、その場を引き継ぐ形であったため、「客引き」などのお声掛けは不要だった。年配の方が多く、慣れない生活とストレスのために足腰の不調を訴える人が多い。このような環境で、コミュニケーションと採るための手段として、ヨーガやストレッチは、より親密な人間関係を構築するためにも、効果的で、有効な手法であろう。
　仮設住宅が設置してある地域は、既設の住宅街に隣接しており、買い物なども便利そうだ。ただ、道を隔てて、こちら側は仮設住宅で、向こう側は一般の住宅地という形である。見方を変えれば、この道を隔てて両側で、世界が異なり、空気が違うわけだ。既設の住宅街で暮らしていた人にとっては、地震には遭ったが、それほど被害もなく、放射能も津波も関係ない世界だろう。地元では、福島県は、「会津」、「中通り」、「浜通り」という名で縦に 3 分割して考えられており、これらの間には、山脈があり、地理的にも隔離されている。このため、文化や習慣が違い、言葉も微妙に違う。今回の避難では、原発のある「浜通り」の人たちが、郡山がある「中通り」に避難して来たことになり、「別の土地に来た」という感覚があり、心理的な距離感がある。そして、お互いに、よそよそしさがあることは否めない。一部では、『東北地方の方々は、総じて忍耐強く、謙虚である。』との報道があったが、これらの報道は地元のこのような意識や文化の違い、心理的な距離感を知ってのことだろうか。少なとも、ボラ

ンティアに出かけるメンバーは、このような地元の事情などを予備知識として理解した上で現地入りしたいものだ。震災直後、急に、道を隔てた隣に仮設住宅ができ、被災された方々が移ってきた。その結果、被災者と同じ区域で暮らすことになった。移り住む側、受け入れる側、それぞれに葛藤があり意識の違いは否めない。お互いに過剰に反応すべきでないとは分かっていても、無意識のうちに、「被災者」あるいは、「よそ者」というレッテルを貼ってしまうこともあるだろう。避難している方々も、勿論、好きで、被災したわけではない。何故このように扱われるのか？口には出さないが、すべての被災された方々が感じ、思うことだろう。一方では、お世話になっているという謙虚な気持ちから、一種の後ろめたさのような感覚も否めない。人間は適応性を持つ動物である。震災を機に、クローズアップされる日本人の奥ゆかしさや謙虚さ、更に、日本人気質や、美しい心、絆。いろいろな言葉で表現されているが、是非、このようなよき日本人として対処を心がけたいものだ。そして、避難先の新天地に溶け込み、新たな環境での生活をスタートしていただきたいし、それを受け入れる環境や配慮も必要だろう。このような意識のずれや、わだかまりは、いずれ、時が解決することを願いたい。

また、ボランティアは応々にして、自己満足であり、独りよがりになりがちである。相手に良かれと思ってやったことが、相手にとっては、仇になってしまっていることも少なくない。「自分本位」の考え方や価値観で対処すると、このような大きな間違いを犯してしまう。「相手の立場になって」考えることが基本にあるように思う。ビジネス界では、「マネジメントの父」呼ばれ、多くの経営者やビジネスマンが敬愛する、P.F.ドラッカー教授の言葉に、「自らがいかなる権限を持っているかが問題ではなく、自らがいかなる貢献をなし得るかが問題である」という言葉がある。これは、「ブライアン看護師の原則」に基づくもので、ブライアン看護師は、何かをやるか、やらないかと、判断が必要な場面で、常に、このように問うた。『それは患者さんにとって一番良い事でしょうか』と。そして、皆が患者の目線で、患者の価値観で物事が判断できるようになったという。まさに、被災者の目線で、被災者の価値観で、提供できるボランティアを考えなければならない。禅や仏教では、このように、相手の目線で考え、相手の価値観で考える思いやりの心を持って、貢献することを『利他』と表現する。ボランティアの目的は何だろうか？貢献とは何だろうか？ボランティアに参加される一人一人が、ご自身に問うていただきたい。

【2011/9/10[午前]】

今回は、日帰りで、福島県相馬市に出向く。距離的には、いわきから、寸断された常磐道を北上するルート(浜通り)が一番近いが、原発のある双葉郡を通過する部分は、原発事故以来、30μSV/h 以上の高い線量を示す地点もあり、通行止めの状態だ。このため、常磐道のいわき JCT から、磐越道に抜け、郡山 JCT から東北道経由(中通り)で福島に入る。福島駅で同行するメンバーと合流して、R115 で相馬市に入る。途中、飯舘村など、放射線量が高い地区も通過するが、R115 沿線は、2～3μSV/h 程度だが、福島、郡山よりは高い値だ。線量計を見ながら外気を遮断して、一気に通過するしかない。

午前中に訪問したのは、前回(8/27)に訪問した相馬市の保健センターで、前回と同様、「ちょっとここで一休みの会」に参加した。やはり、継続的なサポートが重要である。2 回目でもあり、スタッフや参加者とも面識があるので、いわゆる、関係構築は、ある程度できていると考えられる。より深いお話を伺うことができるかもしれない。ただ、事情聴取やインタビューではないので、『聴き出そうとしてはいけない。』産業カウンセラーの養成講座で実技指導を

していただいた指導者からのアドバイスが脳裏かすめた。例によって、肩もみ、マッサージで、リラックスしていただくだけでも目的は達成する。多くの望まず、焦ってはいけない。
　前回の活動終了後の、反省会で、参加者に名札を付けていただくことを提案した。その理由は、この会は、医療チームの延長線での活動であり、参加者毎に「個人カルテ」があり、過去の病暦や、家族構成などが分かる仕掛けがあるが、主催側のスタッフは、我々のようなボランティアであり、会毎に入れ替わるため、必ずしも、参加者の名前は愚か、これまでの経緯を知っているわけでない。このため、参加者にしてみれば、来る度に「自己紹介」するような場面もあり、「個人カルテ」がある意味が薄れる。とはいえ、カルテを手元においてお話しもできないだろうから、少なくともお話相手のお名前を知るだけでも、活動後の情報集約に役立つ。参加者同士も、名札があることにより、見ず知らずの状態より、親密感が湧くだろう。このような提案が採用され、今回は、受付時にお名前を記名すると共に、任意で、名札を付けていただく仕組みができていた。このように、一つ一つを改善しながら、手作りで会を作っている感じに好感が持てる。

◆相馬市 60 代女性
「ちょっとここで一休みの会」は、リピータの方が多い。今回の参加者は、前回(8/27)の約半分の 10 名、その内、殆どの方がリピータで、8/27 にお話しをさせていただいた、相馬市 60 代女性とは、奇しくも 2 週間ぶりにお会いすることができた。ただ、これまで、スタッフの方から、いつもいらっしゃっていると聞いていたので、また、再訪すれば、お会いできる確率は高いと期待はしていたが、先方にしてみれば、まさか、また来てくれるとは思っていなかった様子で、思いがけず、再会できたことに、少し興奮気味。
「本当に、よー来てくれました。」
と歓迎され、素直に嬉しい。今回は、多少強行スケジュールとは思いつつ参加してよかった。更に、前回、暑い珈琲がお好みであることを思い出し、
「お母さん、熱い珈琲でしたよね？」
と珈琲を入れて差し上げた。前回同様、いろいろな話題について話される。1 週間分の話をこの会に来て纏めて話されている感じだ。
「今度の首相は、ユーモアがあっていいね。」
「政治家には珍しい」
など、政治ネタにも明るいが、話題が、東電や、政府の批判に流れていくかと思いきや、マイナスイメージの話題に行かないように、意識されているようにも思えた。ちょっとした話題でも、笑いに結びつくようにお話になり、大声で笑われる。持ち前の明るい性格もあるだろうが、敢えて明るく振舞っていらっしゃるようにも思える。また、大家族だったとのことなので、狭い仮設住宅に移り、何かとストレスも溜まるのだろう。あまり大声で話せないでしょうし、大笑いもできないのだろうか、この会に参加して、存分に話し、笑っていってほしい。『笑うかどには福来り』である。
「サラダを食べようと、さっき、八百屋によったら、野菜にそれぞれの産地が書いてあってな。」
『北海道産』と『福島県産』が並んで同じ値段で売られているんよ。」
「何だろうね。『福島県産』が売れ残るだけなのにね。」
確かに、何処かのお役所の指導があるのかも知れないが、不可解で、ナンセンスな話だ。
「きゅうりは、『福島県産』しかなかったもんだで、買うしかあんめい。」
「使う前に、ちゃーんと湯がいて、酢漬けすると(放射能が)抜けるみたいだし。」

「サラダでなかったら、煮込んで煮汁をすてて、。。。」
「手間が掛かるんですよね」
「そーや、けど、病気になってからでは遅いでな。」
「ただ、安全ですって言われても、ゼロではないんだし、ちゃーんと数値を書いてほしいは。」
「そんで、選ぶのは、買う方だで、買う方が判断するわけだ。」
「ええとか、いかんとかだけじゃようわからん。」
「でもな、洗った水や、煮汁をを捨てるだろ。」
「水は、地べたに吸い込んで、また、野菜が出てくるで、結局、(放射脳は)なくならんのや。
「ひまわりが放射能を吸い取るとか言うもんだで、いっぱい飢えたがな。」
「でもな、最近それが、ぜーんぶ枯れちゃって、放射能いっぱい吸い込んだんやろか？」
「それで、枯れたひまわりを捨てるのに、どーやったらええか、役所に問い合わせたんや。」
「そしたら、そのまま捨てろ言とった。」
「前例がないし、そんなの知らんゆーて、拉致があかんかった。」
「そのまま、捨てたら焼却所で灰になって、また降ってくるんやろ。」
「ちゃーんと捨てないかん。役所ももっと、勉強しろって。」
「お母さん、勉強されてますよね、確かに、ひまわりはいいってこと聞きますが、どうやって捨てるんでしょうね。」

◆相馬市 20 代男性
常連様というか、毎回いらっしゃっている。前回はあまりお話するチャンスがなかったが、今回はお話しを聴いてみよう。震災以前から、時々、精神科医に相談されており、前回も医師と面談されている。今回も受付時には、「面談希望」となっていたが、今回は、スタッフの医療チームの中に、医師が含まれれいなかったので、面談はできず、雑談という形でお話を伺った。ずっと、求職活動をしているが、なかなか決まらない。やはり精神的な面が原因だろう。職がないまま、時間だけが過ぎ、焦っているが決まらない。この会に参加して、面談することで、心の安らぎを得ようとしているようにも思う。ただ、あの仕事は嫌とか、条件が悪いとか、許容レベルも高いような気がした。自己の意識改善や、求人環境をちゃん把握して考える必要もあるだろう。医師からもこのようにアドバイスされているようだが、なかなか、納得ができていないようだ。ただ、時間が経過すればするほど、焦るし、条件も悪くなる。暫定的な解を求め、先ずは何処かの職に就き、働きながらステップアップを図ることも必要かも知れない。今後も永い目で見守る必要があるだろう。

【2011/9/10[午後]】
　午後は、相馬市から約 100km 北上し、宮城県石巻市へ。Team Japan 300 のメンバーが訪問したことがある、渡波(わたのは)地区の避難所を訪問することとした。石巻は、ボランティアバスで何度か出向いているので、多少の土地勘はあるものの、自分の運転で訪れると景色が違う。カーナビ頼りで「石巻市立渡波小学校」に到着した。ここは、石巻湾の北端に位置し、渡波地区は、その地名が示すように、海岸線まで数 100m の区域だ。震災当日、津波の直撃を受け、約 2000 人が、近所の避難所として指定してある「石巻市立渡波小学校」に避難していた。その後、仮設住宅への移転が進み、今では、数世帯は、避難生活をされているだけになっている。体育館にも人は少なく、1教室を丸ごと使っている世帯もある。やはり高齢者が多く、マッサージなどのボディタッチで精神的な距離を縮めながらお話しを伺う。

校舎の 1 階部分がボランティアの事務局やら、集会所、ランドリーなどがあり、2、3 階の教室が世帯毎の避難所になっている。廊下には、古着のリサイクルだろうか、洋服を掛けた店舗用のハンガーが並んでいる。校庭には、テントが数張りあり、今は使われていない炊き出しの機材から、当時の様子をが伺い知れる。校庭を覆っていた瓦礫はほぼ片づけられており、残暑の太陽がジリジリと照りつける中、校庭の一角では、少年野球の金属バットの音と元気な声が響いていた。

◆相馬市 60 代/80 代女性
妹と娘は、同日、避難所内の集会所で開催していた化粧品の説明会に参加しているとのこと。留守番をしている 2 人に、手分けしてそれぞれ、アロママッサージとツボ押しをさせていただきながら、コミュニケーションを図る。避難した当時は、多くの人がおり、炊き出しなども大変だったが、ボランティアさんも多く、みんなでやっていたので、それほど大変ではなかった。最近は、みんな仮設に移って、ボランティアさんも減ってきた。人が減ったので炊き出しなどの当番制が上手く行かなくなって。最近は、お弁当になった。最初は、気が張っていたけど、最近、足腰が痛くなってきて、あの頃の疲れが、どーっと出てきた感じがする。もっとも、人が減って寂しくなるし、先行きが分からんので、焦ってくる。と言いながら、座布団を出し、お菓子を持ってきたり、お茶を出されたり、みかんをいただいたり。ボランティアが、もてなしをされるのも変な話だが、どうしてもというので、みかんをいただくことにした。2 代続けて、この小学校を卒業して、学生中はバレーをやっていたとのこと。
実は、私も、バレーボールをやっていたのだが、バレーだけでは踊りのバレーかバレーボールかわからない。だた、はずしても、笑いに繋げることもできると思い、
「私もバレーをやっていまして。。。」と振ってみた。すると、
「あれまぁ、！ポジションは？」と聞かれた。
これは、まちがいなく、バレーボールだ。
「あの頃、中学生でしたが、9 人性でした。」
「そうそう、あの頃、は 6 人とか、9 人とかあったねー、懐かしいわー」
「そうでしたね。で、セッター(アタッカーにトスを上げる役目)をやってました。」
「私もセッターだったわ！」
「じゃぁ、同じ世代ってことだね。」「…」「干支は。」
「『亥』ですが、」
「じゃぁ、わたしの方が 5 つ上だ。」「亥だったら、弟と同じだ。」
というように、話がどんどん進んで行く、そこへ、化粧品の説明会に参加していた 2 人が、試供品を持って帰ってきた。
「こんなサンプル(化粧品)は、きっと、3 日ももたない。」
「無くなったら買えっていうんだろ？いい商売だ。」
「買いに行くっていってもどこへ買いに行くのか？事情がわかってないねー。」
「この人らに肩揉んでもらってたんよ。」「あんたも、やってもらった？」
「じゃぁ、折角だからやってもらうかな。」
(中略)
こうやって、ずーっと話をしていたい。たわいも無い話で、気を紛らわしたい。特に外の人が来ると、いろいろ情報交換ができるし、話ができる。皆、話をされている時は生き生きと見える。話をして、情報を獲得したいのだろう。だた、あまり長居もできないので、後ろ髪を引かれる思いでお暇することとした。

◆相馬市 60 代女性/70 代男性
隣の教室では、御夫婦で生活されている。色々なものがあるが、綺麗に整頓されている。何度も、被災した家に通い瓦礫の中から生活必需品を持ってこられたのであろう。更に、新聞や雑誌が多い。要するに、避難所では、時間をもて余し、「暇」なのだろう。時間があるということは、悪いこと、苦しいことを考えがちである。少しでも気を紛らわせてほしい。人との触れ合いで心を和ませてもらいたい。そんな思いで同行のメンバーと手分けしてマッサージをさせていただいた。
　お母さんのマッサージをしていたメンバーが、「肩とか、背中が凝って動かない」と訴えられ、マッサージをしてもなかなか解れない様子。「如何ですか？」と聞いても、頑なに「まだ効いていない」というような素っ気無いお返事だった。そこで、「身体だけでなく、心もお疲れでしょう？」という言葉を聴いた瞬間、「そうなんでちゅ」と、赤ちゃん言葉になった。今まで、ずーっと我慢されていたんだ。フっと気持ちが軽くなって行く様子が伝わってきた。
一方、お父さんは、神経の関係で、左半分が動かし辛く、何とか歩ける程度。足腰を中心にマッサージをさせていただいた。しばらくすると、気持ちよさそうなイビキが聞こえてきた。少し手を緩め、心の中で、「ゆっくりお休みください。」とつぶやき、マッサージを続けた。
　お母さんの方も、ツボを押して欲しいというので、お父さんのマッサージを終了。そのとき、「今度、いつ来てくれる？」と聞かれたが、予定は決まっていない。嘘も言えないので、「また、来ますよ。」としか言えなかった。
　お母さんのツボ押しをさせていただいている間、何をたずねても、「はい。はい。」という返事。赤ちゃん帰りの延長線で、借りて来た猫のように、おとなしく、素直というか、身体を任せている感じ。時々、ツボに入るのだろう、瞼をギュッと閉じたり、緩めたり。一通り、ツボ押しが終わり、教室内にはお父さんのイビキが響いている。小声で、挨拶をしてそっとしてお暇した。

◆相馬市 60 代女性
広い教室で一人で留守番をされていた。教室の片隅で、生徒が使う学校の机と椅子の 1 組を使って、何か、書類を書いているところだった。小柄な女性とはいえ、子どもの机と椅子は、些か小さくアンバランスな感じで少し滑稽だ。どこか具合が悪いところありますか？と訪ねると、腰が重いとのこと。下半身をマッサージさせていただきながら、多少、講釈を交えながらツボ押しをさせていただいた。ツボの説明はできるものの、本当に、当たっているだろうか？一抹の不安はあるも、ツボに当たった時は、「あーっ」とため息が出て、気持ち良さそうにされる。ある意味わかりやすい。言葉が少ない。敢えて話題がない場合も、あの時どうでしたか？とか、ご家族は？などと問いかけてはいけない。事情がわからない状態での問いかけはタブーであり、危険でもある。しゃべる、しゃべらないは相手が決めること。
　無言でマッサージを続けた。校庭では、元気に遊ぶ野球少年の明るい声が響いている。ボランティア仲間の話では、隣の湊小学校では、校庭に瓦礫が流れ付き、大変な状況だったらしい。この校庭も、船や、車が流れ付き、瓦礫の山だったのだろう、あれから、半年、今や、野球ができるまで整理されていた。一方、午前中に訪問した相馬では、屋外で遊べないお子さんが、「一休みの会」にいらっしゃって、遊ぶことを楽しみにしている。被災地にもそれぞれの事情があり、顔がある、これらを汲み取っていかなければならない。さて、教室の中を眺めてみると、教室の後ろの壁には、ドラマのセットのように(セットではなく本物)、習字と

か、絵が貼ってあるまま、黒板の脇には、「時間割表」が掲示してある。小学校の教室って、何か、懐かしい風景だ。黒板の脇には、「3 月 11 日（金）日直〇〇さん」とチョークで書かれた文字が残っている。日直の〇〇さんは、今、どうしているのだろうか？。。。床には、ブルーシートが敷かれ、20 枚ほどの畳が並べてある、その上にテーブルと布団を置いて寝起きしている。既設のトイレ、水道などは、ガムテープで覆われ使用禁止。仮設の移動式トイレを使っているようだ。南側のベランダには、小さな名前のプレートが刺さった植木鉢から朝顔のツルが伸びるが、皆枯れている。あの震災がなければ、普通の何の変哲もない小学校だったのだろう。この教室で、夏休みが明け、真っ黒になった生徒が登校し、我先に、それぞれの夏の思い出を語る光景が思い浮かんだ。トースター、ラジカセ、湯沸かしポットなど、最低限の生活家電がある。比べるものではないが、お隣に比べ、広々と感じるのは、家財が少ないためだろうか。恐らく、当日は、着の身着のままで飛び出して、戻ってみたら、流されていたのだろか？最低限の必要な家財だけで生活しているように思える。

　ツボを押さえながら、効用などを説明すると、ご自分でもツボの位置を確かめながら、興味深く聞かれている。

「簡単ですから、是非、覚えてください。」

「ご自身でいつでも、手軽にできますから。」

「やって見ます、ありがとうございました。」

「お母さん、また来ますね。」

いつの間にか、すっかり、「ツボ押しのお兄さん」になっている自分に気が付いた。

第 3 章　生活支援ボランティア(リラクゼーション)

福島県の「いわき市復興支援ボランティアセンター」と「茨城県社会福祉協議会(以下、社協と略す)」との連携で「いわき市生活支援ボランティア」の募集があった。生活支援ボランティアとは、何だろう？兼ねてより、ボランティアバスツアーでお世話になってる地元の石塚観光のボランティア担当者に「リスニング」のボランティアに興味があると伝えてあったことから、石塚観光からのいわき市の募集について、紹介をいただいた。一方、これまでにも、Team Japan 300 としても、メンバーが同市に何度か訪れた経緯もあるようだが、平日の活動が主体であり、時間的にも条件が合わず継続的に訪問できていなかったようだ。そこで、いわき市、社協、地元のボランティアなどとの係わり合いの中で、独自のチャネルを開拓したり模索しながらの活動となったので、便宜的に前章の Team Japan 300 での活動と区別して説明するが、活動内容が変わるわけではない。活動内容としては、

・応急仮設住宅などでの傾聴
・話し相手，子供たちの遊び相手
・お祭り等地域行事の開催支援
・その他交流事業等

となっており、活動日程については、原則的に、週末を除く平日であるが、9 月は、祝日も活動するとのことで、参加できる可能性が出てきた。ところが、申し込みは 2 人以上のグループであるが、ちょうど農繁期に入るので、参加できるメンバー探す必要がある。そこで、これまでの、泥カキ、リスニングなどの多様なボランティアの経験もあり、恐らくほとんどの活動に対処できるだろうとの判断で、ボランティアバスで知り合った、O さんを誘って申し込んだ。9/19 終日、日帰りの日程である。O さんとは、7 月に出向いたボランティアで知り合い、その後、何度かお話をしている。いわき市は、福島県の南端に位置し、茨城県のお隣。いわき市には「スパリゾート　ハワイアンズ」というリゾート施設もあり何度か訪れたこともあり、個人的にも身近に感ずる。宮城地区に比べれば、近場でもあり、日程が許せば通える範囲だ。是非、地元の社協やボランティアセンターともチャネルを構築しておきたい。

避難所、仮設住宅での生活はどんなものなのだろうか、想像してみて欲しい。恐らく、狭い、暗いなどの物理的ストレスだけでなく、不安、怒り、不満、虚無感、絶望感に加え、眠れないなどの心理的、生理的なストレスも加わり、多重化した高ストレスに曝され、やがて鬱状態に陥ることが多い。そして、精神面だけでなく、肉体面にも影響を及ぼす。硬い床、プライバシーのない生活環境、これらをストレスとして溜めない、少なくとも拡大しないようにしたい。孤独を避けること、ストレスを軽減すること。そして、これらのアクションも人から進められるより、自ら行動として行動できるように、積極的なマインドに変えて行くことも重要だろう。震災があったこと、そして、被災していること、これらを、まぎれもない事実として受け止め、開き直るようなことも必要かもしれない。現実として受け止め、自己の置かれた環境を理解し消化する。経験していない者が口で言うのは簡単である。そして、被災者に何も提供することはできない。気持ちが先走り、焦りも感じるがどうすることもできない。少なくとも、被災者の微妙な心境や葛藤を理解して対処すべきである。

前章の「心のケア」でも触れたように、傾聴することで、心を癒し、ストレスを低減する事になる。ただ、いきなり、じゃぁ、話しましょうといっても、話せるものではない。そこで、ボディタッチやリラクゼーションから、アプローチするが、このリラクゼーションは、物理的な物というより、精神的な影響が大きい。そこで、リラクゼーションをするための手法として、禅、ヨーガ、

ツボ押しなどを用いるが、これらのの精神的な面について触れておこう。禅、仏教、ヨーガの世界では、よく「無」とか「悟の境地」と言う。また、仏典などでは、悟りの境地なれば、ストレスフリーになれる。かのように説く。とはいえ、短時間で、ストレスフリーな状態を手に入れることができるわけではない。坐禅の修行で、曹洞宗の大本山である永平寺に出かけた際、住職から説明があった。『「悟」は寺から持ち帰るものではないし、この参禅に参加して、何かを得ようと思ってはいけません。」むしろ、ここへ「荷物」をおいて帰ってください。』この「荷物」のことを仏教では、煩悩と呼ぶらしい。除夜の鐘で一年間に溜めてしまった 108 つの煩悩を捨てて、新しい年を迎える。現代的に表現するとリセット、再起動である。

ストレスは、そもそも感じなければいいのだが、今回のような大災害ではそうはいかないだろう。では、溜まったストレスをどうやって軽減しようか。まず、ストレスが溜まっている「自分」を自覚する。そして、どんな種類のストレスかを考えてみる。勿論、この作業で頭がスッキリするものでもないし、余計に混乱してしまうかもしれない。自己を見つめる、これは、禅にも通ずるが、心理学でいうところの、「内観療法」の考え方でもあり、自己を見つめ、自分のストレス状態を客観的にみて、取り崩す切り口を見つける過程なのだ。

ストレスを与えている物(ストレッサー)が何であるかを知ることで、新たなストレスを受けることを回避することができる。つまり、ストレスの「元栓」の一つを締めるわけだ。元栓を締めて入ってこないようにして、溜まったストレスを軽減する。これがストレス対策の秘訣だ。そこで、自己を見つめる、自己を客観視する。これがスタートライン。その練習が実は、ヨーガであり、坐禅なのである。

ヨーガや坐禅では呼吸を重視し、腹式呼吸を多用する。腹式呼吸は、「吸う」ことでなく、「吐く」ことである。「吸う」ことを意識すると、どうしても、肺を使って鼻から息をしがちである。腹式呼吸は、その名のごとく、腹を意識した呼吸であるが、実際に、腹に空気を取り込むわけではないので、難しい。そこで、腹式呼吸の練習では、「吸う」のではなく、「吐く」ことを練習する。つまり、「吐く」ことを意識して、できるだけ肺を空っぽになるよう、限界まで吐く。ちょうど、健康診断の肺活量の検査の要領だ。全部吐き切った後は、自然に空気を吸うことになる。縮んだスポンジが膨らもうとした時、水を吸うことをイメージしてもらいたい。また、空気を吸う際、腹にある風船に、空気を送り込む感じをイメージする。これで、腹式呼吸ができているはずだ。腹式呼吸は、免疫力を高めるなど、体にいいことずくめだ。この際、覚えておいて損はないだろう。ヨーガ、禅では、この腹式呼吸をするために、「自分の息を観なさい。」と指導される。実際に、視覚的に見ることはできないので、「意識しなさい」ということ。ゆっくり、ゆったりと息をしながら、今吸っている、今吐いている、1 回、2 回、3 回、、、というように。すると、不思議を心が落ち着いてくる。是非、試してもらいたい。

また、自律神経失調症などの治療として、「自律訓練法」という手法がある。これは、面談者に一種の自己暗示をかけるようなもので、ストレス解消、疲労回復、能力開発などの目的で実施される。

自律訓練法

第 1step	手足が重い
第 2step	手足が暖かい
第 3step	心臓が静かに打っている
第 4step	呼吸が楽になっている
第 5step	腹部が暖かい
第 6step	額が涼しい

目を閉じてリラックスした状態で、次のように、暗示をかけながら、四肢、脈拍、呼吸、腹部、額に意識を集中させる。これが、先の「自分の息を観る」というプロセスに極似しており、通じるものである。余談ではあるが、「息」という文字は、「心」の上に「自」と書く、中国四千年の歴史の中で作られた漢字の文化では、自分と心の関係に気づき、理解されていたのであろう。

さて、考えてみれば、息をするのは、無意識にできているではないか。また心臓も、意識して動かしているわけではない。体の状況を勝手に判断して、速くなったり、遅くなったり自動的に制御されている。そして、止まることなく動いている。不思議であるのと同時に、人体の不思議に感動をも覚える。息も、心臓も、我々が意識して動かしているのではない。何者かにコントロールされ、我々は、その何者かに、身をゆだね、任せているわけだ。この「任せている」ということに気が付いた時、す一っと、力が抜けるのを感じることができるだろうか。そして、何者かの手の上で、ゆったりと、息をして心臓が動いている。自然の中の自分を意識して、綺麗な空気をいっぱいに吸って。これが、リラックスした状態なのだろう。こんなことを頭に思い描いている瞬間は、ストレスが減り、欲望が減り、素の自分を感じることができているではないか。このような練習を習慣化する。つまり、ヨーガや坐禅は腹式呼吸法をマスターするための手段とも思えてくる。どうだろう、もう、すっかり、リラックスできているのではないだろうか。

リラックスの後、現実に戻る瞬間がある。その時に感じるのは、自分の小ささ、ちっぽけさ。いままで、何故、こんなことでくよくよしていなたのだろう。もっと、大きく、ゆったり考えれば、大したことではなかったではないか。些細なことではないか。というように思えてくる。これまで、内側に向いていた気持ちを外から客観的に見ることにより、違った価値観が芽生えてくる。そして、一つ、二つと、ストレスが消えていく、完全に消えはしないかもしれないが薄くなってゆく。ストレスを解消するとは、このようなことなのだ。スポーツやお酒を飲んで、ストレスを解消すると言われるが、それは一時的なことが多い。楽しい時間が過ぎれば、また暗くブルーな時間が訪れる。ちょうど、夏休みが終わる 8/31 に感じるブルーな感じだ。楽しいことが大きければ、大きいほど、その後の落ち込みも大きい事がある。これは、目先の快楽で、一喜一憂しているだけであり、根本的な解決にはなっていない。ストレスを軽減するためには、価値観が変わるような体験が必要なのである。ストレスも「元から断たなきゃダメ」なのである。

ヨーガも禅も呼吸が大切、しかしながら、型とか、修行とか少し敷居が高いかもしれない。そこで、お勧めなのが、「ツボ」である。ツボ押しの効果は？と考える前に、そもそも、ツボとは何だろうか？ツボは、神経の交差点と言われる、交差点の渋滞が解消されれば、すべての道路はスムースに流れるようになる。この「要」なる部分(ツボ)を刺激することで、リンパや血液などの循環系が改善される。つまり、医学的、生理学的にも実証されているのである。身体には、数千個のツボがあると言われているが、実際に知っておくべきツボは、10 個くらいだろう。腰痛、肩こりなどの一般的な症状や、生理痛、頭痛、疲れ目など、日常生活に支障をきたすような症状を即座に緩和する効果がある、投薬もせず、リハビリ的な苦痛も少ない。知っていて損はしない生活の知恵である。また、肩もみやストレッチ、マッサージなども単に施すより、ツボを知っていると効果的。多少の講釈を交えた方が説得力も増すだろう。ただ、ツボ押し教室が目的ではない。身体を解すとともに、心を開いていただく。また、ボディタッチすることで、安心感や親密感が芽生え、心の距離を縮めることで、信頼関係を築く手掛かりにもなる。

禅の話にもう少し触れておこう。禅では、先にお話ししたように、「無」とか「悟」が究極の目指すべき姿と言われている。その境地に行きつくためのプロセスとして、読教、坐禅などの修行がある。ただ、不思議なことに、「無」とか「悟」に達したというのは、試験があったり、評価があったりするものでなく、自己申告なのである。自分で、自分自身が、悟の境地に達しているか否か。その判断は非常に難しいのではなかろうか？先ず、自分自身を見るという「客観視」ができていることが前提であろう。よく、「己を知る。」というが、これは、客観視するということである。客観視とは、その文字の如く、自分を他人の視点で見る。つまり、「〇〇している自分が見えます。」って感じだ。少しおかしな感覚だが、もう一人の自分が、自分の頭上から、自分の言動を見ていると思ってほしい。「今、息をしたとか。」「〇〇さんとしゃべっている」といような、物理的な事象だけでなく、「今、頭にきている」とか、「悲しい」という感情も客観視してみよう。客観的に見ることで、何か、他人事に聞こえてくるではないか。本当は悲しいはずなのに、「悲しいと思っている自分がいます。」と考える。悲しいはずの悲しさが何処か他のところに行ってしまい、結果的に、悲しさがやわらげられていることに気が付いたらしめたもの。つまり、客観視することで、感情がおさえられ、ストレスが軽減できるのだ。この術を覚えると、ストレスが溜まらなくなるし、溜まったストレスも増大しない。実は、客観視は僧侶になる練習で、修行中の僧侶が行う修行の一部なのだ。

さて、傾聴とストレスということを漠然と考えていたら、突然、「エントロピー増大の法則」という物理法則を思い出した。何故、このような物理学の話になるのか。ここでは、物理学の法則の話をするつもりはない。エントロピー増大の法則とは、すべての事物は、『それを自然のままにほっておくと、そのエントロピーは常に増大し続け、外から故意に仕事を加えてやらない限り、そのエントロピーを減らことはできない』という法則である。エントロピーの低い状態を一言で「秩序ある状態」、エントロピーの高い状態を「無秩序な状態」と表現することもでき、「秩序ある状態(整頓された状態＝安定)」は、放っておくと「無秩序な状態(煩雑な状態=不安定)」になる。ということである。 つまり、「複雑さや煩雑さは、拡大する方向に遷移する」というものだ。たとえば、引き出しの中が煩雑であったため、整理したとしよう。引き出しの中は綺麗に整理されて整頓された。このため、複雑さが低減したように思える。しかしながら、整理するということは、たとえば、「頻繁に使う物は手前に置く」など、物の位置関係との意味づけ(ルール)をした事である。そして、この意味づけは、頭の中で行っており、頭の中の記憶回路がより複雑になったわけだ。表向きは、整理ができて、複雑さが低減したように見えるが、実は頭の中の複雑さは増大しているのだ。このように、全世界的に考えると複雑さは、常に増大する方向に働く。という考え方である。

前置きが長くなったが、人の気持ちや感情も、この物理法則と同様、複雑さが増大する方向に遷移しているのではなかろうか。たとえば、ボランティアでお話を聴く、一次的に話者の頭の中はスッキリしてストレスが軽減するかもしれない。しかしながら、同時に、話を聞いたボランティアの頭の中には、少なからず、話の内容が残留したり、場合によっては、考え込んでしまったり。結局、複雑さが増えたことになる。一方で、話者も話をすることで、記憶がなくなることもなく、話を聞いてもらった人に情報が移動するわけでもない。更に新しい葛藤が芽生えるかも知れない。結局は、ストレスが軽減できていないかも知れない。話を聴いたボランティア自身が、ストレスに感じ、また、他の人に相談して波及していく。この繰り返しで、複雑さは軽減されるどころか常に増大するのではなかろうか。このように、ストレスは、増大するものだとすれば、現地のストレスを低減するためには、拡散させて薄めるしかない。つまり、被災された方々だけが背負うものではなく、日本国民、人類としてこのストレスの一部を背負って行くことで、現地のストレスを軽減するのではないだろうか。

このために、「傾聴」というアプローチがあるが、「傾聴」とは何だろう？結局、我々は、表面的には、整然とし、波一つなかった湖に敢えて石を投げ入れ、波紋を誘うようなことを行なっているのではなかろうか？要するに、「要らぬお節介」ではなかろうか？とはいえ、私自身の経験から、辛い時、悲しい時、人に話しを聴いてもらったり、思いっきり泣いたり、その後とは嘘のようにすっきりする。その結果、何処かで局所的に複雑さが増えていたとしても、他の多くの人に伝播し波及することで、広く、薄まり平準化するのではなかろうか。被災地が抱えた複雑さは、日本が抱えた複雑さであり、日本国民が分担して背負うべきものなのかも知れない。そう考えると、まさに「国難」という意味が分ってくるような気がする。多くの人で、分担して背負うことで、一人ひとりの負担は減るではないか。今後も、傾聴、リスニングが、このような負担減らしの一助となっていると信じて、被災地に出向く所存である。

【2011/9/19】

当日、水戸の社協の駐車場に集合、交差点を左折して、目的地まで、あと数 10m のところで携帯電話が鳴った。ジャストタイミング、社協の担当者からの電話で、駐車場の詳細な案内をいただき、無事、集合場所に到着。受付をして待つこと数分、到着したワゴン車に乗り、隣接する那珂市まで移動して他の参加者を Pickup し、都合 8 名で目的地である、いわき市まで移動した。ワゴン車は、おなじみの石塚観光さんで、奇しくも、前日(9/17-18)東松島でのボランティアでお世話になった運転手さんその人だった。石塚観光さんは、いろいろな形でボランティアに携わっているようだ。というか、観光業界の中でも、石塚観光の位置づけがかわりつつある。GW 頃から、行政、自治体とは違うチャネルで独自のボランティア活動を展開し、多くのボランティアを宮城県などの被災地に送り込み、同時に実績を積み上げている。これが、行政、自治体、社協そして現地認められ、伝わっているのだろう。また、この実績の裏には、機動力と小回りが効く活動があるのだろう。ボランティアツアーといえば、石塚観光と、今や代名詞のように思われている。そんな関係で、今回も、石塚観光のワゴン車なのだろう。

さて、現地に着き、社協関連のスタッフに、「Team Japan 300」の名刺を出してご挨拶すると、「Team Japan 300」の名前を覚えていてくださったスタッフもおり、活動内容などを説明した。考えてみれば、ボランティアのご縁も不思議なもので、石塚観光さんとの出会いや、各地の社協のみなさんとの繋がり、そして、今、この時間、Team Japan 300 の T シャツを着て、「今、ここ」にいることが不思議に思えてくる。カウンセリングの世界では、「今、ここ」という言葉を良く使う。これは、傾聴の理論を体系化した臨床心理学者であるカール・ロジャースが提唱した「来談者中心療法」の傾聴の心構えを言い表した言葉であり、共感的理解を言い表したことばである。今、目の前でおきていることを素直に感じ、その気持を大切にする。茶道の言葉を借りれば、「一期一会」と言う「おもてなし」の言葉に通じるものである。今日もどんな出会いがあるだろうか。

福島県の最南端に位置する、いわき市は、原発から、40km 離れているとはいえ、0.5μSV/h の数値が示すよう、通常の線量よりは格段に高い。数値的にも距離的にも、ちょうど、相馬郡と同じような感じなのだろう。ただ、沿岸部では、津波被害に遭った地域もあり、放射能による農作物や魚介類などへの影響もあり、風評被害も受けているだろう。地震、津波、放射能の 3 重苦に風評被害。総合的に被害を受けている地域である。地理的に太平洋に突き出しており、小名浜などのリゾート地でもあり、美しい海岸線を持つ。反面、海に近いので、津波の直撃を受けた地域である。今回の活動場所は、海岸に近い集合住宅で、施設内にある集会所で行われる「マジックショー」のお手伝いだった。、マジックショーなどのイ

ベントで被災地を訪問するケースも多いが、これまでは、避難所での実施となると、体育館などの大広間で実演する場合もあったが、今回のように集会所での開催は、意味合いが違う。大広間でイベントを開催する場合、ゆっくり眠りたい人もいらっしゃる、見たくない人にとっては、苦痛以外の何物でもない。いわゆる、「押しかけボランティア」である。被災者の気持ちを少しでも考えることができれば、このようなことにはならないだろう。集会所で実施する場合は、一応、参加意志があるという前提で実施ができる。

　マジックショーの準備をしている時間で、集合住宅を個別訪問して、お誘いた。意外に、お子さんがいらっしゃるお宅が多い、ひっそりとした佇まいだったが、結構、集まるかも知れない。開始前の僅かな時間ではあったが、4 歳か 5 歳くらいだろうか、可愛い盛りの年頃である。小さな女の子と一緒に遊んでいると、数名集まってきて、気がつくと囲まれていた。こんな経験、いままでなかった。こんな小さいこどもと無邪気に遊んでいる自分なんて想像したこともなかった。そこには、凄く素直になった自分がおり、新たな一面を発見したような気がした。結局、子供 35 人、大人 15 人の方に参加していただいた。短い時間であったが、鮮やかなマジックショーを見て、楽しんでいただけたようだ。帰り際、車の窓越しに、瞳を潤ませて、「また来てね」と訴える少女に、一同、悩殺され、後ろ髪を引かれながら現場を後にした。あの、訴えるような瞳と屈託のない笑顔、当分忘れられない。まさに、一期一会、この出会いを大切にしよう。

【2011/10/29】
「ピッピッピッピッ、ピッピッピッピッ……」
10/25、会社帰りに駅で降りたら携帯電話が鳴り、Team Japan 300 の事務局からだ。
「Team Japan 300 の事務局ですが、今週末、大丈夫ですか？」
「また、相馬ですか？」
「はい。」
「29 日ですか？歯医者の予約があったかも？」
「ただ、キャンセルして相馬にいきます。」
「了解しました。お願いします。」
　例によって、直前の連絡だが、マッチングの大変さを考えれば、致し方ない。一応、OK 返事をして詳細な連絡を待つ。今回は、どんなメンバーだろう。行き先は、恐らく、8/27、9/10 にお邪魔した、「ちょっとここで一休みの会」だろう。その後も、Team Japan 300 のメンバーが交代で訪問し、継続的に御邪魔しているらしい。個人的には、今回で 3 回目の参加。勝手知ったる。。。ですが、初心忘れるべからず。今回から、「足湯」が追加になる。お湯の温度、量などは、思考錯誤であるが経験でもある。今後の為に常に勉強というスタンスで臨もう。メンバーの調整が難航している。別途、知人を誘ったが、急な話で難しいようだ。結局、今回は一人で出向くことになりそうだ。その場合、「ちょっとここで一休みの会」の後、どうしようか。そこで、これまでに、おせわになっている現地のボランティアである、「サポートチーム G」に連絡し、10/30 は、そちらに合流させてもらうことにした。10/29 の午前中は、「ちょっとここで一休みの会」に出向き、午後は、東松島の野蒜まで移動。拠点である、お馴染みの野蒜小学校の教室で宿泊し、10/30 の活動に参加させていただく作戦だ。小学校は、電気は OK、水は、トイレ、洗顔などはできるが、飲むことはできない。食事は、コンビニ、お風呂もないので、近隣に銭湯に出かける。一般のボラバスに比べれば、サバイバル感はあるが、観光に来ているのではない。また、ボーイスカウト魂でサバイバルな生活には慣れており、雨風が凌げるだけで十分だ。出発前日、「サポートチーム G」とのアポをとりながら、心の準

備を含め、いろいろな準備をしていると、Team Japan 300 の事務局から連絡があり、今回は、キャンセルとのこと。いわゆる、「ドタキャン」だ。無理を言ってもしょうがない。では、10/29 の朝から「サポートチーム G」に合流することにしよう。

出発動当日、いつものように、常磐道から磐越自動車道に抜け、東北道を目指す。途中、阿武隈高原 SA で休憩し、いつものように、線量計で定点測定をする(0.23μSV/h)。数値事態、天候に左右されるものなので、一概に言えないが、6 月頃(0.9μSV/h)から比べると、かなり下がってきているような気がする。AM 6:00、そろそろ、石塚観光さんのバスが到着するはずだ。今日の添乗員さんはどなただろう。先ずは、挨拶に。バスツアーの場合、常磐道の那珂 IC を出発してから、約 1 時間半で、ここ阿武隈高原 SA に到着する。ここで、トイレ休憩をとる予定だ。SA に先回りしてい旨、石塚観光さんにもお伝えしてある。こんな手の込んだことをせずに、素直に、日帰りツアーに申し込んで参加すればよかったのかも知れないが、ボランティアバスツアーの場合は、大人数での参加になるので、受け入れ先である、サポートチーム G でも清掃作業や、除草作業など、人海戦術系の作業をアサインせざるを得ない。なので、心のケア系のニーズに対応できていない。今後、Team Japan 300 と連携できるかということが焦点になるだろう しばらくすると、見慣れた水戸ナンバーのバスが SA に入ってきた。添乗員さん、乗車しているメンバーにご挨拶。奇しくも、バスと一緒に東松島(野蒜)を目指す。

先ずは、拠点であるの入る野蒜小学校に出向いた。校舎脇では、ヒマワリが元気に咲いていた。サポートチーム G の事務所へ行き、今日の活動は、明日(10/30)開催される「野蒜復興祭」の準備作業。午前中は、他のボランティア団体と混成チームで模擬店のテントを設営や来場客の椅子を並べたりの準備作業。作業途中、9/18 の仙石線沿線の除草作業[第 1 章]の時、当時のお話しと体験談を話してくださった、S さんと再会することができた。これまでのボランティ活動で経験し「再会」の一つである。S さんも準備作業を手伝っていらっしゃる。休憩時間など、お話しをしながら、ご近所さんの肩もみをさせていただいた。復興祭では、北海道の千歳にある宮城県人会から贈られたジャガイモを 1kg つづ袋詰めし、粗品として配るらしい。また、株式会社 ニトリから届いた、トラック 2 台分の「布団セット」(600 組)をバケツリレーで教室に運んだ。株式会社 丸井グループも店舗でお客様から集めた新品の衣料療品を持ち込んで、無料で配るらしい。

昼食で教室に戻った時、初めて他の参加メンバーに紹介された。サポートチーム G は、神奈川県大和市をベースとする団体なので、今回は、横浜方面からマイクロバスで 8 名のブランティアが参加している。午後は、前回と同じ共同墓地での活動だが、作業は、7 月以来の懐かしい側溝掃除。作業を開始すると、次第にメンバーの気心も分かり、15 分も経てば、お互いの「キャラ」を認識できる。ボランティア活動の面白いところだ。作業終了後、マイクロバスで矢本駅まで出かけ、お風呂と食材の買出しをした。石巻⇔矢本間は、既に仙石線が動いており、震災の影も薄く活気がある。矢本駅前のスポーツジムのバスとサウナでリフレッシュ。更に、付近の大型ショッピングマートで食材を調達。野蒜に帰ると、小学校以外、灯りが点いておらず、真っ暗である。「サポーチチーム G」宛に、野蒜地区の皆様から、「蟹」をいただいた。こういった、地域との繋がりも、サポートチーム G が進める「地域密着型」ボランティアの実績を物語るのだろう。調達した野菜などを加え、「蟹鍋」を囲んだ。食後、サポートチーム G の世話人である K.S さんもいらっしゃた。K.S さんご自身も家が流され、家族を亡くされている。当時のいろいろな話を伺いことができた。

震災当時、野蒜小学校は、「緊急避難場所」に指定されていた。最初の揺れの後、地域の皆さんが、自家用車で出かけたれた。ところが、小学校に入る道路にある踏み切りが開

かず、運河通りは大渋滞となり、進退極まりない状態の時、最初の波がきた。多くの方々が、車の中でどうすることもできず、大自然がなすまま瓦礫と一緒に流され、濁流に飲まれた。徒歩で学校に向かった人は、高台に上がったり、体育館や校舎の手すりに掴まって助かった人もいた。瓦礫に掴まって流されたが奇跡的に助かったり人もいたが、車に乗っていた人は、皆さん亡くなられた。とっさの判断と言われるが、考えている暇はない。全て偶然の結果で、運不運と思うしかない。

津波で、何がどこまで流されたとか、数限りない逸話がある。大きな墓石が川を遡って、数 km 上流で見つかったとか。金庫は見つかったが、書類は識別出きなかったとか。屋根、車、船など全ての物が、津波の前では、皆同じになるのだろう。更に、人間、家族、ペット、家財、財産、そして命をも含め人間の価値観を根こそぎ無視するかの如く、襲いかかった。全てを奪い、絶望と虚無感を置いて行った。あの時、目の前で起こったことは、脳裏に刻み込まれ決して忘れない。震災後のいろいろな情報をすべてクリアファイルで整理してアルバムのように補完されている。その中に、ご家族の葬儀の際、K.S さんご自身が読まれた挨拶文があり拝見した。

尚、K.S さんは、ご自身の体験などを公開することで、多くの方にここで起った「事実」知ってもらいたいというお気持ちから、津波体験など貴重な情報を積極的にメディア公開されており、この挨拶文についても、原文の引用させていただく許可をいただいている。

本日、第二回合同葬を迎えるに当り、お礼の言葉をもうし上げます。

思い起こしますと、3/11、あのいまわしい津波にあい、皆様もはじめ、私自身も「九死に一生を得た」思いであります。今、現在、ここにおられるたくさんの人々の津波体験談を聞くつけ、それぞれのご先祖様の御霊に守られ、生かされて居る気がします。

津波にあった直後、第 2 波の危険を恐れず、私を助けてくれた哲也さんと奥様、ガソリン確保、お世話になった妻の実家、不明者さがしのヒッチハイクで気軽に車に乗せて行先案内いただいた方々、火葬場さがし、県外ボランティアスタッフの気配り、長男夫婦の部屋やから見た仙台の夜景のすばらしさ、新幹線が目の前を通り仙台駅から SS30 が見えるあの光景。。。「人間は一人では生きられない」思いを強く感じております。二度と妻を見ることの出来ない悔しさ、病気ではなく、涙の多さで人間は咽喉が渇くという実感。10kg 程身軽になったからだで、「もう少しだけ頑張りなさい。」と、天国から母と妻が応援してくれ、まさに自分の人生の中で「濃縮された日々」を過ごした気がします。

また、放射脳汚染という、これまでに体験した事のない恐ろしい実態が、今まさに拡大しております。孫子の代まで続くであろう、放射能の恐ろしさは、これから続くであろう多くの困難に如何に立ち向かうべきか？「人間の智恵」が試される。人類地球環境にとっても大切な時間が続くと思われます。

どうか皆さん暮らしの場所は、それぞれバラバラになっても、こうして生きている「有難さ」を忘れることなく、本当の意味での「絆」を持ち続け、決して悔いのない暮らしにするため、一生懸命生きましょう。

棺桶に足を入れる時、今は天国で風となって見守ってくれている母(ちい子)と妻(恒子)、2人に「生きていて良かった、ありがとう」の報告ができるよう、日々感謝の気持を忘れず暮らすことを誓い、お礼とお別れの言葉とします。本日は、まことにありがとうございました。

合掌。

平成 23 年 6 月 26 日　S 家代表 K

挨拶文を拝読する傍らで、K.S さんのアルバムを広げ、震災前の様子やら、子供の頃のお話やらを伺うことができた。宮戸島は、自然の宝庫。子供の頃は、野山を走り回り、偶然、松茸をみつけることもあった。最近、野山を散策して花の写真に撮って、ベランダでも鉢植えを楽しんでいる。最近は、一人で考えていると、いてもたってもいられないので、山に出かけるなど、何か動くことで、気を紛らわしている。

お酒も入ってか、K.S さんは、生き生きと話され、いろいろなお話が止めどなく出てくる。お話は尽きないが、明日の活動に差し控えるので、就寝することにした。小学校の教室には、畳が敷いてあり、マットレスと毛布があるので、寝泊りには支障はない。一旦は、毛布を被り寝ようよしたが、先程の挨拶文を思い出し、なかなか寝付けない。挨拶分の中にあった「涙の多さで人間は咽喉が渇く」、「悔しい」という言葉は、20 数年前、私自身が実娘を死産で亡くした時、まさに、込み上げてくる「悔しさ」から「涙枯れるまで鳴いた」経験を呼び起こし、程度の差はあるにしろ、第一人称で共感し、目頭が熱くなった。また、震災や戦争などの究極的な環境下で生き残った方々の言葉の中に、「生かされている」と言う言葉をよく耳にする。このような体験をされた方々だけでなく、平穏無事に生きている我々も実は、「生かされている」のではなかろうか。

【2011/10/30】

今日は、「野蒜復興祭」当日だ。6:00 に起きて、先ずは、教室、廊下の掃除。早起きして、海岸を散歩したメンバーによると、海岸では、サーファーが瓦礫掃除をしており、波乗り前のルールらしい。

昨夜の蟹鍋を雑炊にした(豪華な?)朝食だ。食事の際、本日の作業についての説明があった。本日は、昨日の延長線で、「野蒜復興祭」のスタッフ。メンバーの内、4 人の女性チームが、トイレ誘導と、ゴミ関連。残る 5 人の男性チームは、駐車場の誘導などを担当した。蛍光ラインの入った「安全ベスト」と「合図灯」を持つとそれなりに、「誘導係」に見えるから面白い。いくつかある駐車場の内、学校脇の真っ先に満車になりそうな駐車場を担当した。ここは、本来、駐車場でなく、単なる「空き地」たっだ。このため、未整地の更地で、敷地も矩形ではない。草だらけで境界線も枠線ない。更に、ところどころ、泥濘で瓦礫や切株が残っており、電線も垂れている。どこに、どのように、車を並べようと、私の思うままだ。白いキャンパスに自由に絵を描くというと、聞こえはいいが、結構難しい。一旦、停めてから、近いところがいいと言い出す人も。80%以上の人が、直ぐ帰るとか、足が悪いとかの理由をつけて手前に止めたがるが、基本的に誘導に従っていただけるし、「ご苦労さま」とお声掛けもいただける関係で、概ね「お行儀」がよい。ただ、気も遣うし、車を追っかけたりで体力も使う。結局、車を閉じ込めないように通路を確保しながら、4～50 台は駐車できただろうか。誘導係なんて、生まれて初めての経験だったが、日頃、街中で見慣れた誘導係のパフォーマンスを真似て、運転席からドライバーの立場で見たら、どう感じどう見えるかを意識して誘導したり、お声かけをさせていただいた。他のボランティア仲間から、「慣れてますね～」と言われた。ほぼ、満車になってきた頃、校庭は、模擬店の開店前で慌しくなってきた。電気はあるが、飲料水が出ないので、飲食物の模擬店で、ポリタンクで水を持ち込む必要がある。大変なのだろう。会場脇に車を横付けしたいと、「泣き」が入り、誘導係という立場上、渋滞緩和のため、手伝わざるを得ないだろう。

「野蒜復興祭」では、避難所、仮設住宅でバラバラになったご近所さんが、7 ヶ月ぶりに集まるイベントで、楽しみにしていたのだろう。おまけに衣料品や日用品を無料で配られるの

で、かなりの人出だろう。(推定、2～3,000 人)昨日搬入した「布団セット」を配っていたスタッフに聞くと、混乱はなく、取り合いにもならず、こちらでも「お行儀」が良かったようだ。式典や出し物が始まったが、さすがに「誘導係」の格好でウロウロできない。昼食時が過ぎる頃、今度は、帰宅ラッシュ。配布した物資や支給品もあり、皆さん大きな袋を提げて帰られる。大きな荷物があるので、車を近くに回して積荷したい。皆さん、考えることが同じ、これが渋滞を作る。しかし、ここ野蒜は、渋滞とは無関係の土地だったのだろう。そして、もしかしたら、野蒜の人たちは、渋滞なんで経験したことがないのかもしれない。皆さんが顔見知りで、道行く車と歩行者が、手を振って会話するような、のんびりした光景がいたるところにあり、アットホームというか、町中が家族というようなフレンドリーな地区だったのだろう。また、野蒜地区をはじめ、石巻、東松島には、これまでに相当数のボランティアが入っているだろう、住民の方々にも気軽に、「ご苦労様です。」とお声掛けをいただき、東北の人柄も関係するのであろうが、ある意味、「ボランティア馴れ」しているようにも感じた。ただ、皆さん楽しみにしていたのだろう、些細なことではカリカリせず、皆で復興祭を楽しんでいらっしゃるようにも思えた。今回、お手伝いしているメンバーも、それぞれに、ボランティアをやっていて良かったと思ったことだろう。こう思うのは、ボランティアだけかも知れないが、たまには、自己満足もいいではないか。

「野蒜復興祭」は、14:00 までだが、帰路の渋滞を想定して 13:30 に作業終了。横浜からのメンバーは、14:00 には現地を出発して帰路につく。私は、事実上フリーなので、K.S さんとご一緒し昨日のお話の続きを伺うことにした。実は、昨夜の食事の後にお話をしていたとき、明朝早起きして、わたし(K.S さん)自身がどのように流されたかを現場で体験談を説明してあげるよと誘われていた。お酒も少し入っており、早起きの自信もない。更に、朝起きたら作業前に教室などを掃除をするルールになっている。団体行動から抜けるのは、気が引ける。行きたいのは山々だったが、はっきりとしたお返事ができなかった。結局、早起きはできなかったが、作業開始前の時間で、短い時間であったが、K.S さんと少しお話しする時間があった。そこでのお話は、PC の事とか、ご自宅で、無線 LAN が上手く繋がらないなどの雑談で、「機会があったら、お邪魔して設定しますよ。」と社交辞令的に気軽にお答えしながら、ふと、気がついた。今日は、作業終了後、夕方はフリーではないか。「今度、来る」といっても、何時になるか分からず、また来る保証もない。いま、困っていらっしゃることを考えると、数年先では意味がないだろう。だったら、今日、活動終了後、お邪魔することにするか。(多分、K.S さんもそれを望まれているだろうと)「じゃぁ、今日、伺って、設定しますか。」と提案してみた。決まれば、話は簡単。本日の活動終了後、K.S さんと一緒にご自宅まで伺い、PC と無線 LAN の設定をすることとした。作業時間は、何もトラブルがなければ、30 分程度だろう。途中の移動時間などを含めて、2,3 時間程度、帰宅が遅くなる程度だろう。逆に東北道の福島⇔本宮付近の何時もの渋滞のピーク時間を避けられるかも知れないなどと、その後の行動計画が、ばたばたと決まった。

まず、K.S さんの後ろを運転して、野蒜小学校を後にし、まもなく、流されたご自宅があった現場に到着した。仙石線の東名駅の近く。自宅跡から東名駅が見え、どこかで見覚えがある風景だ。それもそのはず、線路を挟んだ向こう側は、9/17 に除草作業を行った場所だった。自宅跡の玄関ポーチにレンガを積んで作った小さな祭壇があった。玄関先に出て、地面を指で指し示し、

「ここに母屋があり、仏壇のある部屋に居る時に水が来た。」
「神棚に掴まって天井近くを泳いでいた。」

「あーこんで死ぬなぁと思った。」
「一時は、(水は)増えなかったが、その内、外のガラス戸が壊れ、(水かさ)が増えてきた。」
「土壁が崩れ、ものすごい音をたてて家が壊れたが、運よくすっと外に出た。」
「ただ、直後に、瓦礫に挟まれて、動けなかった。」
「その時も、段々締まってきて、押されて痛くて、このまま死ぬんじゃないかと思った。」
「5 分か 10 分挟まれたけど、津波の動きで、運よく開放された。」
「近くにあった瓦礫(柱)に掴まった。」
「最初は短いやつだったが、長い方がいいと思って、長いやつに取り替えた。」
「適当な長さの物につかまって、隣の家の陰まで 10mくらい泳いで行った。」
「そこへ、赤い車が浮いてて、バンパーに捕まった。」
「いろんな物が流されていたが、家の陰だったので、運よく流されなかった。」
「ある程度、押し波が治まって、二階建ての家が流されてきた。」
「二階の窓が開き、40 前後の奥さんが顔を出したので、『ロープないですか？』と言った。」
「10 分くらいでロープを探して、窓からたらしてもらった。」
「ロープに掴まって、1 階まで辿りついたが、窓までは上がれなかった。」
「低体温で、苦しくなった、死ぬとは、こういうことかなと思った。」
「意識が薄らぎ、血圧も低くなったのだろう。寒い、寒いと叫んだのだろう。」
「ヤッケなどを投げてもらったけど、手も出せなかった。」
「かなリ時間が経っただろう。1 時間半くらいたっているだろうか。」
「潮が引いて、橋の袂で製材所の人に助けてもらった。」
「寒くて動けなかった。ゴミ袋で下着を作って着替えた。」
「助けられた人たちが、身を寄せ合って、屋根裏部屋で一夜をあかした。」
「今、考えると、ロープを投げてくださった方が「命の恩人」だった。」
「水が引いた跡、赤い車は、この運河の脇にあったが、、、、」
「あの人は、どこのどなただったか分からない。」
「また、これは、妄想かどうかも思い出せないが、」
「瓦礫につかまって浮いていた時、目の前に父親の写真が流れてきた。」
「(その写真を)取ろうとしたが、手を出すと溺れそうになる。」
「これを離したら死ぬだろうと思った。」
「写真は何処かへいってしまったが、あれは、『生きろ』というメッセージだったに違いない。」
「波が来る度に『死ぬんだな』と思った。」
「腰から下が何かに挟まっていたので流されなかった。」
「何度も、押し波が来て、引き波もあった。」
「結局、自宅から、100m 位先にある橋の袂の建物の屋根裏部屋で助けられた。」
「線路も向こうでは、『子どもがいます。助けて～』と必死に叫ぶ、お婆さんの声が聞こえていた。」
「警察も消防もこなかった。」
「誰も助けに行ける状況ではなかった。」
「やがて静かで冷たい真っ暗な夜が訪れた。」
「母親と、家内は、家の中にいた。家毎、数キロ先まで流され、遺体で見つかった。」
「何千体という遺体を見てきたが、背格好は似ているが、顔では判断できなかった。」
「暫く、保留にしていたが、警察から連絡があり、歯科のカルテ、DNA 鑑定の結果が出た。」
「他にも、着ていたモンペとか、知人がプレゼントした腕時計で本人であることを確認した。」

「(生き延びたか死んだかは)まったくの偶然だった。」
「あの場所で波を被り、赤い車、ロープ、瓦礫にはさまれていたこと。」
「1 つでもなかったら、多分、死んでいた。」
「生き延びた人の話を聴くと、みんな、偶然の重なりでドラマがあったと思う。そして、生き残った。」

K.S さんの体験談を体験されたその現場で聴くことができた。これ以上、リアルな体験はないだろう。(K.S さんのご自宅)隣の家(本家)は、外壁は残っているものの中は滅茶苦茶。「どうぞ。」と言われ中に入ったが、瓦礫だらけとはいえ、ボランティアの現場とは違い、持ち主が分かっているお宅に、土足で玄関や、リビングに立ち入るのは、一抹の抵抗を感じる。階段の壁には、何本も「筋」が残っており、何回も波が押し寄せたことを物語っている。家具、調度品を見ると、恐らく、築浅で精魂込めて設計された家であることが感じられる。2F のベランダから外を見ると、澄み切った秋の空を背景に、左手に宮戸島、右手に松島海岸を望み、奥松島のパノラマが一望できる。震災さえなければ、どれほど綺麗な眺めだったのだろう。

「手前の水田は、一旦、水が引いたが、今年の台風 15 号でまた溜まった。」
「この辺りは、海面より低いから、防波堤を作ったが、(今回の津波は)簡単に越えてきた。」
「奇麗に揃っていた、松並木も疎らになった。」
「最初の波では大丈夫だったが、2 回目、3 回目と揺さぶられて、根こそぎ抜けたのだろう。」

松の木を揺さぶって抜いてしまうよう力って、一体どれくらいなのだろう。われわれが、除草作業で、指先に力を集中させて、雑草を根こそぎ抜いた時の力の何倍になるのであろう。想像も付かない。

K.S さんは、震災で、自宅とお母様と奥様を同時に亡くされ、現在は、多賀城のアパートで一人暮らしをされている。そのアパートでの PC や無線 LAN の環境設定をすることが主たる目的で、アパートにお邪魔することとしたが、途中、陸前大塚にある洞安寺に立ち寄った。ここは、曹洞宗のお寺で S 家の菩提寺である。本堂の裏の一室に案内された、祭壇を中心に、今回の震災の犠牲になられた方々をお骨と慰霊が所狭しと並んでいる。お話好きの K.S さんも口数が少なくなり、「シーン」と張り詰めた空間と静寂が、ことの重大さを感じさせ、胸が締め付けられる思いがする。中央の祭壇で、線香をあげ、手を合わせた。そこには、御尊影や戒名もあり、避難所の献花台や、無縁仏とは違う。「これが現実だ」と思うと、目頭が熱くなり、何と言っていいのか、言葉に詰まった。
K.S さんの愛車の Prius に追従して、R45 を走り、瑞巌寺の脇を通り、松島海岸を巡る。このあたりは、絶好のドライブルートなのだろう。思わず、景色に見とれていると、車線をはみ出しそうになり危ない。塩釜を抜け、多賀城に入る。間もなく、総合体育館の脇にあるアパートに到着し、PC 関連の設定を開始した。ルータに無線 LAN のアクセスポイントを接続して、無線でプリンタを使えるようにする事が目的だ。何もトラブルがなければ、30 分程度の作業だろう。K.S さんの性格なのだろう、機器のカタログや取扱説明書が綺麗に整理されており、ものの数分で現在の設定状態が把握できた。ゴールに向かい手段は、2 通りある。どちらの方式にするか、ご本人と使い勝手やリカバリーのリスクなどを勘案して方針を決定した。(このあたりは、半ば、仕事の延長線であり、朝飯前だ)途中、接続に必要な LAN ケー

ブルが手元になく、近くの家電量販店まで走って調達するという場面もあったが、概ね順調にことが運び、1 時間弱で設定が完了し、動作確認もできた。さて、これから、東北道を400km 車を運転して帰らなければならない。内心は、設定作業を失敗してハマらなくてよかった。(ホッ) まさか、(設定が)できない状態では帰れないだろう。作業が深夜に及ぶリスクもあったわけだ。設定作業の合間に、K.S さんは蕎麦を茹で、食事の準備をされていた。報酬を得たらボランティアではなくなってしまうと思いながら、ご厚意に甘えることとした。短い時間であったが、K.S さんにも喜んでいただき、こういう形でのお手伝いができたことに満足感、達成感、安堵感を感じた。思いきって御邪魔してよかった。また、道中、貴重な体験もできた。また、いろいろなお話ができ、楽しい時間を過ごすことができた。考えてみれば、震災がなければ、K.S さんとお会いし、このような形でお会いし、お話ができた可能性は限りなくゼロに近かったのだろう。このような、現地での出会いやふれあいを 1 つでも多く作り育むことが、「絆」ということであり、今後のケアや復興に繋がっていくエネルギーのなるのだろう。K.S さんの人と也に触れる程、別れ辛くなるが、また、この K.S さんとの出会いは、運命的な出会いになるのではなかろうかなどと思いながら、何処かでお会いできることを期待して別れた。別れ際に、地元松島の海苔とお酒のお土産までいただき、完全にボランティアではなくなってしまった。

帰路、運転しながら、ふと、気が付いた。「しまった。野蒜小学校に、マイスコップを忘れてしまった。」いずれまた、来るだろうから、サポートチーム G に連絡して Pick up しておいてもらおう。帰宅後も K.S さんからいろいろな情報をいただいた。先ず、東松島市では、サポートチーム G と連携して、「パソコン教室」を始めるとのこと。就業訓練とまでは行かないものの、PC を活用したいが、なかなか教わるチャンスもなく、場もなかった。今回は、公民館をお借りしての開催となるらしい。早速、担当者を紹介いただき、カリキュラムと日程の相談を開始した。また、「まちづくり」の一環として、11/26 に市議会の副議長の S さんとお話しするチャンスがあったが、宮戸島の地場産業である、海苔と牡蠣の養殖を、「体験学習」の場として、観光地化するような動きが、島を挙げての活動となっている。その旨が、お送りいただいた、東松島市の市報「ひがしまつしま」に掲載されており、地元の方々の復興に向けた取り組みが分かり、元気をいただいたような気がした。考えてみれば、これまで、被災地に訪れても、地元の皆さんは、避難され、殆ど人気のないところでの活動だった。僅かに、10/30 の「野蒜復興祭」では、多くの方でにぎわったが、この人たちは、どこからいらしゃったのだろうという感覚であったことは、否めない。何度も現地に訪れながら、地元の方々による復興の息吹を感じるチャンスがなかったのかもしれない。震災前の活気とまでは言わないものの、仮設住宅内での仮設店舗のオープンや、先の体験学習など、多くのイベントや、プロジェクトが並行して走っている。そのことが、市報を見ることで、初めて分かり、改めて、地元の元気と、復興に息吹を感じることができ、嬉しくなったと同時に、「支援してあげなければいけない」というような、少し上から目線があったのではなかろうかと、少し、自省と自己嫌悪に陥った。また、市報によれば、東松島市では、「絆」ウィンドブレーカーを作って、売上の一部を、市の復興のための寄付金にあてているらしい。僅かではあるが協力させていただき、今後は、「絆」を胸にして活動しよう。

【2011/11/5】

9/19 のいわきでの活動は、水戸市の社協経由で紹介いただき、社協のスタッフに同行する形であったが、この時、いわき市の「いわき市復興支援ボランティアセンター」で、「サロン」と呼ばれる活動をしているとの情報を入手した、ここでは、「応急仮設住宅などでの傾

聴」のボランティアを行っているとのことだ。ただ、開催日が、月、水、金曜日に限られており、週末は開催していないようだ。このため、私のようなサラリーマンボランティアでは参加しづらいが、条件が整えば参加してみたい。被災された方々も、石巻や、福島とは違った悩みや課題があるのだろう。地域ごとに、被害の内容も程度も違う。そこで暮らして入る人々の価値観も違う、更に、ボランティアを展開する地域の社協や、ボランティアセンターのスタッフの体制や、やり方、また、参加すボランティアの価値観や思いも千差万別、十人十色である。このような中、求められる活動を最適なタイミングで最適な量で展開し、質の高いボランティア活動を展開することは、至難の業かも知れない。しかし、諦めてはいけない。少しでも、一歩でも、何か役に立つことができるのであれば、ボランティアは現地に向かう。今回の災害は、悲惨で大変な出来事ではあるが、ボランティア活動を通じ「人間」と言うものが少し見直されたような気がする。そして、このような仲間が一人でも増えることを期待したい。

帰宅後、この「サロン」について、インターネットで調べてみた。上記の「サロン」は、いわき市の社会福祉協議会が行っている活動で、社協職員の勤務時間の関係で、平日(月、水、金)に行っているようだ。ボランティアには、平日、週末もない。と思いながら、一方では、職員にしてみれば、週末は休みたいのだろう。

更に調べてみると、いわき市のWebページから、いわき市の社協のを経由して、「いわき市小名浜復興支援ボランティアセンター」に辿りついた。いわ市では、小名浜地区の生活支援系のボランティアを地元のボランティアに委託しているようだ。この委託先は「小名浜地区復興支援ボランティアセンター」と称するボランティア団体で、社協の管轄らしい。ここでも「サロン」と称する活動を展開しており、平日だけでなく、毎週土曜日に開催しているとのこと。早速、連絡を取り、情報交換と活動の打診をすることにした。

「サロン」では、毎回「〇〇教室」と称して、集合住宅などの集会所で人を集めてイベントを開催しており、マジックシューや落語などの娯楽系から、ヨーガ、ストレッチなどリラクゼーション系など、幅広く開催しているようだ。自分でできる「ツボ押し」、だけでなく、知人に「アロママッサージ」、「子ども向けエアロビクス」のインストラクターもおり、いろいろできそうだ。ただ、参加者が読めない。開催場所が雇用促進住宅と呼ばれる集合住宅の一角にある集会所であり、仮設住宅、避難所ではないので、多くの集客は望めない。これまでの実績では、毎回、4、5 人程度の参加者であるとのことだった。子供向けのイベントもあるようだが、参加者の年齢層すら分からない。もっとも、「ボランティア」という立ち場では、なかなか、仮設住宅や、避難所に出入することは難しく、制限されることが多いのだろう。いわき市もこのような制限があり、仮設住宅や避難所ではなく、集合住宅の集会所で開催するのだろう。 察するに、この集合住宅には、震災前からお住まいの世帯と、震災後、家や家財をなくして仮設住宅としてお住まいの世帯が入居されているケースがあるのではないだろうか。いわき市の小名浜地区は、海岸に面する美しいリゾート地であるが、今回の震災で、少なからず津波の被害があった。このため、少数ながら、被災された方々もいらっしゃるはずだ。このような背景があるので、イベントに参加する場合の心の状態が違うので対応も慎重にせざるを得ないだろう。ただ、どなたが、どのような背景をお持ちなのかは分からない。勿論、相手に聞くわけにも行かず、難しい対応が求められる。ただ、あまりセンシティブになってもいけない。そもそも、カウンセラーは、相手の方の背景などの情報、いわゆる「準拠枠」がない状態で、対応しなければならないはずだ。

先ずは連絡し、活動可能な日程と内容を連絡するも、ちょうど、その日は、先方のイベントと重なっており、「サロン」は、開催しないとのこと。では、翌月の日程を。。。となったが、そ

れでは、1,2 か月間空いてしまい、その間も、仮説住宅への入居は続けられる。ただ、状況が分からないので、先ずは、下見と見学を兼ね、「サロン」の会場にお邪魔することとした。

しばらくすると、携帯が鳴った。実は、「サロン」は日程的に難しいが、別件で活動できる可能性があるとのことだった。最近、いわき市内の仮設住宅が、オープンして入居が始まっている。220 世帯分の仮設住宅に、既に約 150 世帯が入居されており、今後も、入居が進むらしい。このような、仮設住宅で活動できれば、それなりに人も集まるので、願ってもない話だ。「サロン」では NG だった日程で、仮設住宅の担当者に繋いでもらい、交渉してもらうこととした。ただ、仮設住宅は、社協の管轄で、基本的には、平日の活動となるだろう。ただ、入居のさなかでもあり、当面はなにかとドタバタで、職員も休日出勤を強いられるはずだ、また、入居者にしても、入居して間もない環境で、右も左も分からず、集会所などで入居者同士のコミュニケーションを図るには絶好の機会となるはずだ。更に、そこに入居される人は、福島原発に近い富岡町の被災者とのこと。富岡町と言えば、8/28 に出向いた郡山の避難所(ビッグパレット)でマッサージをしながら、お話を伺った経緯もあり、何やらご縁を感じる。

10 月の中旬、急に、肌寒い日が続く。もう秋になったな～。と感じるが、同時に被災地はどうだろうかと思う。ニュースを見ていると、仮説住宅の断熱が不十分である物件があり、追加工事を進めているというニュースが流れていた。当時、あれだけの戸数を一気に作らなければならないという大変な時期であるのは分るが、季節めぐり、秋になり、やがて冬が訪れることは、ドラッカー先生に言わせれば、「すでに起こった未来」であり、分りきっていたことである。ベストセラー本のタイトルを借用して、『もし仮設住宅の建設業者が、P.F.ドラッカーの「マネジメント」を読んだら』どんな立ち振る舞いとなったのであろうかとついつい考えてしまう。ニュースといえば、10/23 のニュースで、3/11 に事故を起こした、福島第一原発では、懸命の対策の結果、圧力容器下部の温度も 100℃以下になり、年内にも冷温停止状態に移行できる見通しとの発表があった。専門家の言う、「冷温停止状態」の定義云々はさておき、大量の放射能が漏洩している状態ではなくなったが、まだまだ安心はできない。また、これまでに汚染された土壌や海水を「除染」する必要があり、今後は、「除染」という大きな問題に取りくまなければいけない。

今年の夏は、発電所の運転中止による電力不足から、東京電力の管轄である、関東一円では、節電、省エネが騒がれ、オフィスでも照明を消し、エアコンを切り、家庭でも、LED 電球に交換したり、扇風機で過ごすなど、国民的な節電、節約を心がけた。8 月の一番暑い頃は、バケツに水をはり、素足を入れ、「足湯」ならぬ、「足水」での納涼も経験した。その後、季節が進み、これからの季節は、「足湯」だろう。この「足湯」は、ビックパレットでもやっていたサービスで、人気が高いサービスだ。今後は、避難所、仮設住宅に出向く際、足湯用のバケツを持参し、足湯とツボ押しなどの組み合わせることも有効だろう。この仮設住宅では、これから、入居者が増える。ただ、同じ富岡町と言っても、ご近所とは限らない。つまり、仮設住宅で、新たなコミュニティを作ることになる。

そこで、足湯、ツボ押しという形で、コミュニケーションの場を提供できれば、コミュニティ作りにも一役買っていることだろう。どんな規模で開催できるのか？情報が少ないところで、悩んでも仕方がない。先ずは、出向いて行って、やってみよう。そしてフェードバックすればよいではないか。また、人数的にも、どのくらいの手間がかかるのだろうか？例えば、足湯のお湯をどこで、どうやって沸かすのか？足拭き用のタオルは何本用意すればよいのだろうか？そもそも、水道やガスなどの設備はあるのだろうか？なければ、カセットコンロとヤカンなども持ち込む必要がある。ボランティアは、「自己完結」でなければならない。「そなえよつねに」。幼い頃に経験した、ボーイスカウトのモットーが蘇った。ただ、最近は、便利になり、

現地で調達することも考え、備え過ぎて、過重な装備にならないようにしなければならない。備え過ぎてもいけないのである。一連のボランティア活動で、いろいろな方にお会いしたが、「実は、ボーイスカウトやってました」という人が、意外に多い。昨今、このような団体も「若者離れ」の状態だそうだが、「三つ子の魂百まで」。「奉仕」、「利他」、「自己完結」など、「ボランティア」の精神は、幼い頃に身と心に刷り込まれたスカウト精神と共通点が多い。このマインドが、数十年の時を経て蘇ったのだろう。

そんなことを考えていろいろな準備をしながら、仮説住宅の状況を確認するため、ボランティアセンターに連絡した。詳細な日程は、決まっていないが、可能性はあるようだ。ボランティアセンターの人曰く、一度見学を兼ねて、現地に出向いて打ち合わせをした方が話しが早いようだ。もっとも、先方にしてみれば、何処の馬の骨か分らない人に出入りされるのは、困るだろうし。一度、「面通し」をして「仁義を切る」必要もあるだろう。そして、「面通し」ができていれば、後は、届出だけで、土日祝日でも仮説住宅での活動ができるとのこと。そこで、11/5 にいわき市に出向き、仮設住宅の見学をしながら、今後のスケジュールなどについて、直接相談させていただくこととした。

ボランティアセンターから車で、10 分程のところに、JR 常磐線の「泉」という駅がある。駅から、500m の便利な立地に、泉玉露(いずみたまつゆ)という地区があり、そこに、仮設住宅がある。プレハブの建物で、玄関には風除けやスロープが付いているが、窓サッシは、二重ではないようだ。事務所に入ってご挨拶をさせていただいたが、天井も薄く、断熱などは少なようだ。浜通りは、雪は少ないが風が冷たい。この冬は寒いだろうなと思いながら、事務的なお話しとボランティアの活動内容の登録を済ませた。既に、いろいろなボランティアが入っおり、週末の予定となると、2 週間くらい前に連絡を取り、スケジュールの調整が必要らしい。開催場所となる集会所を見せてもらったら、今日は、近くの教会の牧師さんのグループがカフェ開き、珈琲を振舞っていた。「ボランティアです。」と言いながら、勧められ、珈琲の香りに誘われ、ご馳走になった。集会場は、20 畳ほどの広さで、カーペット張り。懸念していたお湯も出るらしい。事前に、「チラシ」などを配り、宣伝、集客が必要だ。先ずは、日程を調整して具体的に話を進めよう。仮設住宅にいらっしゃる方々は、高齢者が多く、「足湯＋ツボ押し」が望まれるだろう。数が多くなると、お手伝いのメンバーも必要だろう。

石巻のボランティアバスツアーで知り合ったボランティア仲間に手伝ってもらうと、メールで連絡し、2 人で見学に出向いた。お手伝いに誘った人は、教員の卵の S さん。来年の 4 月からは、小学校の先生になる予定である。Team Japan 300 の活動や、リスニングボランティアや「傾聴」に興味があり、体験したいとのことだった。将来、教師という立場を考えると、きっと、よい体験になることだろう。帰路、海の見える美しいレストランでランチをご一緒した。

S さん曰く、

「このように穏やかで美しい海が、豹変して。。。」

まったく、その通りだと思った。この美しい海が、何万人もの命を奪い、何百万人もの生活と未来を奪った。このことは、決して忘れてはいけない。私自身、隣県の茨城県に住み、これまで、「いわき」、「小名浜」という地名を聞くと、やはりリゾート地のイメージが強かった。温泉もあり、海は美しく景色も奇麗だ。だが、仮設住宅や、津波の爪痕を目の当たりにすると、間違いなくここは、被災地である。いわきでは、ここ(泉玉露)だけでなく、仮設住宅を建設しており、当時、郡山のビックパレットに避難された、富岡以外の方々(例えば川内方々)も、移り住まわれる計画がある。先ずは、ここで「足湯＋ツボ押し」を広め、他の仮設住宅にも波及させ継続的な支援をしていきたい。そのためには、隔週くらいの頻度で出向き、信頼関係と

実績とチャネルを作っておきたい。そして、ボランティア仲間を巻き込んで、継続的な活動としていきたい。さぁ、活動可能な日程を連絡し、スケジュールを調整しよう。

【2011/11/23】
　小名浜の「泉玉露」の仮設住宅と直接、日程の調整をさせていただき、11/23 と、12/4 に活動させていただく運びとなった。早速、チラシに日程を刷り込み、S さんに仮設住宅に出向き戸別配布をしてもらおう。11/15 事前に出向き、チラシを配布し、集会所前の掲示板に、ポスターを掲示してもらった。当日は、結局、S さんと 2 人で出向いた。仮設住宅が並ぶ一角に集会所で、「足湯+ツボ押し」を行う。現地では、誘導の看板、お湯焚きなど手分けして準備に取り掛かった。当日、午前中は恒例の「ほっこりカフェ」が開催されていた。カフェの開催者とお話させていただいた。

「お！名古屋からですか？」(ボーイスカウトの制服の左肩のワッペン『NAGOYA』を見て)
(思わず、ボーイスカウト流の挨拶である「敬礼」をしながら)
「いえ、昔やっていまして。今日は茨城から来ました。」
(会場内からも 2,3 人が敬礼している。ボランティア活動の現場ではよくある光景だ。)
「あー、足湯の？」
「はい。」
「チラシに先着 20 名って書いてあったので、予約できないかしら？って人もいましたよ。」
「始めてなもので大勢でこられたら回せるか不安です。」
「今日も盛況ですね。」
「皆さん、お話にいらっしゃる。」
「お話することが楽しく、お話がしたくて集まっていらっしゃる。」
「一時期、みんなで盛り上がっていたので、『カラオケ』をやろうとしたら、話ができず不評だった。」
「だから、今はカフェだけを開いて自由にお話をしていただいている。」
「そうですね、我々(ボランティア)にできるのは『場』を作りお話を聴く事ですからね。」
「足湯やツボは、「手段」ですから。」
「(カフェを、)継続的に続けられていらっしゃり、すごいですね。」
「近くなので、毎週来て居ます。」

　カフェの撤収の足湯の準備でドタバタが終わる頃、時間前に、「整理券」を取られた方を含め、三々五々集まってこられ、順次、会場内にご案内し、足湯を始めてもらうと、みなさん、ほっとした表情でため息が漏れる。

◆富岡町 70 代女性
「これ、いいわ～。」「じわ～っときて、あったまる。」
「最初は、ちょっと熱いかもしれませんが、じわ～っときますよね。」
「今は、44℃にしていますが、15 分くらいで、冷めてきます。」
「40℃くらいになったら交替する形で。」
「いつも、いわきの温泉に足湯をしに、でかけるのよ。」
「今日は、ここでできてうれしいわ～。今夜はゆっくり眠れそうだわ～。」

ほっとすると、思い思いに雑談が始まる。

◆富岡町 70 代女性
「『足湯』は、ビックパレットでもやってましたよね？」
「あれは、地元の大学生がやってたな。」
「あれを見て、是非、『足湯』をやろうと思ったんですよ。」
「自分も大好きで自宅でもやってます。」
「夏場は、エアコンを切って、水でやってました。」
「こんなバケツがあると自宅でもできるんですね？」
「このバケツ、譲ってくださらない？ホームセンターにあるかしら？」
「ホームセンターにも在庫がないことがありますので、通販が便利です。」
「共同購入されては如何ですか？『足湯バケツ』で検索すれば見つかります。」
「Ledy's 用の小さいものが、25cm まで、男女共用という一回り大きなものがあります。」
「自治会に頼んで、購入してもらおうかしら。」
「みなさんで購入されたら、(この会に)来ていただけないですね。(^^)」
「(富岡にある)家の押入れに電気であったまるの(足湯の機械が)があるんよ。」
「でも、(放射能が)怖くて取ってっこれない。」
「口に入れるものじゃないから大丈夫よ。」

「(ここへは)何時頃いらっしゃったのですか？」
「(ここへは)9 月の中頃、抽選に当たったので移ってこれたのよ。」
「それまでは、東京とか千葉の親戚でご厄介になっていたけど、。。。」
「ここに来て、皆に会えてホッとした。」
「都会じゃ、ギスギスしているし、情報もないし、親しくするか人もいないので、寂しかった。」
「ここ(泉玉露)は、いいわ～！」
「あったかいし、便利だし電車ですぐいわき市の街中まで出れる。」
「(仮設住宅脇の線路を通る)スーパーひたち(JR 常磐線)を見ると(富岡に)繋がってるんだなぁと思う。」
(2011/11 時点で、JR 常磐線は、富岡を含む広野⇔亘理間は復旧の目処が立っていない)
「わたしら浜通りの人は、中通りは住み辛いんだろうね。」
「一旦、他の仮設に入った人も、ここ(泉玉露)のキャンセル待ちをしている。」
「ここは、人気なんですか？」
「うん、ここは、皆が来たがってるけど、数が足らんでしょうね。」
「全体の数では足りてるかも知れんけど、皆と居たいとか個人の希望も、聞いて欲しい。」
「ただ、借上げのアパートは、どこへ回されるかわからんので、なかなか申し込めない。」
「私はここがいいし、(ボランティアの皆さんが)いろいろやってくださるので、こういうイベントに出向いて楽しんでいる。」
「出てこれる内は、ええんだけど。年寄りだけで動けんお宅も多いんじゃないかしら。」
「来たがってる人もいるけど、一人じゃ動けんし。」
(お迎えに伺うことができれば参加いただけるのだろうか？)

　その後も数名の方が加わり、定刻とおり、ツボ押しを開始した。都合、10 名弱の人数でスタートした。 足湯のお湯は、準備ができているが、バケツが 5 個しかない。1 回を 15 分とし

ても、数回の交替をしながら、その合間で、ツボの説明と実演。かなりドタバタだろう。ただ、講義とか研修とは違い、ご自分の身体を使っての実習、体験であり、説明というか、コミュニケーションを楽しみながら進められる。他の仮設住宅でマジックショーのお手伝いさせていただいた時に、プロのマジシャンからいくつか簡単なマジックのネタを教えてもらったので、準備しておこう。アドリブで場つなぎが必要な場合は、試してみようかしら。マジックショーの定番 BGM、ポールモーリアの『オリーブの首飾り』も iTunes でダウンロードして、iPhone に入れてある。ただ、主役は、「足湯＋ツボ押し」なので、イベント終わった後でも、少しでも思い出して、ご自分で試していただきたい。「万能ツボ 10」なる冊子を、参加者にお配りすることを想定し、若干数を準備していたが、最終的には、著作権をクリアすることができず、配布はあきらめ、使用後、その場で回収させていただく形とした。

自己紹介の中で、8/28 にビックパレットに出向いた話[第 2 章]をさせていただき、当日、民謡を唄っていただいたお父さんとお会いしたい。とお話をしたところ、参加者の中には、心当たりがあるらしい。これも、富岡町のお国柄なのだろうか。都会では、隣に誰が住んでいるかも分らない生活をしているし、流れている時間も早さもまったく違う。ところが、富岡町では、町全体が家族のような繋がりがあり、アットホームである。これは、東松島の野蒜で感じたことと同じ空気だ。なぜ、我々は、この空気を忘れてしまったのだろうか。今は、他の仮設住宅の方にいらっしゃるとのこと。連絡が取れお会いできたら、どんなに嬉しいことだろうか。

活動が終わり、引き上げる際は、現地の方々に「また、来ますよ」と言って分かれたが、その言葉も社交辞令に過ぎず、言葉にするのも躊躇する気持がないわけではなかった。「また、来ます。」という言葉が嘘にならないよう、継続的な活動としていきたい。また、多くのボランティアがあるが、このような形で、現地の方と One to One の繋がりを以って、「絆」を感じることができる活動は少ないだろう。より多くに方々に話しかける活動を続けてきた結果かも知れない。これは、単にボランティアに参加するのとは、意味合いも変ってくると思う。つまり、第三人称という第三者の立ち場から、個人の御名前やお顔が具体的になり、特定できる関係になってくると、第二人称や、第一人称で考えることができ、これが少なからず、相手にも伝わるのではなかろうか。そして、「絆」を深めていく。決して一過性のものでも、表面的な物でもなく、深く相手を思う気持は、必ず、相手に伝わり、今後の復興のエネルギーになり、「一人ではない」という安心感と安堵感を醸成し、自己の存在を肯定する。こうやって、笑顔を取り戻すのだろう。そんな思いで、イベントのエンディングテーマ(BGM)としてオフコースの『言葉にできない』を選んだ。

♪あなたに会えて本当によかった、嬉しくて、嬉しくて、言葉に出来ない。♪

このように、すべてを仕切ってイベントを開催するのは、初めての体験であった。ぶっつけ本番であったが、それなりに楽しんでいただけたのではないだろうか？ボランティアセンターのスタッフにも一定の評価がいただけたようだ。今後は、どのくらいの頻度で、どのように開催するか。今後の御相談になるだろう。できれば、土日の開催としていただきたいが、先方の御都合もあるだろう。ただ、提供側の都合で云々というものではなく、サービスを受ける側のニーズや状況を最優先すべきだと思う。今、仮設住宅では、新たなコミュニティを作っていくことが望まれ、そのためには、「場」が必要である。また、一過性のイベントではなく、また、顔を合わせることができる「場」を作り、「仲間」という意識を持っていただけるような、絆を感じる関係を築いていきたい。

片付けを始めている頃、年老いた母を抱きかかえるように来場された。会場内にお招きし、急遽、お湯を沸かしなおし、足湯の準備をした。半身不随なのか、意識はあるが、手足はほとんど(自分の意思では)動かせない。目も焦点が合っていない、言葉も伝わっているのか。足湯に足を浸け、冷たい手を握る。硬いからだをマッサージでほぐしながら、ずっと、目を見つめていると、何か、感じられたのだろうか、口元が微かに緩んだ。会話もない、この手のつながりと、意識の交流だけで、何が伝わるだろうか。隣で息子さんが、暖かく見ていらっしゃる。きっと、年老いた母親に足湯をさせたいという一心で重いからだを抱えて、集会所までいらっしゃったのだ。息子さんにも足湯を準備し、ほっとすつ一時を提供できたのだろうか。ふと、息子さんが、

「これ、『魔女の宅急便♪』ですね？」
「そうです。ジブリを集めてみました。」
「今度は、トトロだよ。」

脇で子供(小学生低学年の女児)が、BGM を流れていた iPhone に興味を持ち、勝手にいじっている。たまたま、BGM をジブリのアルバムに切り替えていた。この息子さんも、ほっとしたと同時に、これまで、お母様のことで頭がいっぱいだったのだろう。そんな日常の中で、一瞬でも、お母様意外のことに気をまわすことができたのだろうか。時間があれば、もっと、手を握って差し上げていたい。閉会間際に来たとこを詫びながらの別れだったが、次回は早い時間に来ていただきたい。否、こちらから足湯バケツとお湯を持って、出向くような仕組み(「往診」のような仕組み)はできないだろうか？

お手伝いをしていただいた、S さんも始めての体験とはいえ、不慣れな作業をお願いしたにもかかわらず、滞りなく「足湯」のお湯の準備をしていただき、非常に助かった。次回は、よりよい形で実施することができるだろう。人間は、学習し、成長するのだ。

【2011/12/4】

小名浜の泉玉露での 2 回目の活動である。前回、15 名弱の参加をいただき、今回はロコミで広まり、参加者が増える可能性がある。足湯バケツの追加したり、お手伝いのスタッフをの増員をしなければならない。ボランティア仲間の O さんをお誘いし、S さんからお誘いいただいた、M さんもお手伝いをいただけることとなった。都合、4 名のスタッフ。前回(11/23)のドタバタは回避できそうだ。こうやって、メンバーを増やせば、継続的な活動により、絆も増えてくる。そして、先方のキャパが増えても対応が可能になってくるので、訪問サービスの可能性も出てくる。更に、いわき地区の他の仮設住宅にも展開できる。

12/4 当日、お手伝いしていただく方々を、それぞれの集合場所で、Pick up しながら、現地に入った。集会所の壁には、沖縄の小学校から贈られたメッセージが掲示してあり、楽屋裏には、クリスマス会の準備も見受けられた。この集会所でクリスマス会を予定しており、皆さんが楽しみにしているとのことだ。仮設住宅での年末年始。日常とは異なる生活を濃縮したような 1 年だったのだろう。自分の力では、どうしようもならないこと、我慢と憤り、ストレスと虚脱感、そんな中で気が付いた人とのつながりや温かい心、それぞれの思いが募るのだろう。そして、思いを断ち切るチャンスでもある。新しい年は、是非、嬉しい、楽しい思いを増やしていき、これまでのマイナスイメージを中和させるような形で、辛い思いでを忘れ、明るい未来を開いていく。そんな、マインドを取り戻していただきたい。

三々五々、参加者がいらっしゃる。順次、足湯にご案内をしていった。ご夫婦で参加された方で、奥さまは、左足の不調を訴えられ、足湯とマッサージで解し、温まっていただいた。足湯から足を出しても、指先が冷たい。そこで、手を覆って、温め、足裏のマッサージをさせていただいた。

◆富岡町 60 代のご夫婦
「左が、鈍くなって感じなくなってきた。」
「温めて、マッサージすると、感覚が戻ってくるかもしれませんね。」
「指先冷たいですね。こうやって、指先を曲げ延ばしして。。。」
「段々、あったかくなってきた。」
「足の筋肉も硬くなってますね。解しておきますよ。」
「あ～、気持ちええわ～。」

隣でご主人も心配そうに見守っていらっしゃる。ご主人は、日頃から動いていらっしゃるらしく、足腰が若々しい。それでも、ふくらはぎや太もものマッサージをさせていただいたら、

「効く～っ。それ気持ちええわ～。」

と喜んででいただけた。

「私もビックパレットに伺ったことがありまして。。。。」
「8/28 でしたから、時期的にちょうど閉鎖になる直前でした。」
「あのジャングルジムのような間仕切りで。。。」
「あれは、ホールだろ？」
「わしらがおった 3F は、あんな間仕切りがなく、タタキの床に段ボールだった。」
「冷たくて、痛くて、足湯にはよく行った。」
「あれは、学生さんがやっていたのですよね？」
「そーだ。多分学生だ。」
「寒いの痛いのより、当時は何も考えられなかった。」
「いろいろなことが頭に浮かんでくるけど、考えが纏まらず、しまいには考えられなくなる。」
（ご主人は、こういうことを話したくて、いらっしゃったんだなと、思う。）
「考えようと思っても、頭は考えていない。」
「考えない、というか、『無』の境地って言うんだろうなぁ～。」
「しばらく、ボーっとして過ごした。」
「最近は、やっと、考えられるようになったけど、考えれば、考える程つらい。」
「ただ、辛くても、どうすることもできん。」
「。。。辛いですよね～。ここで、吐き出して行ってください。また来ますから。」
「。。。。」

お話を聴きながら、目を見つめ、無言で頷く。

「どこにもはけ口がなく、どうしようもない。」
「考えても考えても、答えがない。考えることが辛い。」

「ボーっとしていたいけど、それじゃぁいけないとも思う。」

そんな、心境で、何も改善されない環境と先行き不安。いろいろなことがストレスとして襲いかかっているのだろう。なんとかお父さんの力になりたい。伝わったであろうか。

一方、前回(11/23)、遊びに来てくれたお子さん(H ちゃん[小学 2]、A ちゃん[小学 1])が、元気な顔を見せてくれた。H ちゃんと、A ちゃんのお相手は、子供好きの O さんにお任せしたら、「H ちゃん～」、「A ちゃん～」と名前を呼びながら、走り回り、床で側転したり、トランプをしたりして楽しく遊んでいる。そこへ、仕事帰りに立ち寄られた、母子(19 歳の娘さと母親)がいらっしゃった。足湯に浸かるやいなや、漫談が始まる。いくつか、ツボの話をさせていただいたところ、お二人とも肩コリの悩みを抱えていらっしゃるとのこと、肩と首筋のツボを押してさしあげたら、

◆富岡町 50 代女性
「きゃー！痛、痛、痛。。。」
「凝ってますね～。鉄板背負っているようでしょう？」
「そうそう、すっきりした経験がない。」
「肩が凝っていると、憂鬱になりますからね～。」
「痛、痛、痛。。。」

こんなに、効くのは初めて、ご本人もびっくり、暫く、マッサージでもみ解し、お手伝いいただいている、S さん、M さんにもツボ押しマッサージを実践していただいた。最初は、おっかなびっくりだったが、暫くすると自然に話しかけながら、コミュニケーションができている。その後も、お二人は、

◆富岡町 10 代女性
「効く～っ。それ気持ちええわ～。」
「そこ、やヴぁい。」
「いやーっ、天国、天国。もうここで、死んでもいい。」

とても、19 歳の娘さんから出る言葉とは思えなかったが、リラックスしてくつろいでいただけた証拠か。ただ、この漫談のような元気の裏にも辛さがあり、ストレスがあるのだろう。その「辛さ」を汲み取ってあげたい。

「温まって来ましたね。」
「今日は、ゆっくり眠れますよ。」
「ほんと？やったー！」

今回は、2 回目でもあり、あまり緊張しない。前半の 1 時間で、ツボの話も、マジックも淡々と進めることができた。後半の 1 時間は、足湯とマッサージとし、参加者とのコミュニケーションを重視した。足湯とマッサージなどは、どうしても、1:n のコミュニケーションになってしまう。今回は、スタッフの人数も多いので、できるだけ、1:1 のコミュニケーションができるような時間をとるように心掛けた。手伝っていただいているスタッフも、「リスニング」は初めて

の経験だろう。理論を学ぶことも大切だが、現場で体験することの重要性を感じていただけるだろう。とはいえ、最初のきっかけ作りがしい。そこで、自分がやっているマッサージを他のメンバーに交替するような形で、自然に参加者との接点が持てるように誘導した。表向きはそれなりにお話しを聴けていると思われたが、恐らく、想うようにできなかった自分に対し、「自分への宿題」を持ち帰ることになったのだろう。そして、次回は、宿題をクリアしよう。と。前向きな宿題を持ち帰っていただけたと信じたい。「リスニング」は、「人間性」を磨く訓練でもある。裸の自分を相手に見てもらって、評価してもらう。受け入れていただければ、合格である。素の自分を表現する。口で言うのは簡単だが、やるのは難しい。この難しさは、やってみないと分からない。この活動を通じて、スタッフのみなさんにも、こんなことを体験し、学んでいただけると嬉しい。

ご家族、ご夫婦での参加で、アットホームな雰囲気の中で、くつろいでいただけた。来年の予約(1/15、1/29)を入れて、集会所の周りを自転車で走り回る、H ちゃんと A ちゃんと別れ、仮設住宅を後にした。お手伝いいただいたスタッフも、それぞれ、これまでの「泥カキ」とは違った、貴重な体験ができたことだろう。この思いを次回に繋げ、より深い関わりをもって行きたい。また、スタッフ個人も参加者個人と繋がり、この集合体が、メッシュ状に入り組んで、より、太い「絆」となるような活動としていきたい。そして、この場が、皆さんの「居場所」となるように。翌日、初めてお手伝いいただいた、M さんの SNS に、今回のの活動について投稿され、そこに、ボランティア仲間がコメントがある。そのコメントを読んだ W さん 1 月ま無理だが、2 月から参加したい旨の連絡をいただいた。この人も石塚観光のボランティアバスツアーでご一緒したことがある人だ、スタッフ側も、メッシュのように「繋がり」が広がっていく。また、12/18 の「慰労ツアー」で知り合った、S さんにも、「足湯とツボ押し」の紹介をし、お誘いしたところ、年明けから、お手伝いいただけるとのこと。これで、人手不足の心配もなくなり、1/15 も回せる見通しがたった。また、スタッフが増えれば、いろいろと幅広い活動の可能性が見えてくる。感謝、感謝。

【2012/1/15】

いわきへは、年開け初めての訪問だ。12:00 頃、現地入りし、13:00 まで準備。今回は、参加メンバーの中に、沖縄楽器(三線)ができるメンバーがいたので、「足湯」だけでなく、「沖縄民謡」をたのしんでもらおう。少し早目に現地入りし、お囃子のリハーサル。更に、選曲。「故郷」という有名な民謡があるようだが、残してきた自宅を連想してしまうような、物は止めよう。馴染みがあり、みんなで、口ずさめるような歌がいいだろ。13:00 になっても、どなたもいらっしゃらず、待つこと、20 分。11/23 にいらっしゃった方が再来された。

◆富岡町 60 代女性
「こんにちは～。お久しぶりです。」
「今日は少ないね。」
「みんな、よばってあげるよ。ただ、出かけちゃったんじゃないかな？」
「あ、携帯(電話番号)が分からんは。。。」
「あそこの、2 軒目なんだけど。。。」
「じゃぁ、ちょっと、声掛けてきます。」

お友達を呼んでいただき、更に、集会所近辺に戸別訪問しお声掛けさせていただき、都合 3 名の参加だった。

「それじゃ、皆さんお集まりになりましたので、今日のスペシャルイベントをはじめます。」
「(メンバーに)沖縄楽器(三線)ができる人がおりまして。。。」

今回は、来場者も少なく、通常、10～15 分のところ、熱いお湯を足しながら、延長サービスをしながら、メンバーの沖縄民謡で楽しんでもらった、特に、沖縄の楽器の音色にあわせてお囃子をいれながら楽しんでもらった。「なみだそうそう」など、お馴染みの曲は、皆さんで、口ずさみながら沖縄の雰囲気を楽しむことができた。
(拍手)
こころも、身体も温まり、ついついお話がはじまる。

◆富岡町 60 代女性
「あーよかった。ほんと、沖縄に行った見たいだわ。」
「足湯に浸かって、民謡聞いて、踊って唄って、楽しかった。ありがとね」
「そう言ってもらえれば、ありがたいです。」
「あの時(2011/3 月)沖縄に行こうとしてたんよ」
「私は、行かんかったけど、友達は出かけて。。。」
「震災には遭わんかったけど、帰る家がなくて。」
「いきなり、会津若松(避難所)だったらしい。」
「どっちがよかったか。。。」
「へーっ、そんなことがあったんですか？」

「そうそう、あれは、14 時 46 分。ちょうど、今頃で、その日はプールに行く予定だった。」
「けど、その日は、朝から、何となく億劫で、プールは止めて、お風呂だけにした。」
「お風呂だけなら、15 時頃に出かけるので、ちょうどその準備をしとった時。。。」
「もし、プールにいってたら、向こう(プール)で、水着で逃げていたんでしょうね。」
「プールの屋根がおちたらしいから、大変だったでしょうね。」

「神様に守ってもらったんかね？」
「偶然ですよね？」
「偶然と言えば偶然ですよね。」
「それを思うと、プールに行かんでよかった。」
「あーゆーのを、『虫が騒ぐ』って言うんでしょうね。」
「ほんと、何の気なしに、プールに行く気がしなかった。。。。」

「でも、今日は、少ないのね。」
「週末は、お子さんやお孫さんがいらっしゃるので、一緒に過ごす人が多い。」
「もっと宣伝しなきゃわからんよ。」
「そうですね、次回からもう少し宣伝します。」

人数的には、少なかった感否めないが、その分、アットホームな繋がりが出来たと思う。参加者の皆さんの笑顔が印象的であった。

【2012/1/24】
『ほぐし隊』発足。昨年、11 月以来、いわき市の仮設住宅で足湯のボランティアをしているが、そろそろ、いろいろなところで説明したり、アピールする機会も増えるだろう。活動内容などを紹介する、一般公開用の Google での Web 頁の公開と、スタッフ間の「業務連絡」用に、Facebook のページを立ち上げた。
そこで、組織の名前が必要になる。参加されるのはお年寄りがメイン。スタッフ募集の際にも分かりやすい名前が求められる。横文字や、カナカナよりは、「ひらがな」でほっと、あったかくなるような言葉。そこで、名づけて、『ほぐし隊』とした。災害で、傷つき、凝り固まったしまった、こころと身体をほぐしたい。という思いを込め、覚えやすく分かりやすい、親しみも感じる。我ながらいいネーミングだと思った。隊というからには、メンバーにも意識を持ってもらって。。。実際にやることは、「ほぐす」という目的に背くものでなければ、何でもあり。これまで、「足湯」、「ツボ押し」を主体に活動していたが、「アロマ」、「マッサージ」、「ヨーガ」など、更に、「沖縄民謡」も取り入れている。勿論、このようなアトラクションは、手段であり目的ではない。要するに、ほっとするストレスフリーな居場所を提供し、楽しんでもらい、喜んでもらい、笑ってもらうことが目的である。
早速、メンバーの名刺や名札を作り、活動中に付けてもらうことにした。隊のメンバーである自覚が芽生え、結束力も強くなることだろう。

【2012/1/29】
事実上、「ほぐし隊」としての最初の活動だ。今回は、4 回目の訪問。いつもの、元気な姉妹を含め、10 名の参加者が集まった。やはり、事前にビラを巻いた事が効いたのだろう。スタッフや機材の数などのリソースを考えた場合、10 名前後が、適当な数だろう。これ以上多いと、慌しくなるし、第一、ゆっくりなんて出来ない。待ち行列なんてできたら、お話なんて出来ないだろう。その辺りは、人数が集まってから考えることにしよう。
ふと、窓の外を見いると、集会所の脇の駐車場から真直ぐに、入り口に向かってあるいていらっしゃる人を発見、あ！新規のお客様だ。外から帰っていらっしゃって、足湯であったまっていかれるのだろう。バケツにお湯をはり、直ぐお出しできるよう準備した。話をしていると、近所の借り上げに住まわれているお宅からの帰りらしい。ご自身も被災され、この泉玉露にお住まいとのことだが、ボランティア活動として、付近の仮設住宅や借り上げに移られた方々とのパイプ役として情報交換役をされているとのこと。借り上げは、仮設に比べれば、多少拾い。だた、少人数なので孤立しがちだ。仮設との行き来も段々億劫になり情報が行き届かない。支援物資なども届かない。このため、一旦は、借り上げに出られた方も、仮設への転居を希望されているが、応募者も多く、待ち行列ができている状態らしい。とはいえ、仮設から出て行く見通しも立たず、入居できる宛てもなく、待ち行列にエントリするしかない。
仮設にしろ、借り上げにしろ、避難所から出たら、どのような状況になるのかは予測も立たないまま、また説明も不十分だったのだろう。ここでも、「格差」があるのだ。ただ、皆さん、我慢強い、不満はあるが、口に出さない。こんな生活がいつまで続くのだろうか？他の仮設の状況などを御話ししていると、ふと、郡山のビックパレット(避難所)の話がでてきた。

◆富岡町 60 代女性
「私も、ビッグパレットに御邪魔したことがありまして、ホールでマッサージをしたのでしうが、みなさん、(仮設へ退去するため)荷造りされていました。」
「それ、何日頃ですか？」

「8/28 です。」
「じゃぁ、あの時の？」
「え！、あの脇で、荷造りされていたお母さん？」
「2,3 人でいらっしゃってましたよね？」
「そうです。お忙しそうだったので、お声掛けできませんでした。」
「いやぁーそう言えば、そんな、お顔だったかも」
「思い出しました。またお会いできるなんて、感激です。」
「ここ(泉玉露)は、富岡の方がいらっしゃると聞いて、何か、ご縁を感じていました。」
「定期的に来ていますので、借り上げに写られた方もお誘いください。」

再会ってすばらしい。これまでのボランティア活動のなかで、いくつかの再会の経験がある。これは、活動を継続しているからこそ体験できることであり、一過性のボランティアでは、決して味わうことの出来ない感激だろう。このような、再会が、「絆」を太くしていくのだろう。偶然とはいえ、本当によかった。

帰宅後、この方からご丁寧にメールをいただいた。次回は、参加できないが、2/18 には、また来ていただけるようだ。再会が楽しみである。

仮設住宅の入口にあるテーブルに「生きている　生きてゆく」という本があった。表紙には、「ビックパレットふくしま避難所記」という副題がついており、ページをめくりと、ビックパレットの写真集だ。震災以来、8/31 まで避難所として使用されていた 5 ヶ月を写真集として綴っている。私が訪れたのは、閉所間近の 8/28。ほんの数時間であったが、あの光景が目に焼く付いており、どのシーンも懐かしい風景だ。カメラを向けられた人々は、笑顔で写っている。ただ、カメラを向けられないときは、言いいようのない悲しみや怒りに包まれているのだろう。せめて、カメラを向けられた時くらいは、笑顔になろう。そんな中で、当時、地元の大学生がボランティアでやっていた、足湯がクローズアップされている。私が落ちずれた時は、既に「足湯」のコーナーは閉鎖されていたが、マッサージをして差し上げた方々から、足湯を懐かしむ声もあった。あの時、聞いた足湯のすばらしさを思い出し、どこかでやりたい。その思いが、今、この仮設住宅で実現している。この本でも「足湯」の効果を紹介しているが、足湯が 2500 人の心をほぐした。と言っても過言ではないだろう。足湯ってしばらしい。そして、我々がやっている活動は、間違いない。と確信した。『ほぐし隊』の原点は、ここにあるのだろう。

【2012/2/4】

5 回目となると、かなり慣れてきた。今日は、何名いらっしゃるか？早速、馴染みのお客様。もう 3 回参加いただいている。既に、4 名のお友達にお声掛けいただいているとのこと。ありがたいことです。パイプ椅子に座っていただき、膝を折ってハンドマッサージや、足や膝を揉んで差し上げる。こうすることにより、目の高さががさがり対面しながら、お話しができる。ベストポジションだ。皆さんが集まった頃あいを見て、「沖縄民謡」をやらせていただいた。お馴染みの「花」は、みんなで唄うことができました。

♪泣きなさ～い。笑いなさ～い。いつの日か いつの日か 花を咲かそうよ。♪

唄った後で、定番の「おしるこ」or「甘酒」のサービス。皆さんをトロトロ。一段落したところで、第 2 弾。5 名のが方が来場。自然な感じで入れ替えができました。またまた、沖縄民謡と甘味サービス。皆さんに楽しんでもらって、よかったよかった。「おしるこ」、「甘酒」は、大成功！スタッフも楽しまなきゃ。足湯しながらの「三線」。主催者側、参加者の隔たりなく、みんなが、フラットな関係で一緒に楽しむ。これが、「絆」っていうのだろう。

スタッフの一人が、集会所の壁に吊り下げられている「千羽鶴」に書かれているメッセージを見つけた。「原発の収束、そして一日も早く生まれ育った富丘へ帰りみんなで笑いあう日が訪れる事をお祈りいたします。」「富岡に帰りたい。。。」これが、こころの奥底から湧き出るメッセージなのだろう。現地の方々の思いに寄り添えば寄り添うほど、じーんとした思いがこみ上げてくる。この感覚は、現場に来なければ分からないことだろう。

【2012/2/18】

今回で、この仮設住宅での活動も 6 回目。新しいアイテムとしてバランスボールを持ち込んだ。更に、甘味として、「おしるこ」、「甘酒」に加え、「くず湯」を追加した。前日の雪は上がったものの風が冷たい日であったが、リピータ、初めての方 5 人の子どもを含め 18 名の参加者で賑やかだった。バランスボールや、綿菓子などで子どもにも楽しんでもらえただろう。活動後、スタッフも「おしるこ」をいただき、子どもたちにも手伝ってもらい、片付けや、ビラ配りなどをおこなった。

開始時間直後に、1 名の常連さんがいらっしゃった。実は、間違えて 10 時に来て時間を確かめて出直されたとのこと。間もなく、2,3 人と続けて常連さん。初めての方も含め、6 名。バケツが足りない。最初の方を追い出すわけにも行かないが、気を遣っていただき退席いただき、待ち時間も少なく、スムースに繋げることができた。

その後も、三々五々いらっしゃる参加者と、マッサージを終え退席される方。待ち時間を最短にして回すのが難しい。お湯が間に合わず、お待ちいただく間に、グリグリボールで手のひらをマッサージしてもらうなど小物を活用しながら場を繋ぐ。そこへ、いつもの姉妹+3 人の男の子が雪崩れ込んできて、騒がしく走り回る。ストーブを避けるように、誘導してバランスボールで遊んでもらった。バランスボールも本来の使い方でなく、空気を抜いて遊んでいる。空気の抜けたバランスボールを頭から被り、きのこのようになって遊んでいる。その顔が屈託なくとっても幸せそうだ。仮設住宅で暮らしているということを一瞬忘れさせるような笑顔、本当に「いい顔」をしている。思わずデジカメを向けた。一般に、仮設住宅では、個人の写真を撮影することはタブーであるが、どうしても撮りたくなった。すると、他の子どもたちも、ボクも私もと順々にカメラの前で「きのこ」になって笑顔を作る。きっと、よい思い出になるだろう。プリントして次回持ってこよう。

ここのみなさんは、富岡町から郡山のビックパレットに避難された皆さんで、避難所からは、抽選でそれぞれの仮設住宅に移られたと思っていたが、実際には、この泉玉露に辿りつくまで、何度も引越しをされているようだ、多い人では、6 回、8 回とのこと。引越しに度に、高齢の方は、「わたしは、ここで死ぬから、もう引っ越さない。」という気持になり、家族に説得されながら、移動されるそうだ、不自由な環境の中、落ち着かない日々を送られ、今、やっと、仮設ではあるものの、落ち着いたようだが、この後、どうなるのか、ただ、富岡には帰れないだろうとの思いから、富岡の櫻並木の写真を見ながら、切々と思い出が出てくる。

そこへ、「ほっこりカフェ」の主催者がいらっしゃった。以前に、お会いしたことがある、地元の牧師さんだ。いろいろと情報交換させていただき、泉玉露以外の仮設住宅でも活動されているとのこと。「ほぐし隊」も他の仮設住宅にも展開したい旨をお話し、日程が合えば、共同で開催することも検討することとし、「ほぐし隊」の名刺を出し、連絡先を交換して別れた。

【2012/3/4】
今回は 7 回目。三線(沖縄民謡)も 3 回目。定番となった、甘味に加え、「ひなあられ」を追加した。参加者も殆どが、リピータであり、お誘い会わせで来ていただける。開始時間直後に、三々五々、リピータの方々がいらっしゃった。今回は三線の奏者の応援もあり、盛り上った。参加者にも手拍子やマラカスを振って楽しんでいただいた。
また、地元の新聞社による「アンケートインタビュー」があり、当時の状況が赤裸々に話されていた。揺れから津波が襲ってくるまで、そして、その後の避難から仮設住宅へ移り住むまでの経緯は、人それぞれであり、同じ地域に住む「ご近所」さんであるにも関わらず、まったく違っており、最終的に、この仮設住宅に移られている。被災されたフィリピン出身の方にも始めての足湯を体験していただいた。今回の震災を通じ、日本人の「絆」や「心」に触れ、大変ではあるけれど、元気をいただけた。とのことだった。

◆富岡町 60 代女性
「あの時、庭木の剪定をしていたら、波打つような揺れが来て、ただごとではないと思った。」
「立っていられないので、木に抱きついて、揺れが治まるのを待った。」
「しばらくすると、消防団の人の『津波だ！逃げろ！』という声があり、着の身着のまま逃げた。」
「津波だ！という声で、軽トラで津波を見にいった人がいた」
「が、その後、第二波が着て、車は濁流に呑まれ、命からがら、ずぶぬれになって戻ってきたが助かっただけでもよかった。」
「私は、避難のアナウンスは聞こえなかった。」
「海から、1km くらい離れているし、まさか水が来るとは思わなかった。」
「本当に水が来たと聞いて怖くなって逃げた。」

◆富岡町 30 代女性
「日本人は凄いと思った。」
「他人のために、自分を犠牲にしたり、無償で手伝いの手を差し伸べる。」
「こまった時は御互い様、できる人が手助けをする。」
「震災を通じて教わったことだ。」
「言葉が理解できないところも、本当に親身になって教えてくれる。」
「ありがたいという言葉も教わった。」
「こんなことになって、こなければ良かったとは思わない。」
「日本に来て、大変だったけど、来なければ分からないことがいっぱいある。」
「でも、こんなことになって、こなければ良かったとは思わない。」
「皆さんも、いつも、来てくださって、ありがとう。」
「『足湯』というのはやったことがないので、やりにきた。」
「気持いいし、こうやって、お話ができるのが楽しい。」
「今度は、3/18 に来ますので、また、遊びにきてください。」

◆富岡町 70 代女性の会話
「一時帰宅の案内きた？」
「うちは、まだ来ない。」
「今回は、3 回目、もう直ぐ案内がくるだろう。」
「同じとこ住んでたのに違うんだね。」
「うちらは、親戚んとこから、仮設に来たんで、いろいろちがうんやろ？」

その後、手付かずで、荒れ果てた家を見る気持はどんなであろうか？とはいえ、一時的であるにしろ、家に帰ることは「楽しみ」のようだ。ただ、帰れば帰ったで、いろいろなことがいやでも思い出されるのだろう。

さまざまな思いを持ちながら、このような催しに出かけることで暗くなるのではなく明るく考え、不自由でありながら、仮設での生活を楽しんでいらっしゃる様子も伺える。近くに、川内のみなさんがいらっしゃる仮設があるとのこと、機会があれば訪問したい。また、仮設住宅内でのボランティアにより、他の仮設に移られた方々や借上げに移られた方との連絡も取られている様子であり、泉玉露だけでなく、他の方々もお誘いしていただき、情報交換の場を提供していきたい。

まもなく、3/11 を迎える。この泉玉露応急仮設受託でもいろいろな行事が計画されているのだろ。また、住民のみなさんもそれぞれの思いで、行事に参加されることだろう。

第 4 章　震災を知らない子供たちへ

これは、国難である。また、多くの論評がなされているように、明らかに、「人災」である。「人災」となると、東電が悪い、政府の初頭動作やその後の対応が悪いなど、いろいろなご意見もあるだろうが、起きてしまったことには、変わりがなく、この災害、事件を事実として受け止め、なんとか復興しなければならない。一時的には、犯人探しも必要かもしれないが、犯人が見つかったとしても、被災地が元通りにならないだろう。そして、誰が、犯人でも、結果は変わらないだろう。ただ、根本的な原因は、行き過ぎた高度成長と資本主義、成果を重視するが故、大切なものを見失ってしまったためではないだろうか。今回の震災は、このようなことを抜本的に見直し、考えて直してみるよい機会であったのかもしれない。今、我々にできることは、「時が解決する」と楽観視するのではなく、ひとつでも瓦礫を整理し、ひとカキでも泥をカキだし、1 本でも雑草を抜き、ひとつでも被災された方々のストレスと軽減し、笑顔を取り戻すことである。 これまでも、多くのボランティアが、被災地を訪れ、それぞれの形で復興への活動に参加されており、今後も続けられることだろう。自治体、ボランティアなど立場の違いはあるが、目的は一つ。この、国難に立ち向かわなければいけない。そのような中で、世界的な視野の中で、日本人が生まれながらにして持っている「真摯さ」、「真面目さ」、「思いやりの心」などが見直されている。いままで、あまり感じなかったが、我々の血管の中には、日本人の血が流れている。このような言い方をすると、海外から参加されているボランティアの方々には申し訳ないが、日本の心、絆という美しい文化を世界中の方々と共有できたのではないだろうか？そして、FUKUSHIMA、TOHKOKU、TOMODACHI なども有名になった。

この震災は、歴史に残る大事件である。しかしながら、歴史上のどんな大事件も年表に書いてしまえは、一行である。この一行の中に、どれほどの命が、どれほどの挫折が、そして、どれほどの思いが詰まっているか。それを書き記し、後世に伝えたい。2011/3/11 以降に生まれ育った若い世代は、震災を知らない。(体験していない)この若い世代に、3/11 をどのように伝えるか。これは、現代を生き、震災を経験した者の責務である。

我々は、次世代を生きる若い世代に何が残せるだろう。「復興」という名の、「人類の努力の結晶」かも知れない。日本をはじめ多くの人が、この復興に関わり、一人ひとりが自分にできることを実行した。その結果、復興の道が開け、日本が生まれ変わる。美談だけではない。現在、世界的な課題とされているエネルギー問題、食糧問題、環境問題、そして、安全で健康で安心して、暮らせる環境を遺さなければならないだろう。一日も早く、震災前の状況に復興させると共に、未来を見据えたよりよい快適な生活環境を建設しなければならない。美しい自然、その自然から得られる安全なエネルギー、そのエネルギーを効率よく使い、運用する。人々の幸せ、健康、よりよい文化を後世に遺さなければならない。

21 世紀は「物の現代」、自動車をはじめ、電化製品、通信、インターネット、携帯電話に PC、人々は、「便利さ」と「快適さ」を謳歌しているが、その裏側で、大切なものを見失いかけてはいないだろうか。これらの発明、発見は、人々を幸せにしなければならない。そのためには、本質、正義、美学、人間性、繋がり、絆などを考え、目先の便利さや効率だけに振り回されることなく、道理や原則を理解し、物事を大局的に捕らえなければならないと思う。また、これまでの、企業や会社、「組織」という枠組みから、「個」の時代に移りつつあるように思う。個人や、個性に価値観や可能性を見出し、尊重して活用する。今後は、組織という概念も、個を集合体として捉え、固定的な概念ではなく、流動的な物として考えるように変っていくのではなかろうか。「個」とは「わがまま」ということではない。自分の個を尊重してもらうためには、相手の個を尊重しなければならない。このように、お互いを尊重し、認め合い、メ

ッシュ構造の中でバランスし、多様性の中で、トータルの価値観を高めていく、きっと、次世代のネットワーク社会はこのような構想ではないだろうか。近い未来は、このような世界になって行くのではないだろうか。

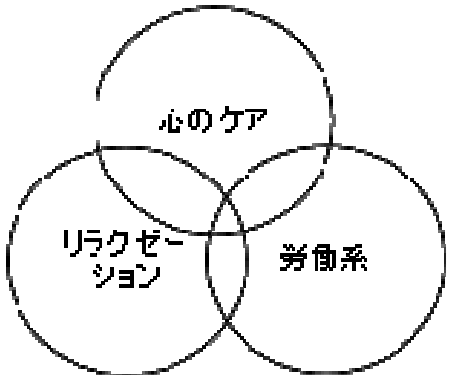
夏場の電力不足の懸念から、節電、花火の自粛など、例年とは違った夏であった。しかしながら、暦はかわらない。被災地では、初めての夏を迎えた。いわゆる初盆である。この時期、ふるさとに帰省されている方も多いかも知れない。8 月、ボランティアからの帰り道、東北道を運転中、偶然にも、車に取り付けた iPhone から、中島みゆきさんの「帰省」が流れて来た。ついつい歌詞を聞き入ってしまった。

♪人は多くなるほど　物に見えてくる♪

確かに、TV のニュースなどで集団避難や、一時帰宅の映像を見ると、「人」を「物」のように扱っていると感じてしまう。行政、自治体など責務を全うする側の立場に立てば、致し方ないのかも知れない。ただ、アウシュビッツの収容所ではないのだ。人を人として扱う気持。これは、相手の人間性を尊重することであり、日本国憲法が定める、「基本的人権の尊重」ではなかろうか？

6 月に初めて現地を訪れて以来、様々なボランティアを経験するだけでなく、ボランティアに携わっている、いろいろな立場、そして、いろいろな感性や価値観を持った人々と関わってきた。その中で、それぞれに人の価値観は、必ずしも一致しない。しかしながら、現地で、瓦礫の中で被災された方々を見る眼差しや、志には、一種の共通点があるような気がする。それが、何であるのか？いろいろなボイランティア活動参加して思うことは、それぞれの活動は、形態も、対象も、効果も、目的も異なる。しかしながら、その根底には、1 つのものがあるように思える。そして、ボランティア活動の中で常に意識していたことは、「繋がり」と「関わり会い」だ。現地とより深く関わることで、その人の心に痛みや、心の叫びが聞こえてくる。そして、信頼関係を築き、「絆」となっていく。更に、多くの「出会い」が、出会いだけに留まらず、「再会」することで、より深い「絆」となっていることを自ら体験することもできた。

冒頭で説明したように、本書では、これまでに経験したボランティア活動を便宜的に「労働系」、「心のケア」、「リラクゼーション」の 3 つに分類して説明してきたが、これらはもっと広い概念で捉えられるような気がする。例えば、泥カキの現場で、被災者のお話を聞くこともあるし、お話しをしながら、リラクゼーションなどの各種の御手伝いをする場合もある。つまり、「泥カキに来ました。」あるいは、「傾聴に来ました」というのは、あくまでボランティアする側の勝手な分類なのではなかろうか。ボランティアを受ける立場で考えれば、傾聴でも、作業でもどちらでも関係ないのである。



更に、ここで、取り挙げていない形態でのボランティアも数多くあり、ここでの分類は、あまり意味がないものにも思えてくる。むしろ、分類するのではなく、渾然一体とした物として捕らえ、これらの合わせ技で対処する。と、考えた方がよいかも知れない。その心は、被災地のニーズは多種多様であり、刻々と変わる。これらに向かった時、既成のマニュアルでは対応できず、全てが「応用問題」なのだ。そこでは、個人の人間性が問われ、臨機応変に現場で対処することが望まれるからだ。杓子定規で測ったようなボランティアは、ボランティアを施す側の自己満足に過ぎない。被災者側に立って考えれば、心を許してコミュニケーションでき、少しでも、ストレスが軽減できればよいのであって、手段や方法は問わないのである。つまり、ボランティア活動は、境目がなくシームレスなものであり、相手の価値観に基づいて、臨機応変、頭を切替えて対処を変えていかなければならない、これが、カウンセリングの大家である、ロジャースが言うところの、「来談者中心療法」であり、相手に共感し、寄り添うということなのだろう。

震災後、最初の年末を控え、今年のボランティア活動を振り返ってみる。4 月に現地入りを思い立ち、GW 期間のキャンセル待ちを経て、6 月に初めて現地入りした時の衝撃とショックはいまでも脳裏に焼き付いている。その後、毎月のように、現地に出向き、いろいろな形でボランティア活動に参加した。その際、ボランティアの目的とする作業だけでなく、少しでも現地との繋がりを作ることに注力し、現地の生の声に耳を傾けてることを心がけ、積極的に関わりあってきた。その結果、いろいろなお話をしてくださった方々や、ボランティア仲間での「絆」ができ、現在に至っている。皆さまの支援や助言、ご協力もあり、この半年、貴重な体験ができたと思う。

来年以降、ボランティアはどういう形で展開されるだろうか？一部地域には、まだまだ手つかずの瓦礫などが残っているものの、これまでのように、ボランティアバスツアーを仕立てて、いわゆる人海戦術的な作業も少なくなることが予想されるばかりか、福島の「浜通り」地区など原発に近い地域は、未だに立ち入り制限などもあり、アクセスもままならない。浜通りの国道 6 号線と JR 常磐線の復旧が手が付かず、復旧が遅れている。このため、この地域にアクセスするためには、中通り(東北道、東北新幹線)を経由するが、福島、郡山がある中通りから、浜通りへのアクセスが、山越えをする必要がある。このルートは、今後、雪に閉ざされる可能性があり、極端にアクセスが悪くなる。ボランティア以前に、生活必需品の物流が危ぶまれる。また、今後は、「除染」という切り口がクローズアップされていくだろう。福島県を中心に、立ち入り禁止区域のみならず、少しでも、「除染」進め、生活環境の安心、安全を確保しなければならない。また、未だ、帰宅できない方々にとっては、正月どころではないだろう。仮設ではなく永住となる可能性を含めた対処も必要だろう。いろいろな意味で、この冬が正念場だろう。

永い目でみれば、いつまでもボランティアでは賄えないだろう。企業の CSR でもない。他県などから出向いていって活動する形ではなく、現地主導で、現地に根ざした草の根的な活動が必要となるだろう。今後、時が経つに連れ、ボランティアへの参加メンバーは、減ることはあっても増えることはないだろう。このような環境の中で、継続的で、持続可能なプログラム(サステイナブル)にするためには、ボランティアのような無償サービスでは限界があり、何らかの形での有償サービスに切り替え、事業化していくことが必要であろう。これが、「ソーシャルビジネス」という切り口なのだろうか。その場合、NPO などの非営利団体にするか、株式会社のような営利目的の事業形態にするかなど、いろいろな議論がある。ただ、ボランティアでは続かない、非営利では限界がある。

そこで、営利事業を考える場合、収益性、事業目的などが焦点となってくるだろう。改めて、ドラッカーの言葉を思い出して、問うて見よう。「顧客」はだれなのか？サービスを受ける人、そのサービスの対価を支払う人、地元自治体、国、東電などいろいろな組織があるが、それらもこれから整理が必要だろう。やはり、ボランティア、CSR の延長線では限界があるように思う。ちょうど、ノーベル平和賞を受賞した、ムハマド・ユヌス氏がバングラデシュに「グラミン銀行」を創設したように、新たな価値観で、新たな切り口での「事業」が望まれていると思う。被災者側も意識を改革する必要もあるだろう。ユヌス氏曰く、「物もらいに慣れてくると、自立できなくなる。」のである。一部には、義捐金や寄付金で、お酒を飲んだり、パチンコ屋に通っている被災者の報道に触れると、だれもが疑問を感じることだろ。仕事がない。と嘆くのではなく、知恵を絞って、仕事を作りたい。これが、復興の第一歩であるような気がする。また、これまでのボランティアも、サービスを提供する事業として活動することで、「責任」が生じ、「品質」という概念が生じる。その結果、事業としての付加価値が生まれ、最終的には、ステイクホルダー相互の関係性において、Win-Win の関係が築けるのではなかろうか。事業化に関して、営利主義とか、人の不幸に付け込んでというようなご意見もあるだろう。ただ、現在の CSR やボランティアのような形で、「品質」と「責任」という概念が薄いレベルでの支援の是非も問われる。更に、事業化することで、「コスト意識」や、「改善」でサービスそのものがブラッシュアップされていくだろう。この方が、結局は、現地のためになるのではなかろうか。

また、12/7、復興策の一環として「特区法」が成立した。特区法の是非を巡り、これまでにも多くの議論がなされているが、規制緩和による民間企業の誘致が産業と経済を刺激することは間違いないだろう。しかしながら、地元では、大企業による地場産業の乗っ取りの如く捉える向きもある。ただ、金が回らなければ、経済は復興しない。そのための手段と割り切り、地元産業の保護策は、各論として、別途考えることはできないだろうか。総論 OK で各論は要検討という状態で、関連法規の整備を進める話だろう。一部の感情論で全てを否定することで、多くの可能性を捨てることにはなりはしないか、慎重な議論が必要である。いろいろな動きの中、具体的には、以下のような、事業化の切り口が考えられる。

・福島県を中心とした除染作業(作業者の技能研修と資格認定制度)
・失われた就労を回復させるための雇用の創出と就業カウンセリング
・仮設住宅への商業施設の誘致
・仮説住宅の居住空間の改善 TMO(Town Management Organization)
・仮設住宅での自助的コミュニティ、自治会の立ち上げ
・仮設住宅などでの IT 活用促進と IT 成熟度育成教育(パソコン/携帯教室)
・医療チームと連携した形での心のケアを中心とした活動(ニーズと人材のマッチング)
・瓦礫撤去、泥カキ作業
・鉄道、幹線道路の復旧
・漁港、魚場の整備、復旧
・業務用設備のリース、レンタル(船舶、冷凍庫、食品加工設備など)
・公共施設の復旧(墓地、集会所、公園など)
・災害対策と宅地造成
・地場産業を基軸とした、村づくり、町づくり(特産品の物産展など)
・自治体、社協、ボランティアセンターとの情報共有と活用

これらの構想を一人で悶々と考えていたが、その後、K.S さんから情報提供をいただいた、「東松島市復興まちづくり計画(案)」の内容と被ってくる部分も多い。市長を中心に、議会レベルで一つ一つを慎重に協議されている様子。また、市報などからも、市民の復興に向けた元気とエネルギーが伝わってくる。最終的には、「それは、現地の役に立ちますか？」という本質を問う判断基準で仕分けることになるだろう。また、このような施策は、被災した岩手、宮城、福島各県のそれぞれの市町村でも、同様な復興策として、お手本になり得るものであり、各市町村もお互いの活動を参考にしながら計画を策定していることだろう。つまり、これらは、「横展開」が可能であり、市町村の枠を超えた横断的に展開するための「組織体制」が望まれている。これは、民間の組織でしか出来ないことだろう。現在、各団体で行われているボランティア活動も徐々に、このような「組織」が、事業として巻き取っていく必要があるだろう。また、今後も新たなニーズが生まれてくるだろう。

このようなニーズに対応して臨機応変に柔軟に対処できることが必要であろう。これは、自治体でもない、社協でもない、CSR でもない、ボランティアでもないはずである。つまり、地元自治体や社協を除くと、CSR やボランティアは、「出向いて行く(来る)人」であり、「現地の人」ではないので、いずれ、時が経てば本業に帰る。そして、現地離れにより、活動の継続性が失われる。更に、すべてとは言わないが、CSR、ボランティアには、少なからず、「施して上げている」という意識がまったくないと言い切れるだろうか。これらは、現地からみれば、これらの意識は、どうしても、「上から目線」として感じてしまうことになるだろう。これでは、「施す人」と「施される人」という関係になてしまい。「復興」における一体感が損なわれ、真の「現地駆動型」の復興は難しくなる。仮に、これらの活動を事業として行うことを考えた場合、役員、幹部、マネジメント層以上は、地元でなくてもよいかも知れないが、現地に入って作業するメンバーは、地元の心がわかる地元のメンバーであるべきだと思う。これは、地域の雇用の創出にも寄与することだろう。

今年は、日本の東日本大震災だけでなく、地球的な規模での災害が多かった。数々の災害の中で、人々の意識や価値観、考え方が、少しずつ変わってきたのではないだろうか？また、「絆」という言葉に代表される人々の意識も変革した。同時に、原発を巡るエネルギーや環境問題は、世界的規模の経済に影響する。また、スマートシティ計画など、近未来への取り組みを加速している。3/11 を機に日本が、世界が、人々の意識が変わった。3/11 の震災は、日本で起きたひとつの天災に過ぎないが、大きな「時代の節目」と捉えることはできないだろうか。何十年か後、「震災後」というような表現で、「3/11 からいろいろなことが変わった。」ということになるのではなかろうか。「震災後」という接頭語で語られる時、その後に続く言葉は、明るく、積極的で Power を感じるような前向きな輝かしい言葉であってほしい。

我々は、この変革の真っ只中にいる。そして、このトレンドの中で、自分は何を担うのだろうか？2011 年が、震災、ボランティア元年であれば、来るべき 2012 年は、これまでに、「復旧から復興へ」を旗印に練られている、いろいろな復興計画を実践する、「復興」の年だろう。

また、これまでの過程で多くに方々が、「絆」という言葉を耳にし、メディアや活字で目にし、いろいろな形で人の心に触れ、「絆」という言葉改めて実感したことだろう。

中国の古書「論語」に、『和敬静寂』という美しい言葉がある。これは、私の「座右の銘」の一つでもあるが、相手の「個」を敬い、尊敬すれば、心を穏やかで静かな状態にすることができる。つまり、平穏で平和でストレスフリーな世界が訪れるという意味である。地球上のすべての人が、この概念を持てば、決して戦争は起こらない。また、天災など不則の事態となっても、人類として、他人の痛みを知り、共感する。そして、人を尊敬し、協力し、手を差し伸べ、共存共栄の世界を構築できると思う。

貧困、格差、エネルギー、食糧、環境、病気、地球上には、まだまだ多くの課題が山積する、これらをすべてを先送りにして、後世への宿題としてよいのだろうか。また、被災した方々、そして、それを支えるボランティアにとって、ボランティア活動とは何なのだろうか。上記のように分類したボランティアの共通項は何だろう。このような質問が、ボランティアの本質に迫る質問になるのだろう。ボランティアを施す立場から考え、一言で言い表すとすると、「貢献」あるいは、「利他」という概念になるのかも知れない。ボランティアを受ける立場をも包含して考えると、恐らく、「復興」という言葉に帰着することになるのだろう。では、復興とは何だろうか。我々人類として、また、地球上の一生命体としての究極のゴールは、種を保存し、未来へ繋ぐこと。つまり、2011/3/11 以前のこと、そして、3/11 以降に起きた様々なことを、「震災を知らない子供たちへ」、伝え、残すことではないだろうか。そのために、我々は被災地に出かける。一日も早い復興を目指して。そして、読者自身も自問してみてほしい。

「あなたは、震災を知らない子供たちに何を伝え、何を残そうとしていますか？」
そして、
「あなたは、何をコミットメントしますか？」

その答えが、この原稿であり、「ほぐし隊」なのだろう。これまでのボランティア活動を総合的に融合させた支援の形かも知れない。発足以来、知名度も上がり、興味を持っていただいている。また現地での横の「つながり」も構築しつつある。そして、継続的に、こことと身体をほぐしたい。

謝辞

本書の執筆に当たり、以下の様にさまざまな形で被災地を訪れ、いろいろなボランティア活動に参加させていただいた。活動の内容は異なるものの、一日も早い復興をという思いは一つ、活動を通じて、いろいろな方との出会い、つながり、多くのことを学ばせていただいた。また、いろいろな議論の過程で時には、ぶつかり合う場面もあったが、これらは、お互いに「本物」や「本質」を追求するが故の議論であり、かの P.F.ドラッカー氏が敬愛する、マネジメントの預言者、M.P.フォレット女史が言うところのいわゆる、「建設的コンフリクト」であると解釈し、ご容赦いただきたい。

これまで、各種のボランティアに参加し、無事活動することができましたのも、我々の活動を支えていただいた、Team Japan 300 の事務局の皆さま、福島県立医科大学の医療チームの皆さま、現地の社会福祉協議会及びボランティアセンターのスタッフの皆さま、サポートチーム G の市原信行さん、佐藤一実さん、更に、半ば強引にお誘いして、ボランティアに同行いただきました、飯塚武さん、小貫正人さん、坂本里香さん、宮古英栄さん、Team Japan 300 の江口千草さん、林玲子さん、平井加代子さん、また、ボランティアバスの企画及び現地までの足と宿を確保していただいた、石塚観光の綿引社長をはじめスタッフの皆さま他、多くの方々のご支援とご協力の賜物であると思います。略礼ではございますが、紙面をお借りして感謝を申し上げたいと思います。

また、現地で貴重なお話をしていただいた、K.S さんをはじめ、ツボ押し、マッサージや足湯を通じ、現場の生の声としてお話をいただきました方々や、今なお、不自由な避難生活をされている皆さまに、一日も早く笑顔が戻りますよう、お祈りしております。そして、年が明け、新たな気持ちで出会いと繋がりを求めてまた、現地に出向く、否、「出向く」のではなく、「ただいま」と言って、笑顔と共に「帰る」である。